

一本谷遺跡

佐賀県三養基郡上峰村大字坊所所在
弥生時代集落跡、円形周溝墓、古墳、
火葬墓等の発掘調査報告書

1983年3月

上峰村教育委員会

一本谷遺跡 正誤表

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|-------|----|------------|-------------|
| 59 | 12 | 手塊土器 | 手握土器 |
| 100 | | Fig. 87 鹿丁 | Fig. 87 右包丁 |
| 107 | 3 | 銅腕 | 銅腕 |
| 107 | 25 | 銅腕 | 銅腕 |
| 110 | 25 | 銅腕 | 銅腕 |
| 119 | 29 | 三日月町戌 | 三日月町戌 |
| PL. 8 | | 2, 3 天地逆 | |

序

昭和55年、佐賀県住宅供給公社により上峰村大字坊所に大規模な住宅団地建設の計画が立てられました。従来から上峰村は古代遺跡の宝庫として知られていますが、予定地も例外ではなく、埋蔵文化財の包蔵が予期されましたので、私たちは遺跡の保護について公社と再三にわたり協議を重ね、発掘調査を実施して遺跡の性格を明らかにして、その詳細を記録にとどめることになりました。

調査は現地調査を56年7月から同12月14日、引き続き整理作業や資料調査を57年度まで実施しました。その結果一本谷遺跡は弥生時代の大集落であることが判明するなど多大な調査成果をあげることができました。

ここに発掘調査報告書を刊行し、学術資料として、また住民の共有財産としての文化財を大切に保存してゆくための資料として役立てていただければ幸いです。

この調査にあたってはその費用を負担していただいた佐賀県住宅供給公社、調査を担当していただいた県教育委員会文化課の皆様はじめ、地元住民の方々献身的なご協力をいただきました。ここに心からお礼申し上げます。

昭和58年3月

上峰村教育委員会
教育長 重松守男

例 言

1. 本書は佐賀県住宅供給公社による上峰団地建設に伴ない、上峰村教育委員会が発掘調査を実施した一本谷遺跡とくずれ塚古墳についての調査報告書である。
2. 発掘調査は佐賀県住宅供給公社の委託事業として、上峰村教育委員会が主体となり、調査の実際は佐賀県教育委員会文化課がおこなった。
3. 遺構の実測は調査員、調査補助員などがおこなった。
4. 出土した遺物の整理や記録類の整理は佐賀県文化財資料室でおこなった。担当したものは下記のとおりである。
実測……藤原倫子、野口百合子、畠瀬直子、松崎恭子、武藤直子、馬場美奈子、青木瑞枝
トレース……藤原倫子、江副悦子、野口悦子、
復元……廣瀬敏子、村瀬邦子、高畠澄子、古川万鶴代
5. 遺構の写真撮影は七田忠昭がおこない、遺物の写真撮影は原口定（文化課調査第1係）がおこなった。現像・焼付作業は原口定、古賀栄子がおこなった。
6. 遺跡の航空写真は陸上自衛隊九州地区補給処の協力で撮影されたものであるが、撮影者は第四飛行隊の田中信行写真陸曹である。
7. 本書の執筆・編集は七田忠昭がおこなったが、レイアウトについては、本文・挿図は藤原倫子、図版は友貞菜穂子（文化課調査第1係）、池部悦子（資料室）の協力を得た。

凡 例

1. 遺構番号は一連番号を付し、その前にS B（住居跡）、S K（貯蔵穴・土壙）、S T（周溝墓・古墳）の分類記号を標記したが、本文中ではS Tは用いず、それぞれ、円形周溝墓・くずれ塚古墳とした。
2. 遺構の法量はm単位、遺物の法量はcm単位を原則として用いた。
3. 遺構配置図と個々の遺構実測図中の北方位はすべて磁北である。しかし既製の地形図を用いた図面は上方が座標北である。
4. 遺物実測図中の個々の遺物は一連番号を付したが、図版の遺物写真的番号と一致する。県教育委員会文化課文化財資料室では個々の出土遺物に遺物登録番号を付し、整理をおこなっているが、巻末にこれの対照表を掲載した。

本文目次

| | |
|-------------|-----|
| I. 位置と環境 | 1 |
| II. 調査の経過 | 7 |
| 1. 調査に至る経過 | 7 |
| 2. 確認調査 | 8 |
| 3. 発掘調査 | 10 |
| III. 一本谷遺跡 | 13 |
| 1. 遺構 | |
| (1) 遺跡の概要 | 13 |
| (2) 壴穴住居跡 | 15 |
| (3) 貯蔵穴・土壤 | 33 |
| (4) 円形周溝墓 | 54 |
| (5) 火葬墓 | 54 |
| (6) その他の遺構 | 56 |
| 2. 遺物 | 58 |
| (1) 弥生時代の遺物 | 58 |
| (2) 古墳時代の遺物 | 102 |
| (3) 平安時代の遺物 | 102 |
| IV. くずれ塚古墳 | 104 |
| 1. 概要 | 104 |
| 2. 遺構 | 105 |
| (1) 墳丘・周溝 | 105 |
| (2) 石室 | 106 |
| 3. 遺物 | 107 |
| (1) 古墳時代の遺物 | 107 |
| (2) その他の遺物 | 112 |
| V. おわりに | 117 |

挿 図 目 次

| | |
|-----------------------|----|
| Fig. 1 周辺遺跡分布図 | 3 |
| 2 上峰塚地位置図 | 7 |
| 3 確認調査トレント位置図 | 9 |
| 4 一本谷遺跡及びくずれ塚古墳調査区位置図 | 11 |
| 5 主要遺構配置図 | 14 |
| 6 S B001住居跡実測図 | 18 |
| 7 S B004住居跡実測図 | 18 |
| 8 S B013住居跡実測図 | 19 |
| 9 S B034住居跡実測図 | 19 |
| 10 S B038住居跡実測図 | 20 |
| 11 S B039住居跡実測図 | 20 |
| 12 S B040住居跡実測図 | 21 |
| 13 S B041住居跡実測図 | 21 |
| 14 S B047住居跡実測図 | 22 |
| 15 S B048住居跡実測図 | 22 |
| 16 S B049住居跡実測図 | 23 |
| 17 S B067住居跡実測図 | 23 |
| 18 S B069住居跡実測図 | 24 |
| 19 S B070住居跡実測図 | 24 |
| 20 S B077住居跡実測図 | 25 |
| 21 S B085住居跡実測図 | 25 |
| 22 S B087住居跡実測図 | 26 |
| 23 S B088住居跡実測図 | 26 |
| 24 S B089住居跡実測図 | 27 |
| 25 S B090住居跡実測図 | 27 |
| 26 S B091住居跡実測図 | 28 |
| 27 S B093住居跡実測図 | 28 |
| 28 S B094住居跡実測図 | 29 |
| 29 S B099住居跡実測図 | 29 |
| 30 S B100住居跡実測図 | 30 |
| 31 S B103住居跡実測図 | 30 |

| | |
|----------------------|----|
| Fig.32 S B104住居跡実測図 | 31 |
| 33 S B113住居跡実測図 | 31 |
| 34 S B114住居跡実測図 | 32 |
| 35 S B134住居跡実測図 | 32 |
| 36 S B135住居跡実測図 | 33 |
| 37 貯藏穴・土壤実測図(1) | 37 |
| 38 貯藏穴・土壤実測図(2) | 38 |
| 39 貯藏穴・土壤実測図(3) | 39 |
| 40 貯藏穴・土壤実測図(4) | 40 |
| 41 貯藏穴・土壤実測図(5) | 41 |
| 42 貯藏穴・土壤実測図(6) | 42 |
| 43 貯藏穴・土壤実測図(7) | 43 |
| 44 貯藏穴・土壤実測図(8) | 44 |
| 45 貯藏穴・土壤実測図(9) | 45 |
| 46 貯藏穴・土壤実測図(10) | 46 |
| 47 貯藏穴・土壤実測図(11) | 47 |
| 48 貯藏穴・土壤実測図(12) | 48 |
| 49 貯藏穴・土壤実測図(13) | 49 |
| 50 貯藏穴・土壤実測図(14) | 50 |
| 51 貯藏穴・土壤実測図(15) | 51 |
| 52 貯藏穴・土壤実測図(16) | 52 |
| 53 貯藏穴・土壤実測図(17) | 53 |
| 54 円形周溝墓実測図 | 55 |
| 55 円形周溝墓主体部実測図 | 56 |
| 56 火葬墓実測図及び復元図 | 57 |
| 57 住居跡出土土器・土製品実測図(1) | 67 |
| 58 住居跡出土土器・土製品実測図(2) | 68 |
| 59 住居跡出土土器・土製品実測図(3) | 69 |
| 60 住居跡出土土器・土製品実測図(4) | 70 |
| 61 住居跡出土土器・土製品実測図(5) | 71 |
| 62 住居跡出土土器・土製品実測図(6) | 72 |
| 63 住居跡出土土器・土製品実測図(7) | 73 |
| 64 住居跡出土土器・土製品実測図(8) | 74 |

| | |
|---------------------------------|-----|
| Fig.65 住居跡出土土器・土製品実測図(9)..... | 75 |
| 66 住居跡出土土器・土製品実測図(10)..... | 76 |
| 67 住居跡出土土器・土製品実測図(11)..... | 77 |
| 68 住居跡出土土器・土製品実測図(12)..... | 78 |
| 69 住居跡出土土器・土製品実測図(13)..... | 79 |
| 70 貯蔵穴・土壤出土土器・土製品実測図(1)..... | 80 |
| 71 貯蔵穴・土壤出土土器・土製品実測図(2)..... | 81 |
| 72 貯蔵穴・土壤出土土器・土製品実測図(3)..... | 82 |
| 73 貯蔵穴・土壤出土土器・土製品実測図(4)..... | 83 |
| 74 貯蔵穴・土壤出土土器・土製品実測図(5)..... | 84 |
| 75 貯蔵穴・土壤出土土器・土製品実測図(6)..... | 85 |
| 76 貯蔵穴・土壤出土土器・土製品実測図(7)..... | 86 |
| 77 貯蔵穴・土壤出土土器・土製品実測図(8)..... | 87 |
| 78 貯蔵穴・土壤出土土器・土製品実測図(9)..... | 88 |
| 79 貯蔵穴・土壤出土土器・土製品実測図(10)..... | 89 |
| 80 貯蔵穴・土壤出土土器・土製品実測図(11)..... | 90 |
| 81 貯蔵穴・土壤出土土器・土製品実測図(12)..... | 91 |
| 82 貯蔵穴・土壤出土土器・土製品実測図(13)..... | 92 |
| 83 貯蔵穴・土壤出土土器・土製品実測図(14)..... | 93 |
| 84 勾玉・鉄器実測図..... | 97 |
| 85 石鐵実測図..... | 98 |
| 86 石斧実測図..... | 99 |
| 87 石包丁・石製紡錘車実測図..... | 100 |
| 88 打製石器（剥片・削器）実測図..... | 100 |
| 89 砥石・石皿・叩き石・磨石実測図..... | 101 |
| 90 円形周溝墓出土土師器実測図..... | 103 |
| 91 火葬墓出土土師器・須恵器実測図..... | 103 |
| 92 くずれ塚古墳埴丘実測図（表土除去後）..... | 105 |
| 93 くずれ塚古墳埴丘・周溝断面土層図..... | 106 |
| 94 くずれ塚古墳石室跡実測図..... | 107 |
| 95 くずれ塚古墳出土須恵器実測図(1)..... | 113 |
| 96 くずれ塚古墳出土須恵器実測図(2)..... | 114 |
| 97 くずれ塚古墳出土土師器・埴輪・壺・陶磁器実測図..... | 114 |

| | | |
|--------|---------------------|-----|
| Fig.98 | くずれ塚古墳出土銅鏡拓影 | 115 |
| 99 | くずれ塚古墳出土耳環・小玉・銅鏡実測図 | 115 |
| 100 | くずれ塚古墳出土鉄器・鉄製品実測図 | 116 |

表 目 次

| | | |
|-------|------------------|----|
| Tab.1 | 一本谷遺跡出土竪穴住居跡一覧表 | 17 |
| 2 | 一本谷遺跡出土貯藏穴・土壤一覧表 | 34 |
| 3 | 一本谷遺跡出土石鐵一覧表 | 94 |
| 4 | 一本谷遺跡出土砥石一覧表 | 96 |

図 版 目 次

| | |
|--------|--|
| P L. 1 | 一本谷遺跡全景航空写真 |
| 2 | 一本谷遺跡遠景・調査前航空写真 |
| 3 | 一本谷遺跡周辺・全景航空写真 |
| 4 | 一本谷遺跡南部中部・中部北部航空写真 |
| 5 | 一本谷遺跡全景・中部、南部、北西部 |
| 6 | S B041・069・039住居跡 |
| 7 | S B087・070・134住居跡 |
| 8 | S B001・004・013・038・040・048・049住居跡 |
| 9 | S B067・085・088・089・090・091住居跡 |
| 10 | S B093・094・099・100・103・104住居跡 |
| 11 | S B113・114・135・077・034・047住居跡 |
| 12 | S K012・018・020・022・023・024・025・026・027貯藏穴 |
| 13 | S K028・035・036・042・045・050・052・053貯藏穴 |
| 14 | S K056・057・060・061・068・072・073・074・075貯藏穴 |
| 15 | S K076・082・084・151・096・098・102・103・106・110貯藏穴 |
| 16 | S K111・116・122・125・058・079・046・059・貯藏穴 |
| 17 | S K017・030・032・044・119土壤、S B088内・S B148内貯藏穴、掘立柱建物跡 |
| 18 | S K014・019・037・112・078・086土壤 |

PL.19 S B069・039住居跡・S K012・045・110貯藏穴遺物出土状況

- 20 円形周溝墓全景、主体部、周溝内土器出土状況
- 21 火葬墓
- 22 くずれ塚古墳航空写真、墳丘、全景
- 23 くずれ塚古墳墳丘、墳丘・石室跡、墳丘土層、周溝
- 24 くずれ塚古墳石室跡、銅鏡出土状況
- 25 S K021・030・045・050・051・052・058・059、S B069・091出土土器
- 26 S K060・062・072・073・086出土土器
- 27 S K110・112、S B034・039出土土器
- 28 S B039出土土器
- 29 S B039・049・041・047出土土器
- 30 S B047・049・069、S K068・051出土土器
- 31 円形周溝墓、火葬墓出土土器
- 32 石器（石鎌・石包丁・紡錘車・石斧・石刀・スクレイバー）
- 33 勾玉、鉄鏃、たたき石、磨石、石皿、砥石
- 34 くずれ塚古墳出土土器
- 35 くずれ塚古墳出土土器
- 36 くずれ塚古墳出土土器
- 37 くずれ塚古墳出土銅鏡、小玉、耳環、青銅鏡、鐵鏃、馬具
- 38 発掘調査風景

I. 位置と環境

一本谷遺跡は佐賀県三養基郡上峰村大字坊所字一本谷に位置する。遺跡は段丘の平坦な尾根と緩やかに傾斜する東西斜面上に位置する。尾根の標高は20~26m、段丘の東西水田面との比高は7~14mである。くずれ塚古墳は西方谷水田を隔てた小段丘上の標高27m付近に位置するが、同じく大字坊所字一本谷内である。

佐賀平野の東部、すなわち鳥栖市から佐賀郡にかけての脊振山地南麓では多くの洪積世段丘が発達しており、段丘に挟まれた谷底平野や扇状地性低地、南部有明海沿岸の三角洲平野は現在全国でも有数な穀倉地帯として知られる。東部佐賀平野の段丘は高位・中位・低位の3つに分類され、分布状態、およびローム層の有無その他の特徴から、鳥栖市付近、朝日山周辺、神埼・三田川・中原地域、佐賀市北方地域の4つの地域的特性が指摘されている。上峰村はこれらのうち神埼・三田川・中原地域に含まれるが、この地域は高位・中位の段丘が山麓部から南へ舌状に長く延びる地域で、段丘の分布は複雑で特異な景観を醸し出している。

上峰村は面積12.83km²で、脊振山地から南は筑後川旧河道付近までを占める南北に細長い村である。西は三田川に接するが、この町村境が神埼郡との郡境となっている。村域は村の西側を南へ横たわるように延びるいわゆる二塚山丘陵に沿っている。二塚山丘陵は北から連なる屋形原・堤・切通・下津毛・上坊所などの段丘の総称であるが、西は井柳川で横田（東脊振村）・三田川（三田川町）の丘陵と、東は寒水川で東寒水（中原町）の丘陵と分かれ。この二塚山丘陵の東麓には谷底平野及び扇状地性低地が入り込み、南方先端の寺家付近からは三角洲が広がり、現在も稻作に最適な平野となっている。ちなみに現在の耕地面積は村域の約50%に近い6.14haとなっている。

一本谷遺跡はこの二塚山丘陵のうちの堤・切通の高位段丘下位面に位置し、周辺の平野に近く、温暖な気候と相俟って豊かな水稻生産に適した位置に存在していたと言えることができる。

佐賀平野東部は県内において遺跡の分布が密なところで、上記のような段丘上には多くの遺跡が存在するが、特に弥生時代の著名な遺跡が目立っている。鳥栖市安永田遺跡¹⁾、中原町姫方遺跡²⁾、上峰村切通遺跡³⁾、上峰村と東脊振村にまたがる二塚山遺跡⁴⁾、東脊振村横田遺跡⁵⁾、同三津永田遺跡⁶⁾、三田川町吉野ヶ里丘陵遺跡⁷⁾などであるが、また有明海沿岸に近い三角洲の微高地には千代田町託田貝塚⁸⁾など多くの集落、貝塚が形成されている。これらの概要についてはそれぞれの報告に譲り、ここでは上峰村を中心として、東は寒水川流域から西は城原川流域までの地域の山麓部・段丘や段丘に挟まれた谷底平野・扇状地性低地の遺跡を中心に一本谷遺跡をとりまく歴史的環境について概観しておきたい。

旧石器時代の遺跡はこれまで本格的な調査がなされたものではなく、段丘上や斜面から断片的に石器が採集されているに過ぎない。礫器やナイフ形石器を出土した中原町姫方、ナイフ形石

器を出土した中原町町南¹⁰や三田川町萩原¹¹（東部工業団地内の旧小池付近）、ポイントを出土した神崎町日の隈¹²、有舌尖頭器を出土した神崎町竹原東山¹³などが知られるに過ぎない。

縄文時代になると山麓部に大きな遺跡が出現する。早期の押型文土器を出土する遺跡としては中原町香田遺跡¹⁴、東脊振村戦場ヶ谷遺跡¹⁵、神崎町野々内遺跡、同北外などが知られているが、数片の押型文土器を出土する遺跡は数多く知られる。さらに前期以降になると遺跡の数を増す。上峰村堤東方遺跡、東脊振村戦場ヶ谷遺跡（前期）、東脊振村寺ヶ里遺跡、神崎町城原、同孤隈遺跡（中期）、上峰村井手口、同切通西北方遺跡、東脊振村タケ里遺跡¹⁶、神崎町下朝日遺跡（後期）、中原町香田遺跡、上峰村四本谷遺跡、神崎町下朝日遺跡（晩期）などがある。これらの遺跡はほとんどが遺物の散布地として知られているものだが、最近の発掘調査で明確な遺構が検出された遺跡もいくつかある。香田遺跡では早期の集石遺構や晩期の支石墓、壺棺墓が、タケ里遺跡では後期の堅穴住居跡らしい遺構が検出され、この地域の縄文時代研究に新しい資料を提出したと言える。

弥生時代になると遺跡の数、規模ともに増大し、この地区はかつてない繁栄をみる。前期では山麓部、段丘上にいくつかの遺跡が知られる。町南遺跡では巨大なV字溝や貯蔵穴群が調査され、前期末項には大きな集落が存在していたことがうかがえる。また東脊振村三津永田遺跡や戦場ヶ谷遺跡、神崎町下朝日遺跡でも前期弥生土器の出土をみている。また少なくとも前期後半には、三角洲地帯に貝塚集落が出現していたことが千代田町上黒井貝塚などの出土土器でわかる。中期になるとこの地域のほとんどの地区に遺跡がひろがり、いくつかの遺跡群を形成する。

この地域の弥生時代の遺跡としては特に墳墓群が従来より注目されて来た。上峰村切通遺跡、同五本谷遺跡¹⁷、同村と東脊振村にまたがる二塚山遺跡、東脊振村横田遺跡、同三津永田遺跡、三田川町吉野ヶ里遺跡などでは壺棺墓や土壙墓、箱式石棺墓から銅刺、銅鏡、鉄製武器・工具、ガラス製玉類、貝輪などの重要な遺物を多数出土しており、一つのまとまりを示す。しかし中原町姫方遺跡のように500基以上の壺棺墓を出土しながら副葬品が極めて貧弱な遺跡も多数存在する。東脊振村西石動遺跡¹⁸、同西前田B遺跡¹⁹、神崎町志波屋六本松遺跡²⁰などである。

これらの弥生時代墓地はほとんどが段丘上に存在しており、今のところ墓地を営んだ集落との関連を結びつけられるものは極めて少ない。従来はほとんど手がついていなかった弥生時代の集落跡の調査も近年の大型開発に伴って増加してきた。中原町姫方原遺跡²¹、北茂安町宝満谷遺跡²²、東脊振村下石動遺跡²³、同西石動遺跡、同西前田A遺跡²⁴、同タケ里遺跡などが調査され、前記の墓地群との有機的な関連もふまえて、次第にこの地域の状況が明らかになりつつある。また東脊振村西石動・佐賀市櫻の木では中広形鋼矛の鋳型²⁵が三田川町桜馬場遺跡²⁶からは中広形鋼矛4本が発見されており、神崎町川寄遺跡周辺や千代田町託田貝塚からは鐸型土製品²⁷が発見され、青銅器鋳造や祭祀のあり方が問題となってきた。



| | | | | |
|--------------|--------------|-------------|------------|-------------|
| 1 開拓寺遺跡 | 20 茅田遺跡 | 39 黃原古墳 | 58 美多日塚 | 77 下首鳥日塚 |
| 2 山田西古墳群 | 21 横谷遺跡 | 40 須方遺跡 | 59 麻田城跡 | 78 安原遺跡 |
| 3 山田西骨壺出土地 | 22 四本木墨木遺跡 | 41 須方前方圓墳 | 60 本内城跡 | 79 下神代丘塚 |
| 4 山田西墳群 | 23 二子遺跡 | 42 須方後圓墳 | 61 上道井日塚 | 80 上池日塚 |
| 5 西石動古墳群 | 24 八子遺跡 | 43 日進原古墳群 | 62 西大石日塚 | 81 切妻古墳跡 |
| 6 西石動古墳 | 25 大字遺跡 | 44 佐久間古墳群 | 63 佐久間日塚 | 82 佐久間原本松遺跡 |
| 7 西石動原又納陽出土地 | 26 伊勢原前方圓墳 | 45 宝滿穴前方圓墳 | 64 須日塚 | 83 馬頭遺跡 |
| 8 須西山南麓古墳群 | 27 下三津原前方圓墳 | 46 斎尾斜面出土遺跡 | 65 元照日貝塚 | 84 西一本松遺跡 |
| 9 須原原西墳群 | 28 志波原開拓社古墳群 | 47 大塙古墳 | 66 吉の木貝塚 | 85 西石動遺跡 |
| 10 須原西墳群 | 29 幸上塚今跡 | 48 北風古墳 | 67 吉志神社貝塚 | 86 下石動遺跡 |
| 11 須原古墳 | 30 佐久間遺跡 | 49 須原古墳 | 68 佐久間古墳 | 87 佐久間遺跡 |
| 12 六櫻原遺跡 | 31 大塙遺跡 | 50 尾崎古分遺跡 | 69 下塚日塚 | 88 鮎石遺跡 |
| 13 天神原古墳群 | 32 横田遺跡 | 51 伏見大石遺跡 | 70 墓里ヶ原貝塚 | 89 町内遺跡 |
| 14 須原古墳群 | 33 五本木遺跡 | 52 利田遺跡 | 71 本分貝塚 | 90 一本松遺跡 |
| 15 城山石板遺跡 | 34 道土根遺跡 | 53 川守遺跡 | 72 かげ坂貝塚 | 91 くすれ原古墳 |
| 16 日進遺跡 | 35 佐久間遺跡 | 54 沼垂原古墳遺跡群 | 73 佐久間遺跡 | 92 佐久間遺跡 |
| 17 須原遺跡 | 36 須石南遺跡 | 55 二木木墨木遺跡 | 74 月丸1号貝塚 | 93 佐久間遺跡 |
| 18 須原山神籠石 | 37 上地遺跡 | 56 堀の前原遺跡 | 75 月丸2号貝塚 | 94 天神遺跡 |
| 19 熊本山石棺出土地 | 38 ドンドン落葉跡 | 57 下川原遺跡 | 76 貝別当神社遺跡 | |

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1 / 100,000)

古墳時代になると、東脊振村西一本杉遺跡⁵⁹の初現的な古墳状の墳墓や、中原町姫方遺跡、上峰村五本谷遺跡などの方形周溝墓が出現し、神崎町下朝日古墳⁶⁰では彷製鏡や碧玉製石鏡を、また上峰村四本谷では石棺から銅鏡などを出土⁶¹するなど、本格的な古墳が築造されるようになる。さらに五世紀後半になると三田川町、上峰村、東脊振村にかけて前方後円墳7基、円墳5・6基以上からなる目連原古墳群⁶²が出現し、この地域は政治的なまとまりを示すようになる。後期には山麓部、段丘を中心に中原町姫方、同上地、東脊振村下三津西、神崎町伊勢塚、同二子などの前方後円墳や、山麓部や高位段丘を中心に多くの群集墳が営まれる。中原町北部山麓地域の山田、白虎谷、一本桜・小武山・鳥巣古墳群、上峰村北部山麓地域の谷渡、奥の院、鎮西山南麓、屋形原古墳群、東脊振村山麓部の運田山、上石動、西石動、三津山田、戦場、松葉、東山古墳群、神崎町北部山麓部の三谷、志波屋六本松、花浦、朝日、猿獄古墳群などで、特に猿獄古墳群は猿獄百塚とも呼ばれるように大規模な古墳群が形成されている。

古墳時代の集落で比較的まとまった調査が行なわれたものは少ない。三田川町下中杖遺跡⁶³、東脊振村下石動遺跡、同タケ里遺跡、同西前田A遺跡、同浦田遺跡⁶⁴、神崎町馬郡遺跡⁶⁵などである。

奈良時代には下中杖、浦田遺跡などの集落跡も断片的に調査されているが、上峰村塔ノ塚廃寺跡⁶⁶や東脊振村辛上廃寺跡⁶⁷が從来より注目され肥前風土記にある神崎郡僧寺一所の比定で議論的となってきたが、律令時代においてこの地域に、寺院を建立することができる勢力があったことを示すものとして注目される。また上峰村堤土里跡⁶⁸も水域様の土壘として注目される。

平安時代にはこの地域の西半分は神崎莊と呼ばれる院領莊園に組み入れられるが、三田川町下中杖遺跡では越州窯陶磁器、綠釉陶器、木製馬鞍、青銅箸などの貴重な遺物を多く出土し、対中國貿易の拠点としての神崎莊の一つの機關を示す遺跡と考えられる⁶⁹。他に平安時代末の輸入陶磁器を出土する遺跡がいくつか存在している。また東背振村の靈仙寺跡⁷⁰における僧侶の活動が平安時代の後期に始まったことも、その出土遺物から知られるところである。

中世になると綾部城と総称される中原町北部から上峰村北部の諸山城周辺が東部佐賀平野の一大中心地となったようである⁷¹。その一つ中原町臥牛城跡では確認調査⁷²の結果、腰曲輪をめぐらせた平坦面に濠、掘立柱建物等が検出され、輸入陶磁器などが出土している。東背振村、神崎町にも多くの中世山城跡があり、平野部にも環濠の平城が多數存在している。また靈仙寺は最盛期を迎える、また平野部の集落跡からは多量の輸入陶磁器を出土している。三田川町下中杖遺跡、神崎町尾崎利田遺跡⁷³その他多くの遺跡で出土しており、輸入陶磁器がこの地域では広く一般にも普及していたことを想起させる。

中原町から神崎町にかけて特に山麓部、段丘部の遺跡を概観したが、一本谷遺跡を含む弥生時代の遺跡群は、特にこの地域とりわけ田手川、城原川流域周辺において一つの大きなまと

まりをみせている。そしてこの地域の墳墓群からは、多数の副葬品を出土し、魏志倭人伝にある国々と遺跡群との対比が可能な地域と言うことができよう。ちなみに新井白石が『古史通或問』(1716)において、倭人伝の弥奴国を肥前国三根郡に比定しているが、三根郡は現在の上峰村を中心とした地域であった。

参考文献

- 「上峰村史」上峰村史編纂委員会 1979
「東脊振村史」東脊振村史編纂委員会 1982
「神崎町史」神崎町史編纂委員会 1972
「続・佐賀の自然」佐賀県理科教育センター 1964
「佐賀県の遺跡」佐賀県教育委員会 1964
「佐賀県遺跡地図(三神地区)」佐賀県教育委員会 1979

註

- (1) 藤瀬慎博・石橋新次「袖北遺跡群範囲確認調査第3年次概要報告書」鳥栖市文化財報告書第7集 1980
(2) 木下巧・天本洋一「姫方遺跡」佐賀県文化財調査報告書第30集 1974
(3) 金闇丈夫・金闇惣・原口正三「佐賀県切通遺跡」「日本農耕文化の生成」1961
(4) 高島忠平・七田忠昭他「二塚山遺跡」「二塚山」佐賀県文化財調査報告書第46集 1979
(5) 木下元治「考古学〈弥生時代〉—神埼郡東脊振村横田遺跡」「新郷土」20-1 1967
(6) 金闇丈夫・坪井清足・金闇惣「佐賀県三津永田遺跡」「日本農耕文化の生成」1961
七田忠志「東脊振三津の石蓋櫛と内行花文明鏡」佐賀県文化財調査報告書第2輯 1953
(7) 七田忠志「其の後の佐賀県戦場ヶ谷遺跡と吉野ヶ里遺跡について」人類学雑誌 6-4 1934
(8) 松尾耕作「武田貝塚の研究」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第3輯 1932
(9) 天本洋一・七田忠昭「町南遺跡(佐賀県文化財調査報告書第58集 1983
(10) 七田忠志「原始社会の開始」「上峰村史」1979
○印中關実「人類の出現」「神崎町史」1972
(11) 高瀬哲郎・堤安信・久保伸洋「香田遺跡」佐賀県文化財調査報告書第57集 1981
(12) 七田忠志「佐賀県戦場ヶ谷遺跡」史前学雑誌 6-2・4 1934
(13) 久保伸洋「タケリ遺跡」「佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書Ⅰ」1983
(14) 木下巧・七田忠昭「五本谷遺跡」「二塚山」佐賀県文化財調査報告書第46集 1979
(15) 堤安信「西石動遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第4集 1981
(16) 久保伸洋「西前田B遺跡」東脊振村文化財調査報告書第6集 1982
(17) 1982年佐賀県教育委員会調査、高所の堀船墓地として注目される。
(18) 木下巧他「姫方原遺跡」佐賀県文化財調査報告書第33集 1976
田平徳栄「姫方原遺跡B・C地区」中原教育委員会 1979

- 多々良友博「姫方原遺跡 E 地区」中原町教育委員会 1980
- 多々良友博「姫方原遺跡・F 地区」中野建設・中野ハウジング 1981
- 七田忠昭「姫方原遺跡 G 地区」中原町教育委員会 1982
- ⑩ 東中川忠美「宝満谷遺跡」北茂安町教育委員会 1980
- ⑪ 高瀬哲郎「下石動遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第 4 集 1981
- ⑫ 岩永政博・久保伸洋「西前田遺跡」東脊振村文化財調査報告書第 5 集 1981
- ⑬ 「鏡・玉・劍—古代九州の遺宝—」佐賀県立博物館 1979
- ⑭ 七田忠昭「文様ある鏡矛について」九州考古学 No.52 1976
- ⑮ 天本洋一他「川奇吉原遺跡」佐賀県文化財調査報告書第 61 集 1981
- 天本洋一・多々良友博「佐賀県川寄利田遺跡」『日本考古学年報』日本考古学協会 1980
詫田西分貝塚からも 2 個出土している（1982 年、千代田町教育委員会調査）
- ⑯ 松尾吉高「西一本杉遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第 3 集 1981
- ⑰ 七田忠志「古代」「神崎町史」1972
- ⑱ 松尾耕作「目達原古墳群調査報告」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第 9 輯 1950
- ⑲ 七田忠昭・高山久美子・西田和巳「下中枝遺跡」佐賀県文化財調査報告書第 54 集 1980
- ⑳ 畑安信「浦田遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第 4 集 1981
- ㉑ 八尋実・諸方祐次郎「馬郡遺跡」神崎町文化財調査報告書第 7 輯 1981
- ㉒ 松尾耕作「塔の塙魔寺址」佐賀史蹟名勝天然記念物調査報告第 7 輯 1970
- ㉓ 七田忠志「肥前風土記神崎郡の條に於ける寺院に関する一察」上代文化 13 1935
- 松尾耕作「東脊振村辛上庵寺跡の調査」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第 5 輯 1936
- ㉔ 高島忠平・紅一義「堤土墨跡」上峰村教育委員会 1978
- ㉕ 七田忠昭「神崎莊における対宋貿易」「東脊振村史」1982
- ㉖ 田平徳栄他「靈仙寺跡」東脊振村文化財調査報告書第 4 集 1980
- ㉗ 「日本城郭史大系」新人物往来社 1981
- ㉘ 1982 年、中原町教育委員会・佐賀県教育委員会調査
- ㉙ 天本洋一・原田保則「尾崎利田遺跡」佐賀県文化財調査報告書第 55 集 1980

II. 調査の経過

1. 調査に至る経過

一本谷遺跡の発掘調査は佐賀県住宅供給公社による分譲住宅地（上峰団地）の造成工事に伴ない、上峰村教育委員会が実施した事業であるが、本格的な発掘調査を開始する迄には公社と県教育委員会文化課、村教育委員会の3者による協議が数回もたれた。

公社により造成計画が立案されたのは昭和55年9月であった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地でもあり、昭和56年4月7日に公社と文化課との本格的な協議がもたれ、とりあえず早急に確認調査を実施して遺構存在の有無、範囲を把握してから再度協議を行なうことになった。



Fig. 2 上峰団地位置図

確認調査は公社が主体となり、文化課から職員を派遣して行なうことになり、4月11日の踏査を皮切りに、4月14日から同21日までの期間に造成予定地全域（約98000m²）について実施した。その結果、東段丘の平坦な尾根と緩傾斜面約10,000m²の範囲で弥生時代の竪穴住居跡や土壙などが検出され、また西段丘では從来から知られていたくずれ塚古墳が比較的良好な状態で遺存していることが確認された。文化課は調査結果を添えて、村教育委員会に公社と協議するよう依頼した。記録保存により遺跡を保護することすでに3者合意していたのであるが、確認調査の結果くずれ塚古墳が前方後円墳である可能性が出てきたので、6月18日から同23日に測量調査を実施したが、前方後円墳かどうかという確信はつかめなかった。くずれ塚古墳は筑紫米多国造家の墳墓と考えられている目連原古墳群のうちの一基であるということで、公社はその歴史的意義を考慮して、前方後円墳ならば、設計を変更し、住宅団地の一角に保存するということで合意した。しかし前方後円墳であるか否かということは本格調査を待たなければならなかつた。

このような経過で東段丘の一本谷遺跡（約14,000m²）と西段丘のくずれ塚古墳について発掘調査が計画されたのであるが、3者協議の結果、経費的には村教育委員会が公社からの受託事業とする形をとり、調査には文化課より調査員を派遣してこれにあたることになり、上峰村教育委員会の文化財保護事業として発掘調査を実施することになった。

2. 確認調査

造成予定地全域（約98,000m²）についての確認調査は昭和56年4月14日から4月21日の期間に実施され、補足調査として5月18日から5月23日の期間でくずれ塚古墳の測量調査が行なわれた。調査は住宅供給公社が主体となり、文化課より文化財調査第1係の文化財保護主事中牟田賢治を派遣して実施されたが、概要は以下のとおりである。

第1次確認調査

この調査は重機（パックフォア）と人力を用いて、東段丘に28本、谷水田部に2本、西段丘に11本の計41本の試掘坑（トレンチ）を設けて行なわれた。調査は東段丘より始められ、段丘の尾根、東斜面、西斜面、谷水田部、西段丘の順に進められたが、調査当初より住居跡、土壙などの遺構が検出され、比較的良好な状態で遺構が存在することが予想された。

調査の結果、東段丘では28本のトレンチのうち尾根平坦面を中心に11ヶ所で遺構が検出され、一本谷遺跡が広大な範囲を占める弥生時代の集落跡であることが判明した。なお、谷水田部では遺構は検出されず、西段丘でもくずれ塚古墳以外の遺構は何ら検出されなかった。なおこの調査で、くずれ塚古墳は小形の前方後円墳である可能性が示された。

くずれ塚古墳確認調査

くずれ塚古墳は從来より北西側墳丘は一部削り取られ、石室の石材を抜き取られているとい

うことであったが、遺存している墳丘の形態が前方後円墳に類似していたことから、この点を明らかにする目的で墳丘の測量を実施するとともに一部トレンチを設定して周溝等の確認を行なった。その結果、南西に前方部をもつ、長さ10数m前後の前方後円墳らしい形で墳丘が遺存していることが知れ、また東側墳丘裾で幅2.5m前後の周溝と考えられる溝が検出された。しかしこの調査で、くずれ塚古墳が前方後円墳であるという証拠は得られなかった。

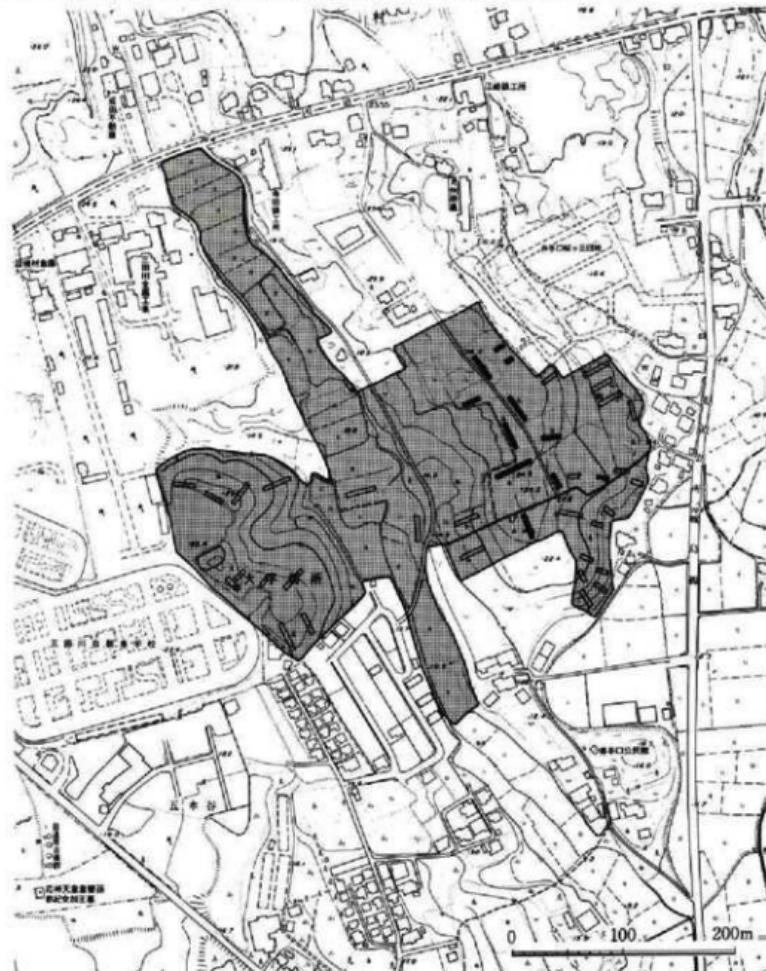


Fig. 3 確認調査 トレンチ位置図

3. 発掘調査

発掘調査は事務局を上峰村教育委員会に設置して、昭和56年7月23日から同12月14日まで現場調査を実施した。

調査組織

(事務局) 上峰村教育委員会

重松 十四郎 教育長(前任)

重松 守男 教育長(後任)

納富 正人 教育課長

吉田 忠 社会教育係長

(調査担当) 佐賀県教育委員会文化課

藤山 嶽 課長

高島 忠平 課長補佐

橋渡 敏暉 文化財調査第1係長

中牟田 賢治 文化財保護主事

七田 忠昭 文化財保護主事(担当)

(調査補助員)

筒井 伸也・深町 佐千子・武広 正純・田代 成澄

(作業員)

江頭ナミヨ・小川ミナ子・北島八重子・古賀 テル・七田もと子・白浜 清子

白浜富士子・千々岩スズヨ・堤 イシ・堤 千恵子・堤 ユキ・鶴田 浩二

鶴田 終一・鶴田 トウ・鶴田 富雄・中島 絹子・中島 宏子・中野 単太

日高チズ子・古川シゲミ・藤戸ハツエ・藤野 サミ・藤野 良江・矢動丸五十三

矢動丸敏子・山田豊美子 他

昭和57年7月23日に住宅供給公社、文化課、村教育委員会、作業員一同、簡素な安全祈願を行ない、発掘調査を開始した。

これに先立って重機によりあらかたの表土剥ぎを終了していた西段丘のくずれ塚古墳から調査を開始した。遺構検出のためさらに表土を削ったところ、墳丘裾に沿ってほぼ円形に巡る周溝を検出し、径25m前後の円墳である可能性が強まった。

調査はさらに墳丘を層序に従って取り除いたが石室の痕跡は認められず、北西部の墳丘が削平されている部分から石室の掘り方が現われた。内部は石室の腰石などの石材はほとんど抜き取られていたが、床面に敷石らしい塊石群と、閉塞石と考えられる塊石群を検出した。遺物としては石室を中心に銅鏡、銅碗、耳環、ガラス小玉、鉄鎌、馬具をはじめ、須恵器、土師器、

埴輪、甕片の他中世の陶磁器・土師器などを出土した。くずれ塚古墳の発掘作業は8月19日に終了し、実測・写真などの記録も8月25日に終了した。

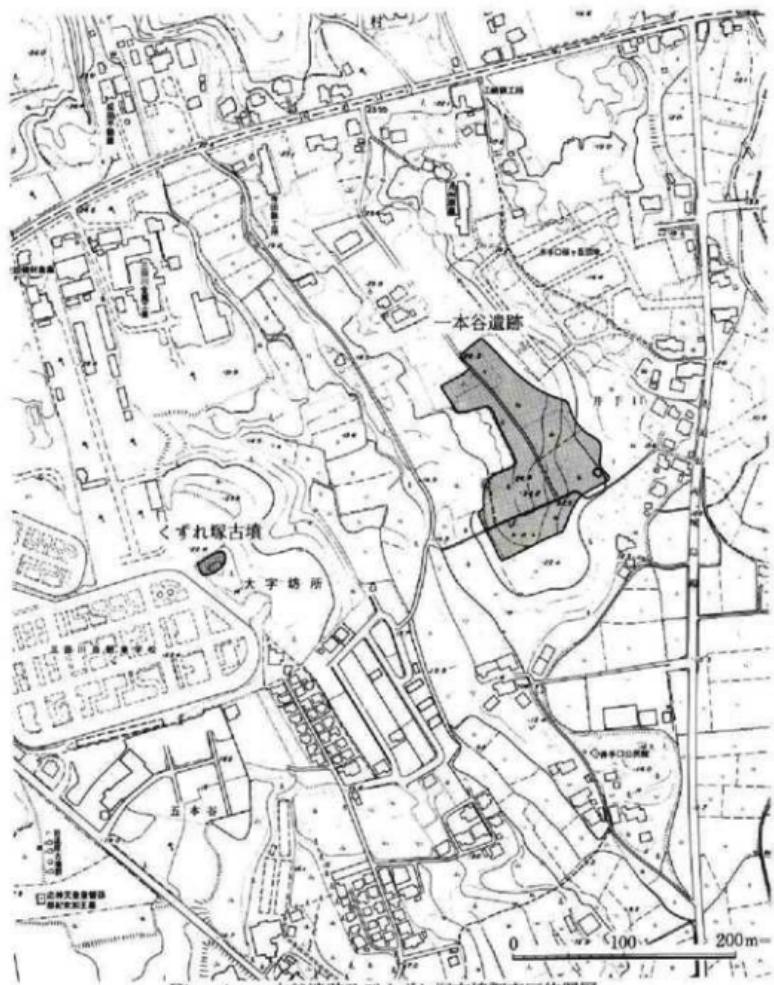


Fig. 4 一本谷遺跡及びくずれ塚古墳調査区位置図

東段丘上の調査は8月19日から開始したが、表土剥ぎを既に終了していた尾根より東半分を北から南へ調査を拡大していった。遺構として検出されるものは平面円形の竪穴住居跡と、平面長方形の貯蔵穴と考えられる土壙が主体で、大規模な弥生時代の集落跡であることが判明し、大きな期待がもたらされた。また8月21日には円形周溝墓らしい遺構が東斜面で確認された。さらに調査区を拡大するにつれて、尾根上に平面円形住居跡群が多く存在し、その周辺を貯蔵穴が取り巻き、南部には平面長方形の竪穴住居跡も検出された。

調査の結果、平面円形の竪穴住居跡26軒・平面長方形の竪穴住居跡5軒・貯蔵穴と考えられる60基前後を含む土壙約110基、円形周溝墓1基、火葬墓1基などが検出され、多量の弥生土器片・石器・フレイクや玉類などが出土した。

調査終了間近で、全体の遺構がほぼ明らかになった11月28日(土)に周辺の住民を対象に現地説明会を開催し、また上峰村公民館報^(三)でその概要を村内全戸に配布するなど文化財保護思想の啓蒙にあたった。

現地における発掘調査を12月14日終了すると、調査の記録類、出土遺物などは佐賀県文化財資料室へ搬入し、そこで報告書作成のための作業を行なった。

註

上峰村公民館報特集号「発掘された弥生時代のムラー上峰村大字坊所、一本谷遺跡の調査一」

1981. 11

III. 一本谷遺跡

1. 遺構

(1) 遺跡の概要

遺跡の存在する段丘上面には表土（黒褐色土）が20~40cmの厚さで堆積しており、下層は暗黄褐色の粘土質の層となり、その上面から遺構が切り込んでいる。竪穴住居跡群や貯蔵穴を含む土壌群は段丘上面および緩傾斜面の標高26.8mから23mの範囲に存在する。この段丘は調査区外北付近で標高を下げくびれるが、この付近が遺跡の北限である。また南方は調査区外に接する畠地をおいて崖になっている。段丘の西斜面は中央部に大規模な土取跡があり、以前かなりの遺構が破壊されただろうことが知られる。

発掘調査は南部畠地を除いて、段丘上面および東西緩傾斜面約14,000m²について実施した。その結果、竪穴住居跡31軒、貯蔵穴を含む土壌約110基、火葬墓1基その他の遺構を検出した。

竪穴住居跡は段丘の尾根を南北に帶状に分布するが調査区北部から中央部にかけて特に集中する傾向が窺える。貯蔵穴等の土壌は竪穴住居跡分布域内および東西に広がり、住居跡群を取り巻く状態で分布している。竪穴住居跡のうち平面長方形住居跡4基は調査区南部にそれぞれが近接しない位置に分布していた。

また東斜面に南東方へわずかに高まった小段丘上の標高約23mの位置に、円形周溝墓1基が存在するが、周辺に他の遺構は存在せず、孤立した状況である。

便宜的に調査区を北部（S B013・S B088以北）、中部（S B013以南 S B042周辺以北）、南部（S B048・S B049以南）に分けて遺構の分布を概観すると、北部は尾根の平坦面にあたり17軒の平面円形竪穴住居跡と20基程度の貯蔵穴などが存在するが、住居跡は中央の空地を囲むように分布する傾向が認められ、またこの北部のみで住居跡が4ヶ所で切り合う。中部は尾根の平坦面および東傾斜面にあたるが、西斜面は土取りで遺構が破壊されている。この地区は平面円形竪穴住居跡7軒、平面長方形竪穴住居跡1軒、貯蔵穴約40基などが存在するが、住居跡は互いに距離を保って構築されている。この地区にはS B041・S B069住居跡など巨大な竪穴住居跡がある。貯蔵穴等の分布は特に北部に集中しているが、全体的には尾根上の竪穴住居群を囲むように分布しており、東では等高線と平行して分布する傾向がみられる。南部は尾根上の平坦面および東西にわずかに傾斜した面にあたり、ある程度一定の方向性をもつ平面長方形竪穴住居跡が4軒、平面円形竪穴住居跡2軒、貯蔵穴3基などが分布する。

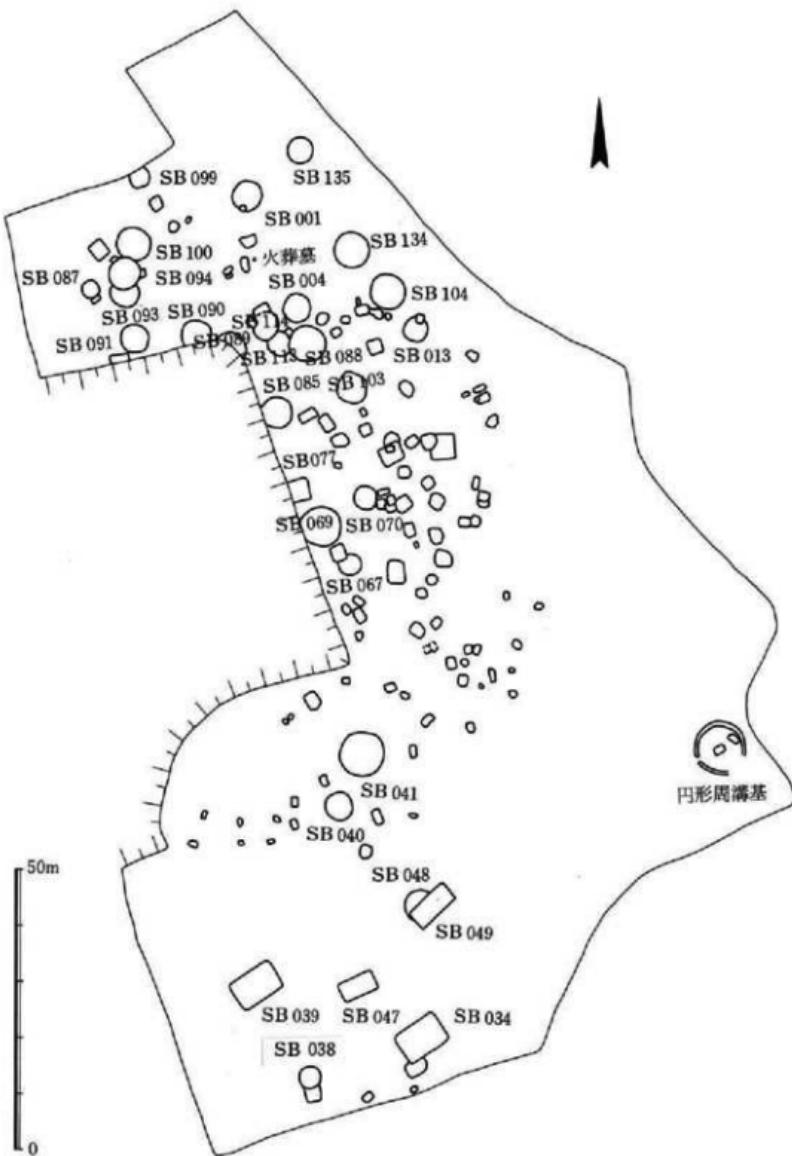


Fig. 5 主要遺跡構配図

(2) 穫穴住居跡

畩穴住居跡は31軒検出された。平面形態で分類すると、円形のもの26軒、長方形のもの5軒である。またSK019土壤やSK112土壤のように、平面方形で、向い合う壁面近くの床に2個の柱穴をもつ畩穴住居跡らしい遺構も存在するが、床面までの深さが浅く、また踏みしまりもないことなどから、ここでは一応土壤として取り扱うこととした。

平面円形畩穴住居跡

平面円形畩穴住居跡26軒の規模についてはSB087住居跡の径3.44~3.92m(面積10.6m²)からSB041の径8.19~8.61m(面積55.4m²)まで、その差が大きい。統計的にみると面積は13m²~28m²と20m²前後に集中し、37m²以上のものは4基(うち2基はSB041住居跡の拡張前と拡張後のものである)であった。

一本谷遺跡は遺構の保存が良好であったため床までの深さが0.5m以上あったものが多数を占め、最も深いものとしてSB094住居跡の1.01mがあげられる。このため床面に残る室内施設や柱穴等の遺構も後世の攢乱を受けたものが少なく、畩穴住居そのものの復元には格好の資料となるものであるが、出入口等の痕跡は確認できなかった。

主柱穴は2個のもの4個のものその以上のものに大別できるが、最多のものはSB069住居跡の8個であった。これら主体の本数は住居跡の規模と密接な関係があったことが窺える。すなわち最も小規模なSB087住居跡(面積10.6m²)で2本、13m²以上17m²未満の住居跡では4本、17m²以上24m²の住居跡では4本のものと5本のものが約半数づつを占め、25m²以上の住居跡では5本、6本、7本、8本となる。このような住居規模と主柱穴との相関関係から、13m²から17m²未満の住居跡では主柱4本が基本となり、規模が大きくなれば主柱穴の本数が増加することを知ることができるが、17m²以上24m²、25m²以上の2グループ内においては規模の大小で主柱本数の多少が一定の対応をなさず不規則な傾向を窺い知ることができる。

屋内には柱穴の他に中央部に炉状の土壤をもつものがほとんどであるが、焼土を残すものはSB087・SB137住居跡のみであり、この土壤は一般的に炉と呼ばれる機能はもっていかなかったとみるべきであろう。他にSB088・SB135住居跡では屋内貯蔵穴がみられ。SB069住居跡ではもの入れと考えられる小横穴を設けており、SB041・SB048・SB069住居跡では壁際を巡る大きな溝が確認された。なおSB041住居跡は規模の拡張がなされているが、拡張前の住居跡にも溝が巡る。

また平面円形の畩穴住居跡の床面はすべて壁際の10~30cm幅周囲を除いた内側は強く踏みしまっている。この面は完全な平坦面をなさず表面には小さな凹凸があり、丁度近年迄の農家の土間の状況と相通するものがあった。

一本谷遺跡では火災に遇って焼亡したと考えられる住居跡が3軒存在した。SB041・SB048・SB069住居跡であるが、これらの住居跡は主柱穴の数が多く、また屋内に大きな溝を巡

らすなど構造上の共通点があり、S B041・S B069住居跡からは磨製石鎌や勾玉が出土するなど他の住居跡とは性格上区別されるべき要素が多い。

平面円形の竪穴住居跡からは各種の弥生土器や、支脚・紡錘車などの土製品・石鎌・石斧・石包丁・磨石・砥石・紡錘車などの石器・石製品その他勾玉などを出土したが、概して土器は10數片出土というのが多く、多數を出土したのはS B069・091住居跡ぐらいであった。またこの円形住居跡からは必ずと言って良い程黒曜石やサスカイトのフレイクを多數出土した。多いものでは100片以上の出土量であるが、製品（特に打製石鎌）を多く出土した住居跡もある。S B090住居跡で11個、S B135住居跡で14個であった。

平面長方形竪穴住居跡

平面長方形の竪穴住居跡は5軒検出したが、このうちS B077住居跡は出土遺物からみて、南部に位置する4軒の住居跡とは時間的に区別される。この住居跡は短辺3.46m、長辺3.44m以上の規模で、深さは0.74cmであった。床面は堅く踏みしまり、南壁際に1個の柱穴、東壁に沿って高さ0.25~0.30mのいわゆるベッド状遺構を削り出して付設している。床面からは弥生土器片と多數の黒曜石フレイクを出土している。

南部に存在する4軒は、互いにある程度の間隔を保ち、一定の方向性をもって存在している。すなわち間隔は約10m以上、主軸方位はN43°E~N66°E内に納まっている。これら住居跡の規模は前記の平面円形竪穴住居跡に較べると概して大規模になっており、S B047住居跡の22.1m²からS B039住居跡では46.6m²に達する。

S B049住居跡内では明確な遺構を確認することができなかったが、他の3軒については構造上共通する点が多い。主柱穴は2個で大方長辺中軸上に存在すること、ベッド状遺構をもつこと、南東壁際のほぼ中央部に土壤をもつことなどが挙げられる。ベッド状遺構はS B034住居跡で3ヶ所、S B039住居跡で2ヶ所、S B047住居跡で4ヶ所設けられている。壁際の土壤は深さ20~30cmで小規模なものである。またS B034・S B047住居跡では中央付近に浅い炉を設けており、S B047住居跡では焼土が残存していた。壁沿いに巡る小溝はS B034・S B039住居跡で認められた。

平面長方形のうちS B077住居跡を除く4軒からは各種の弥生土器、砥石などが出土したが、土器の量は多く、当時の土器の組成などを考える際の重要な資料となる。またS B034住居跡からは鉄器片が1片出土した。

Tab.1 一本谷遺跡竪穴住居跡一覧表

(Ⅰ期…中期初頭を中心とする時期。Ⅱ期…後期)

| 住居跡番号 | 平面形態 | 机 構 (m. m ²) | | | 棟方向 | 屋 内 施 設 | | | 出 土 考 古 物 (上層・土器・土陶器 下層・石器・石陶器 その他) | 時期 | 備 考 | |
|-------|------|--------------------------|-----------|-----|-----|---------|-------|-------------|--|-------------------------------|------------------------------------|--------|
| | | 長さ (直径) | 幅 (幅部) | 深さ | | 主柱穴 | 副柱・土壇 | その他の施設 | | | | |
| S-001 | 円形 | 3.0 | 3.0 | 0.8 | 3.0 | — | — | — | 中央付近に 柱穴跡 | 土器 | I S-001 | |
| 002 | 円形 | 4.2 | 4.2 | 0.8 | 3.2 | — | 4 | 伊代土壇 | — | 土器・幼童埴 輪・石臼・石臼丁・スフレ イバー | I | |
| 003 | 円形 | 4.0 | 4.0 | 0.8 | 3.0 | — | 4 | 伊代土壇 | — | 土器・骨 灰塗 | I S-002から切られる | |
| 004 | 長方形 | 7.0 | 3.6 | 0.8 | 6.5 | NW-E | 2 | 有 | 伊代土壇 (バッピド伏造 土壇) | 土器・骨・鉢・瓦器・筒 子形土壇・鐵石 | I S-003を切る | |
| 005 | 円形 | 4.0 | 4.0 | 0.8 | 3.1 | — | 4 | 伊代土壇 | — | 土器・骨・火葬・船形車 輪・石臼 | I S-003と切り合う | |
| 006 | 長方形 | 3.0 | 3.0 | 0.8 | 3.0 | NW-E | 2 | 有 | 伊代土壇 (バッピド伏造 土壇) | 土器・骨・鉢・瓦器・筒 子形土壇・鐵石 | I | |
| 007 | 円形 | 3.0 | 3.0 | 0.8 | 3.0 | — | 3 | 伊代土壇 | — | — | I | |
| 008 | 円形 | 3.0 | 3.0 | 0.8 | 3.0 | — | 3 | 有 | 伊代土壇 | — | 土器・幼童埴 輪・土壇 断面瓦器・鐵石 | I 破壊復元 |
| 009 | 長方形 | 4.7 | 3.0 | 0.8 | 3.1 | NW-E | 2 | 有 | 伊代土壇 (バッピド伏造 土壇) | 土器・骨・鉢・瓦器 筒子形土壇・鐵石 | I | |
| 010 | 円形 | 4.0 | — | 0.8 | 3.0 | — | 5 | 伊代土壇 | — | 土器・鐵石・石器 | I S-004から切られる。 | |
| 011 | 長方形 | 3.0 | 3.0 | 0.8 | 3.0 | NW-E | 2 | 有 | 伊代土壇 | 土器・骨・鉢・瓦器 筒子形土壇・鐵石 | I S-004を切る | |
| 012 | 円形 | 4.0 | 3.0 | 0.8 | 3.0 | — | 4 | 伊代土壇 | — | 土器 | I S-004から切られる。 | |
| 013 | 円形 | 3.0 | 3.0 | 0.8 | 3.0 | — | 3 | 伊代土壇 | 壁間に 柱穴 | 土器・骨・火葬・鐵石・瓦器 筒子形土壇・鐵石 | I 壁に火葬、西側土取り で破壊 | |
| 014 | 円形 | 4.0 | 4.0 | 0.8 | 3.0 | — | 4 | 伊代土壇 | — | 土器・骨 灰塗 | I | |
| 015 | 長方形 | 3.0以上 | 2.0 | 0.8 | — | NW-E | — | — | バッピド伏造 土壇 | 土器 | I 西部土取りで破壊 | |
| 016 | 円形 | 4.0 | 3.0 | 0.8 | 3.0 | — | 4 | 伊代土壇 | — | 土器・石斧・鐵石・石 | I 西部土取りで破壊 | |
| 017 | 円形 | 3.0 | 3.0 | 0.8 | 3.0 | — | 3 | 伊代土壇 土壇 | — | 土器 | I S-003と切り合う | |
| 018 | 円形 | 3.0 | 3.0 | 0.8 | 3.0 | — | 3 | 伊代土壇 附壁穴 | — | 土器・骨 灰塗・火葬・鐵石・附壁事 | I S-003 S-010 | |
| 019 | 円形 | 3.0 | 3.0 | 0.8 | 3.0 | — | 3 | 伊代土壇 | — | 土器・鐵石・附壁事 | I 南西部土取りで破壊 | |
| 020 | 円形 | 3.0 | 3.0 | 0.8 | 3.0 | — | 3 | 伊代土壇 | — | 土器・石刀・スクリイ バー | I 南部土取りで破壊 | |
| 021 | 円形 | 3.0 | 4.0 | 0.8 | 3.0 | — | 3 | 伊代土壇 | — | 土器・骨 灰塗・火葬 | I | |
| 022 | 円形 | 3.0 | 3.0 | 0.8 | 3.0 | — | 3 | 伊代土壇 | 土壇 | 土器・骨 灰塗 | I S-004から切られる。 | |
| 023 | 円形 | 3.0 | 3.0 | 0.8 | 3.0 | — | 3 | 伊代土壇 | — | 土器・骨 | I S-004を切る。S-003 とS-010・田中と切り合う | |
| 024 | 円形 | 4.0 | 4.0 | 0.8 | 3.0 | — | 4 | 伊代土壇 | — | 土器・骨 灰塗・石臼丁 | I 北西部土取りで破壊 | |
| 025 | 円形 | 3.0 | 3.0 | 0.8 | 3.0 | — | 4 | 伊代土壇 | — | 土器・骨 灰塗 | I 北西部土取りで破壊 | |
| 026 | 円形 | 4.0 | 4.0 | 0.8 | 3.0 | — | 4 | 伊代土壇 | — | 土器・骨 灰塗・石斧 | I | |
| 027 | 円形 | 3.0 | 4.0 | 0.8 | 3.0 | — | 5 | 伊代土壇 | — | 土器・骨 灰塗 | I S-004から切られる。 | |
| 028 | 円形 | 3.0 | 3.0 | 0.8 | 3.0 | — | 5 | 伊代土壇 | — | 土器・骨 灰塗・スクリイ バー | I S-004とS-005と 切り合う | |
| 029 | 円形 | 3.0 | 3.0 | 0.8 | 3.0 | — | 5 | 伊代土壇 | — | 土器 | I S-004から切られる。 | |
| 030 | 円形 | 3.0 | 3.0 | 0.8 | 3.0 | — | 5 | 伊代土壇 | 野放穴 | 土器 | I | |

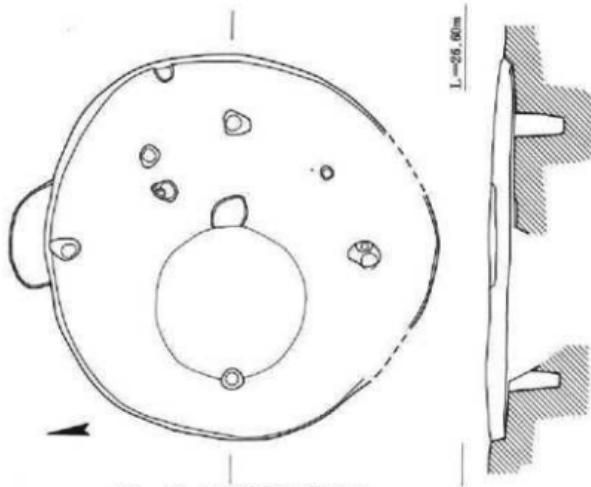


Fig. 6 SB 001住跡実測図

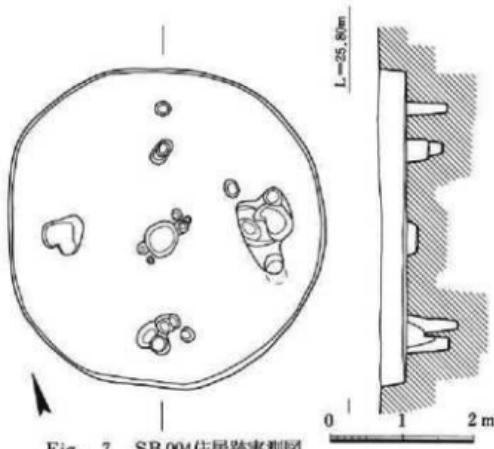


Fig. 7 SB 004住跡実測図

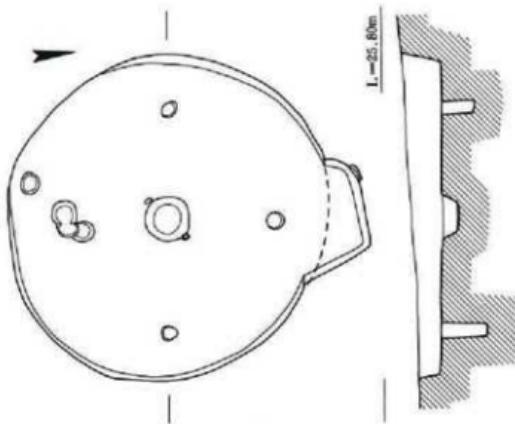


Fig. 8 SB 013住居跡実測図

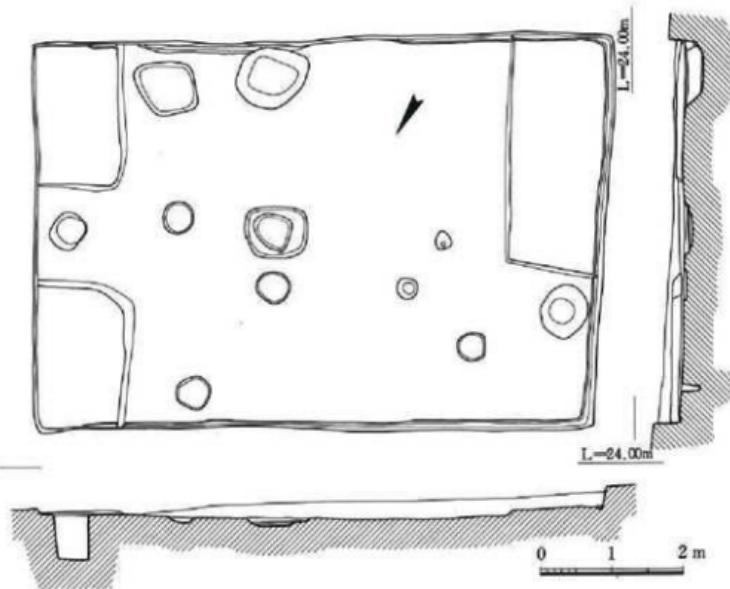


Fig. 9 SB 034住居跡実測図

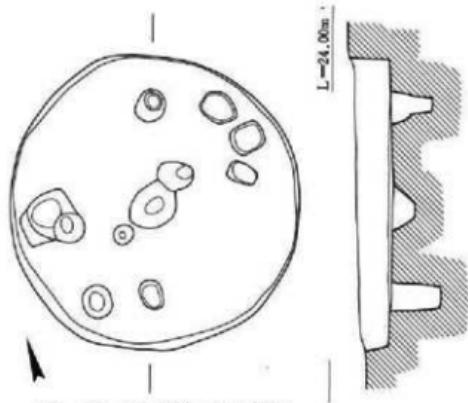


Fig. 10 SB 038住跡実測図

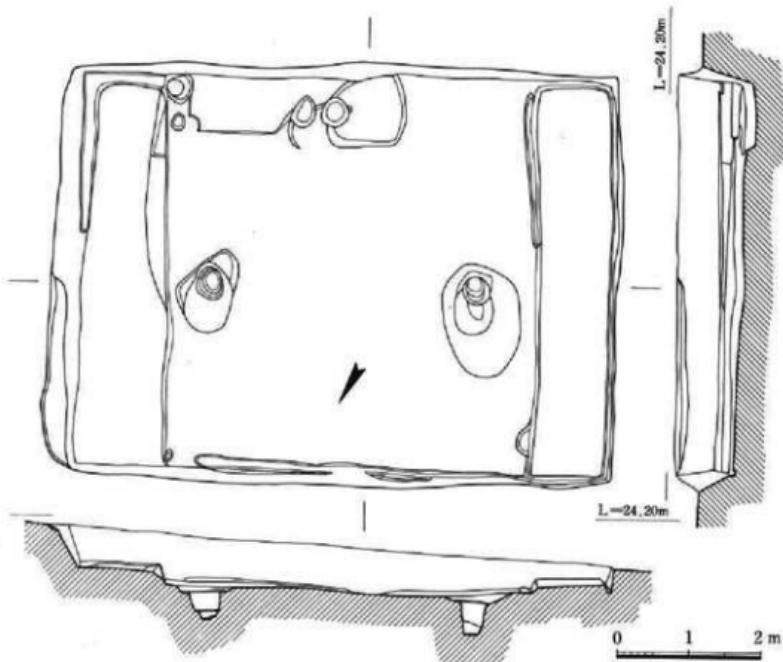


Fig. 11 SB 039住跡実測図

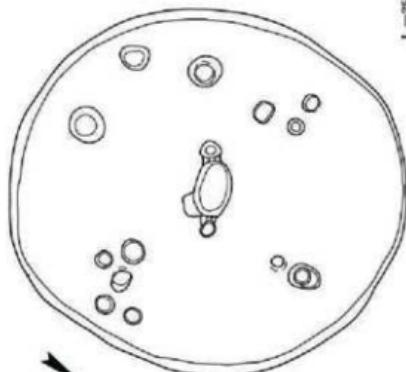


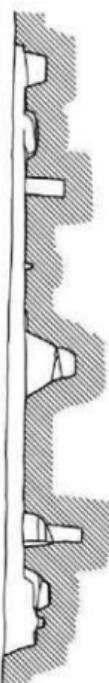
Fig. 12 SB 040住居跡実測図

L=25.50m



Fig. 13 SB 041住居跡実測図

L=25.00m



0 1 2 m

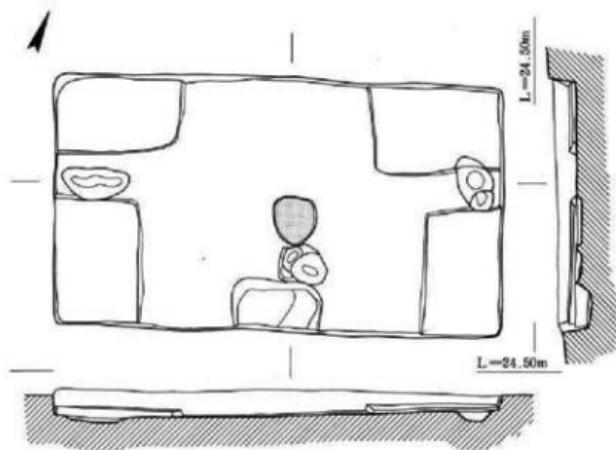


Fig. 14 SB 047住居跡実測図

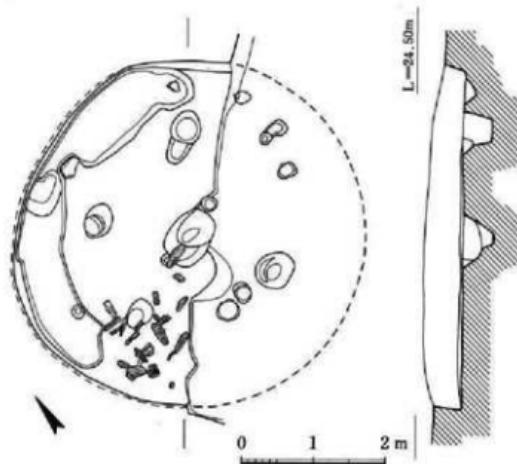


Fig. 15 SB 048住居跡実測図

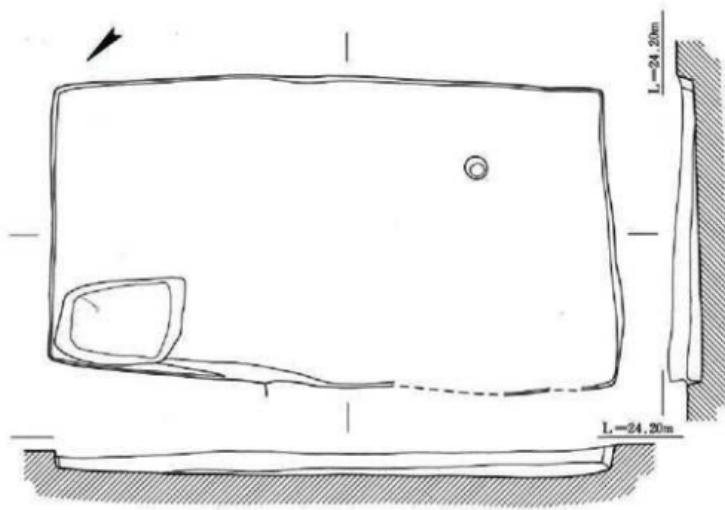


Fig. 16 SB 049住跡実測図

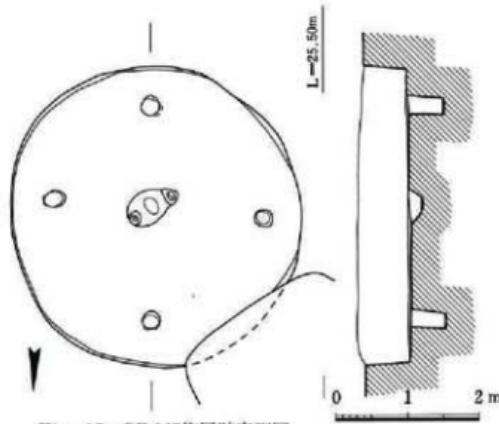
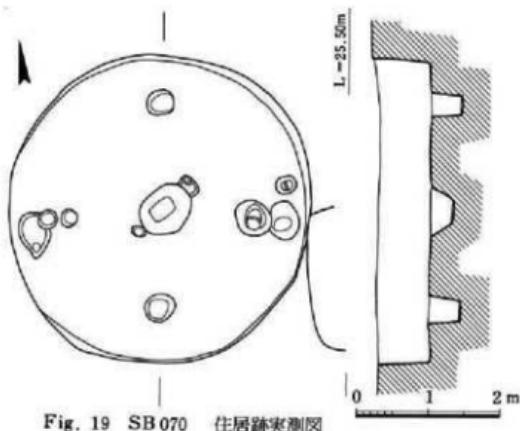
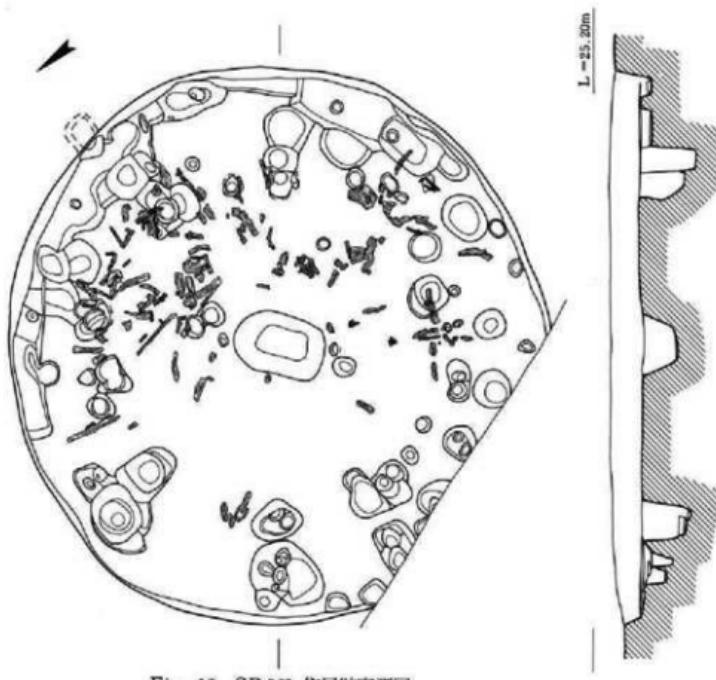


Fig. 17 SB 067住跡実測図



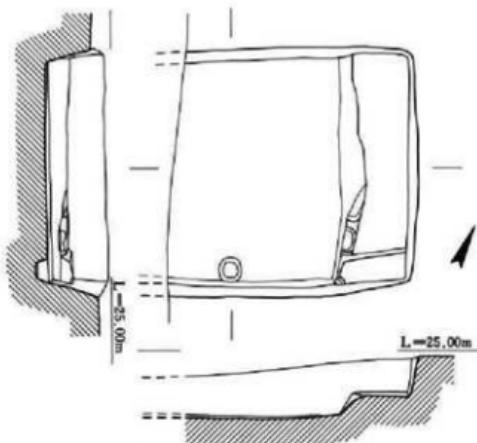


Fig. 20 SB 077住居跡実測図

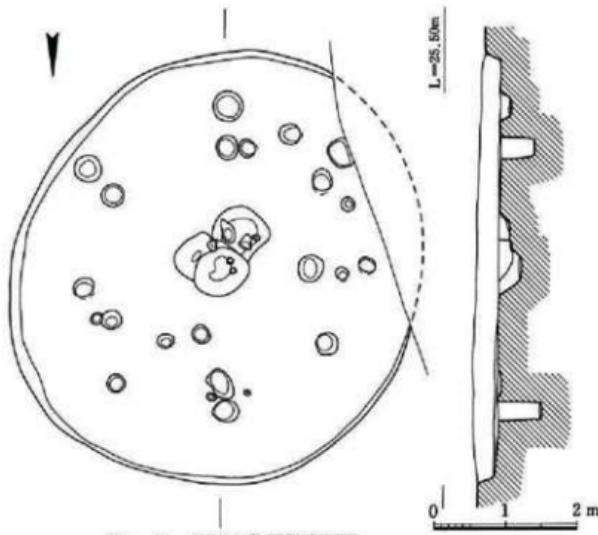


Fig. 21 SB 085住居跡実測図

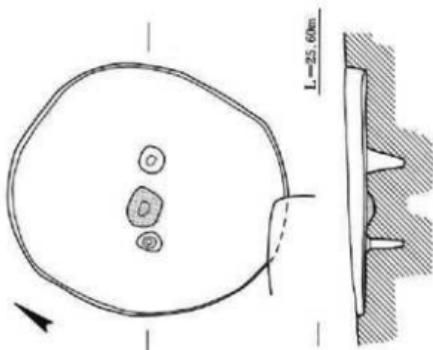


Fig. 22 SB 087住居跡実測図

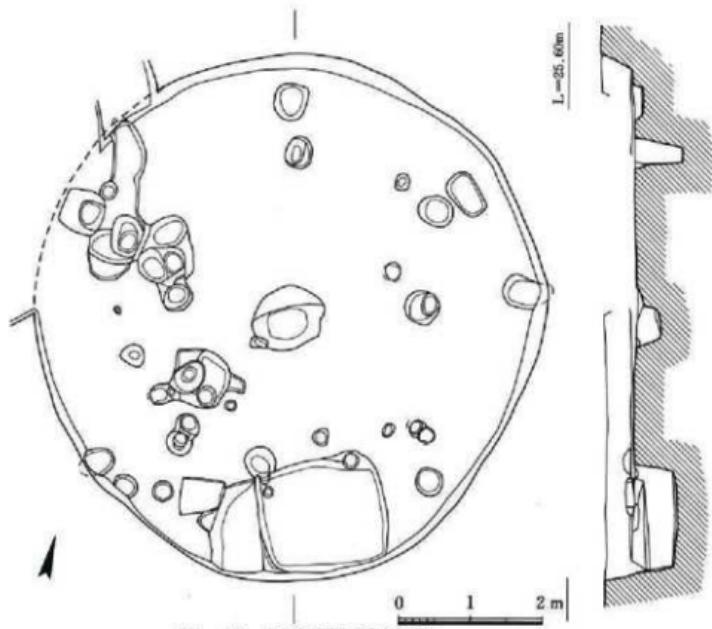


Fig. 23 SB 088住居跡実測図

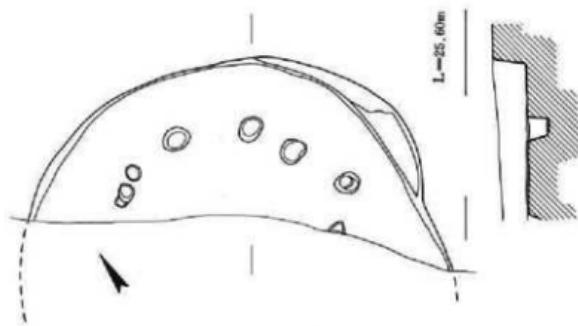


Fig. 24 SB 089 住居跡実測図

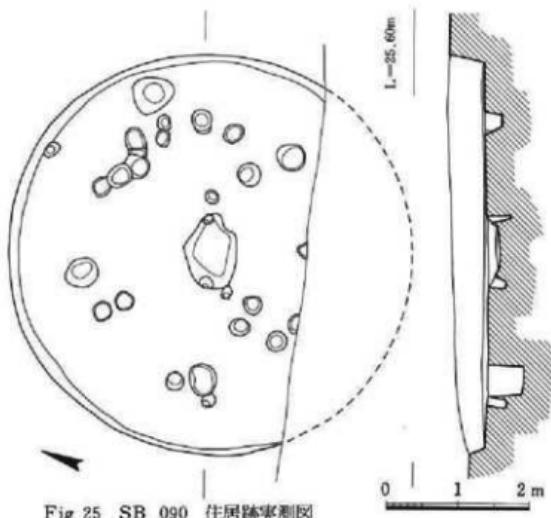


Fig 25 SB 090 住居跡実測図

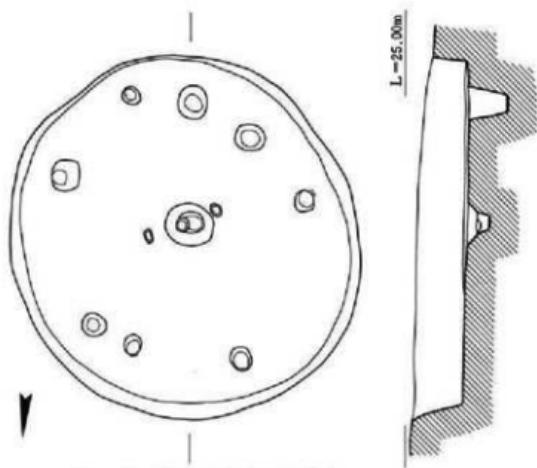


Fig. 26 SB 091 住居跡実測図

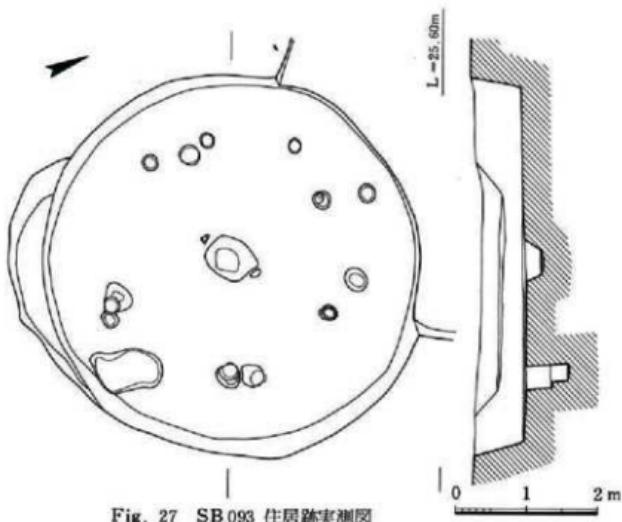


Fig. 27 SB 093 住居跡実測図

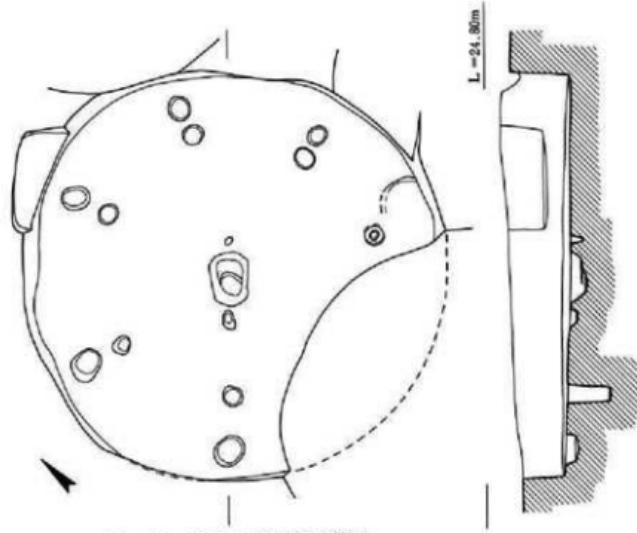


Fig. 28 SB 094 住居跡実測図

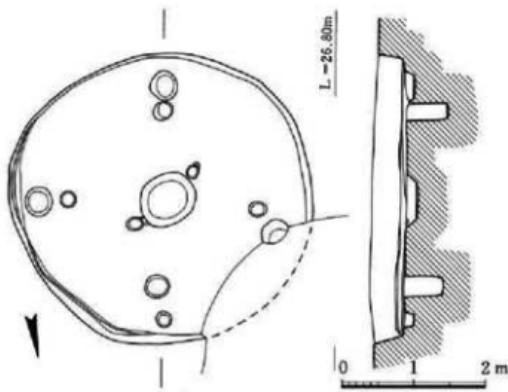


Fig. 29 SB 099 住居跡実測図

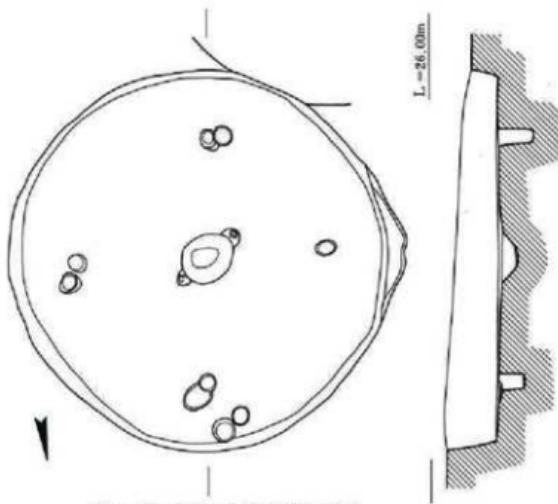


Fig. 30 SB 100 住居跡実測図

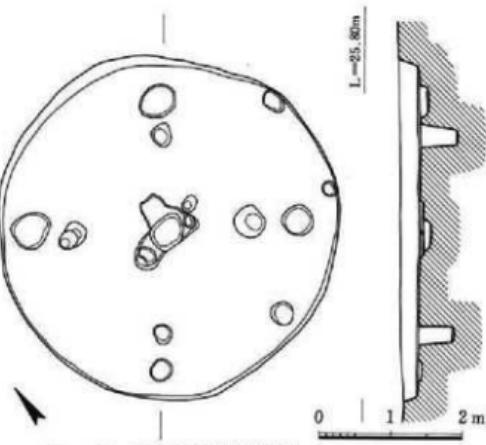


Fig. 31 SB 103 住居跡実測図

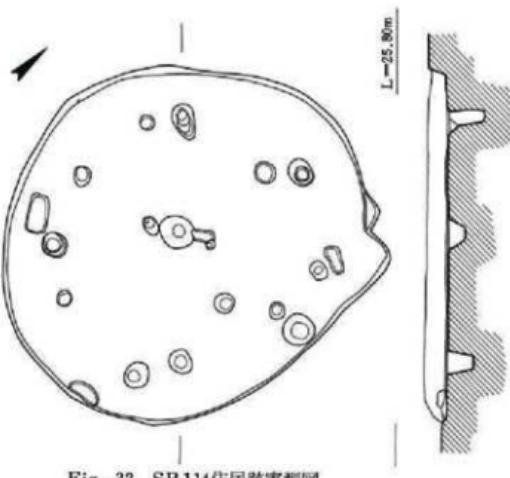


Fig. 32 SB 114住跡実測図

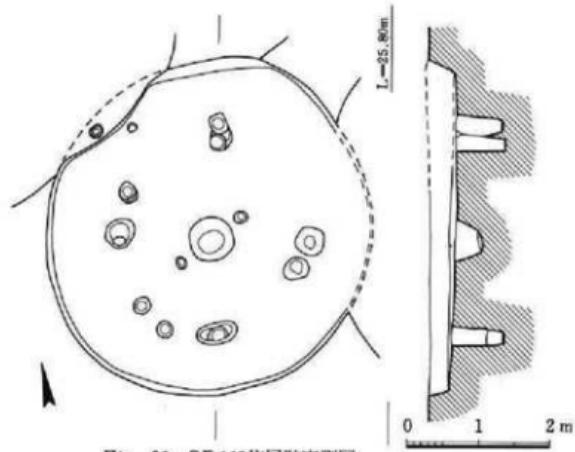


Fig. 33 SB 113住跡実測図

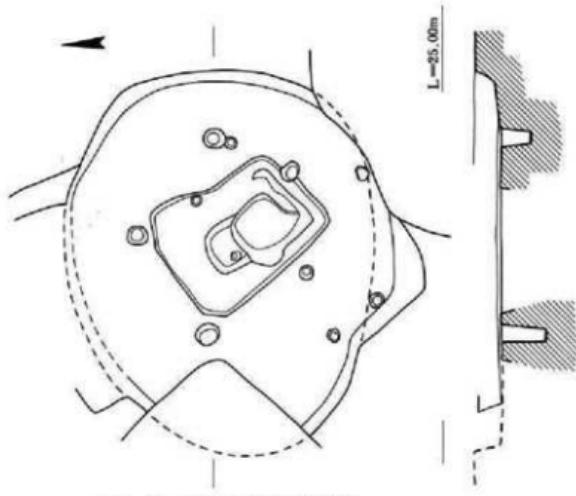


Fig. 34 SB 114 住居跡実測図

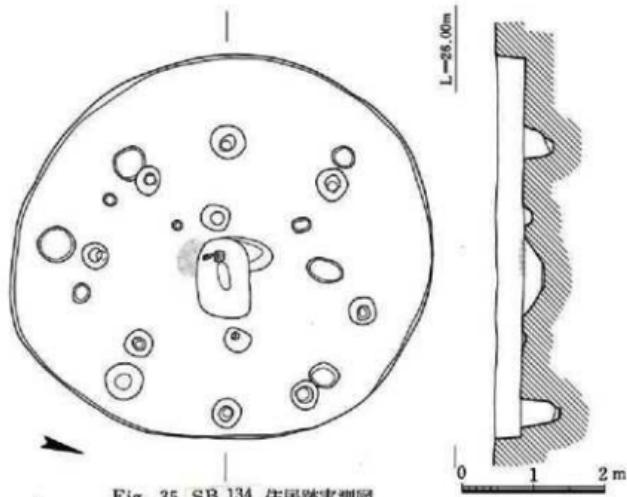


Fig. 35 SB 134 住居跡実測図

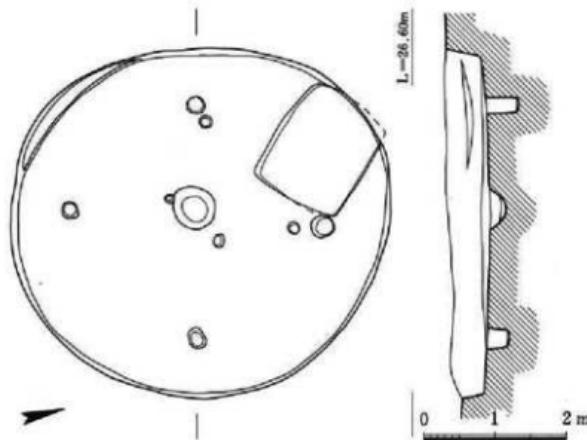


Fig. 36 SB 135住居跡実測図

(3) 貯蔵穴・土壤

貯蔵穴等を含んで土壤は全体で101基検出された。形態の相違により、内訳は貯蔵穴53基、貯蔵穴の可能性があるもの3基、住居跡状のもの5基、その他のいわゆる土壤40基となる。

貯蔵穴は平面形態が方形基調のもの51基、円形のもの2基に分類され、土壤は方形基調のもの、円形基調のもの、不整形のものに分類できる。土壤としたもののうち平面正方形または正方形と考えられるもの5基は柱穴をもつものもあり、あるいは住居跡のような居住のための施設であったかも知れない。

貯蔵穴

貯蔵穴と考えられる竪穴遺構のうち平面方形のもののうち遺構が完全に遺存しているものや、一部破壊されてはいるが容易に全体を復元しうるもの44基についてみると、規模的には床面積ではSK 124貯蔵穴の0.5m²からSK 076貯蔵穴の7.0m²まで幅が大きいが、統計的には1.5m²から3.0m²前後に集中する。平面方形基調の貯蔵穴はそれぞれ長方形と正方形を平面基調とするものに2分される。平面長方形のもの28基、平面正方形のもの16基で、約2:1の割合になっている。

平面長方形基調の貯蔵穴は断面がいわゆる梯形のものが多いが、中には壁が崩れたものも多く、本来壁は垂直に立っていたものが多いと思われる。またSK 050・SK 148土壤などや袋状になっているものも存在した。規模的には前期の1.5m²から3.0m²内に特に集中するか、平面正方形基調のものはこの範囲にやや集まる傾向が認められるが、概してバラツキが大きい。残存する深さは1m前後のものが多いが最も深いものはSK 076貯蔵穴の1.23mであった。

内部に柱穴らしい小穴が存在するものは少ないが、SK 139貯蔵穴では平面長方形の床面の

短辺側の壁際にそれぞれ1個の柱穴が存在し、また巨大なSK076貯蔵穴では周囲の壁上部に柱穴状の小穴が多数巡るなど、上部構造を推測させるものも存在した。

なお、これら平面方形基調の貯蔵穴は、その主軸方位が地形の傾斜と直角あるいは平行に掘られたものがほとんどであるが、等高線と平行の方位のものが大多数を占める。

平面円形の貯蔵穴は確実なものとして、SK046・SK059貯蔵穴の2基が検出された。両者ともその断面がフラスコ状となるいわゆる袋状豊穴ある。SK046貯蔵穴は1.56m×1.14mの平面正方形に近い長方形の横の底部から口縦約0.9m、底径約1.5m、深さ1.29mの豊穴を振り込んでいる。後者は口縦約1.0m、底径約1.7m、深さ1.47mの豊穴である。底面積はそれぞれ2.5m²、2.3m²となる。

貯蔵穴からの出土品は平面円形豊穴住居跡とはほぼ同様で、弥生土器や支脚などの土製品・石鏡・石斧などの石器等がある。

土壤

土壤は平面方形基調のものがほとんどであり、前記の貯蔵穴の範囲に入るものもいくつか存在するかも知れないが、概してその性格が不明なものが多い。

土壤のうちSK086土壤は3.16m×2.10m、深さ0.41mのやや規模が大きい土壤であるが、内部からは中期中頃の甕、大甕、壺・器台など多数の弥生土器を出土し、他の土壤や貯蔵穴とは時期的に孤立した存在である。

また土壤としたもののうちで、平面正方形の豊穴住居跡状の遺構が5基存在したが、これらのうちSK019・SK112土壤は中軸線上の壁際の床にそれぞれ1個の柱穴を配するが、この柱穴は規模が小さく、また床面に踏みしまりもみられないことなどから住居跡の範囲から除外した。おそらく簡単な上屋構造をもつ倉庫的な機能をもつ豊穴であったと思われる。床面積はSK019土壤は約14m²、SK112土壤は12.2m²であった。

土壤よりの出土品の構成は貯蔵穴と同様である。

Tab.2 一本谷遺跡貯蔵穴・土壤一覧表

貯蔵穴及び豊穴の可能性のあるもの、住居跡状の土壤には、床面積を記した。

| 土壤番号 | 平面形態 | 上面面積(m ²) | 底面面積(m ²) | 底面形状 | 深さ(m) | 床面積(m ²) | 豊穴状の穴 | 出土遺物 | 備考 |
|------|--------------|-----------------------|-----------------------|------|-------|----------------------|-------|------|-----|
| SK06 | 内側に高い 腰内斜 | 1.22 | 0.96 | 1.00 | 1.02 | 1.17 | — | 甕・支脚 | |
| 砂 | 円形 | 0.88 | 0.88 | 0.88 | 0.88 | 0.88 | — | 甕 | |
| 砂 | 楕円形 | 1.22 | 1.22 | 1.22 | 1.22 | 1.22 | — | 甕 | |
| 砂 | 楕円形 に近い | 1.07 | 1.07 | 1.07 | 1.07 | 1.07 | 1 | 甕 | |
| 砂 | 圓柱形 | 1.22 | 1.22 | 1.22 | 1.22 | 1.22 | 1 | 支脚 | |
| 砂 | 圓柱形 | 1.22 | 1.22 | 1.22 | 1.22 | 1.22 | — | 甕 | |
| 砂 | 楕円形 に近い | 1.22 | 1.22 | 1.22 | 1.22 | 1.22 | — | 甕 | |
| 砂 | (丸方型) | — | 0.88 | — | 0.88 | 0.88 | — | 甕・甕 | 貯蔵穴 |
| 砂 | 方形 | 1.22 | 1.22 | 1.22 | 1.22 | 1.22 | 2 | 甕 | 住居跡 |

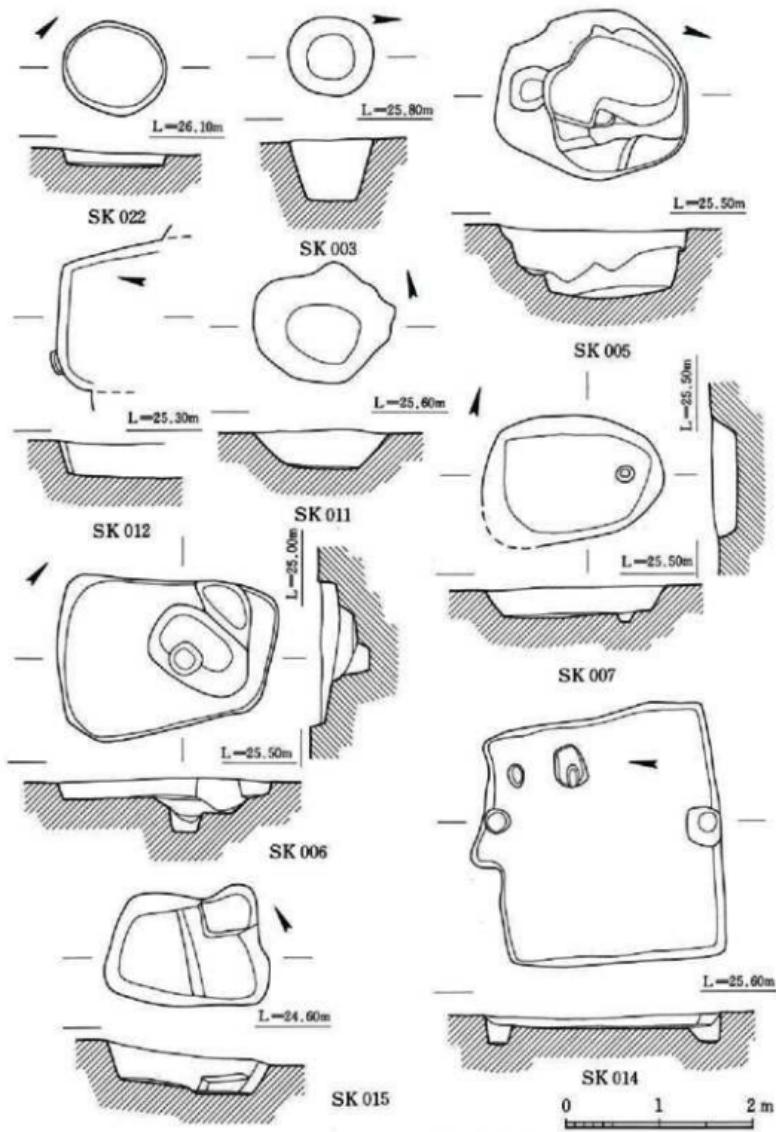


Fig. 37 貯藏穴・実測図 (1)

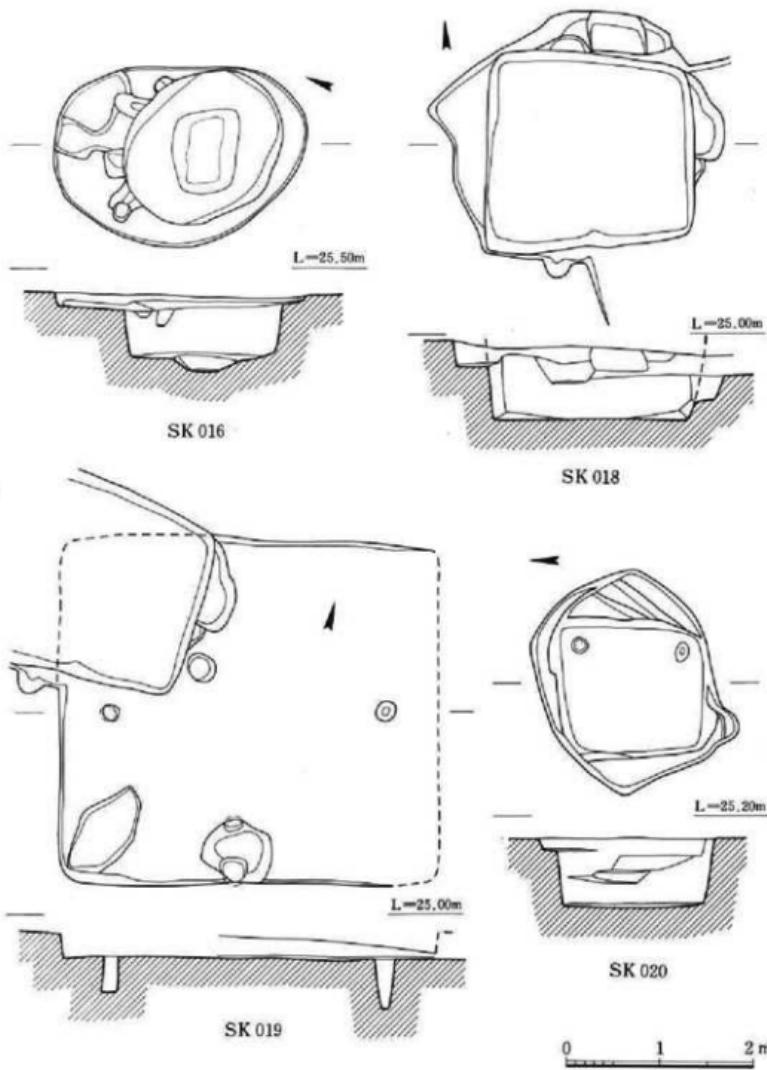


Fig. 38 貯藏穴・土壤実測図 (2)

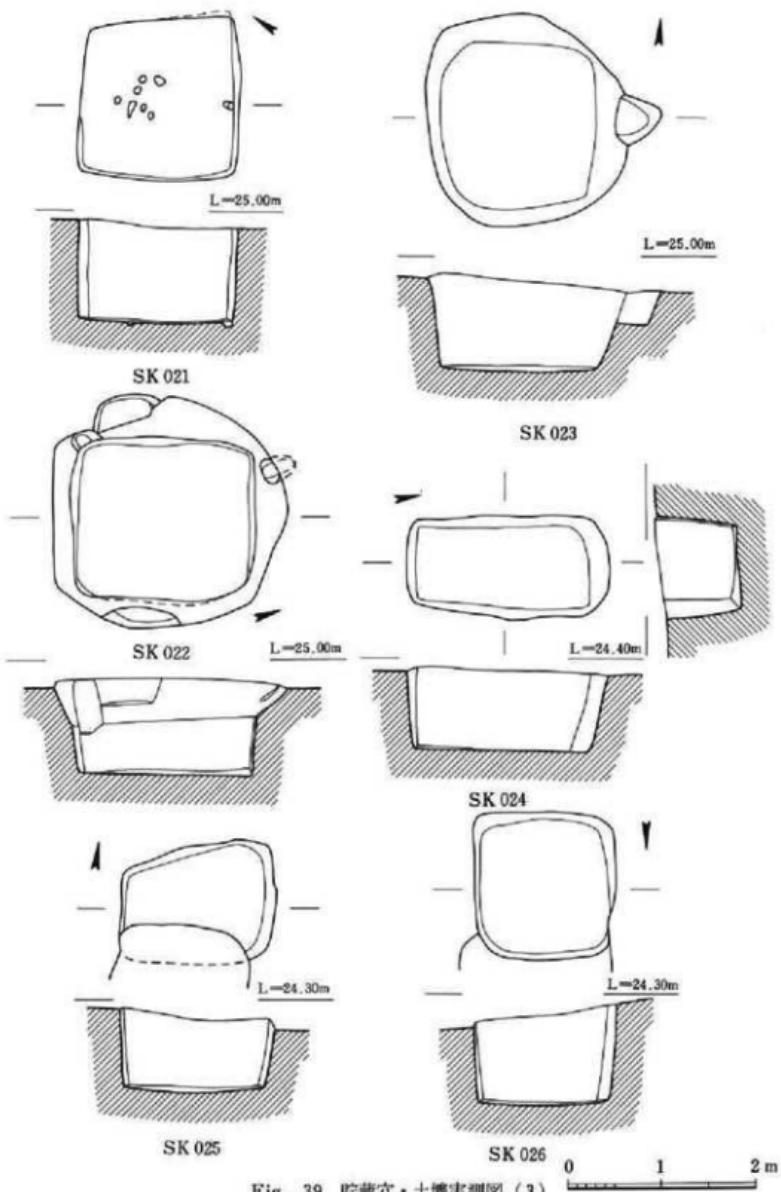


Fig. 39 貯藏穴・土壤実測図 (3)

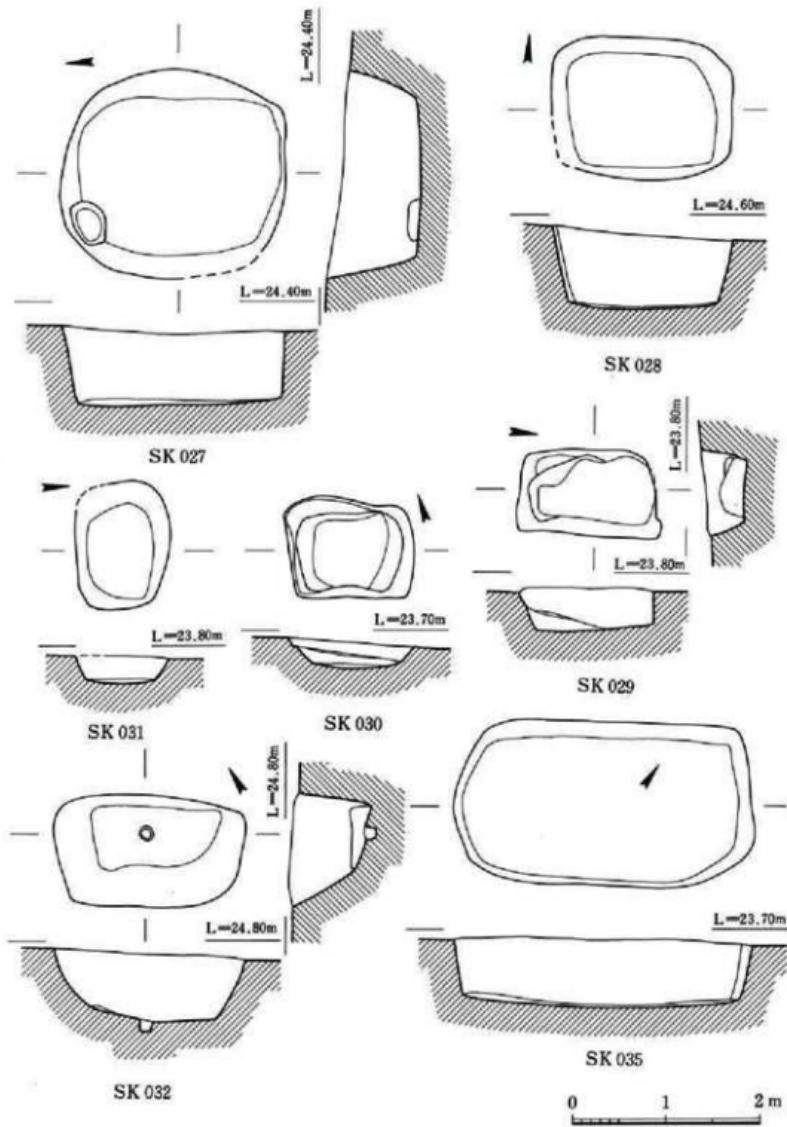


Fig. 40 貯藏穴・土壤図 (14)

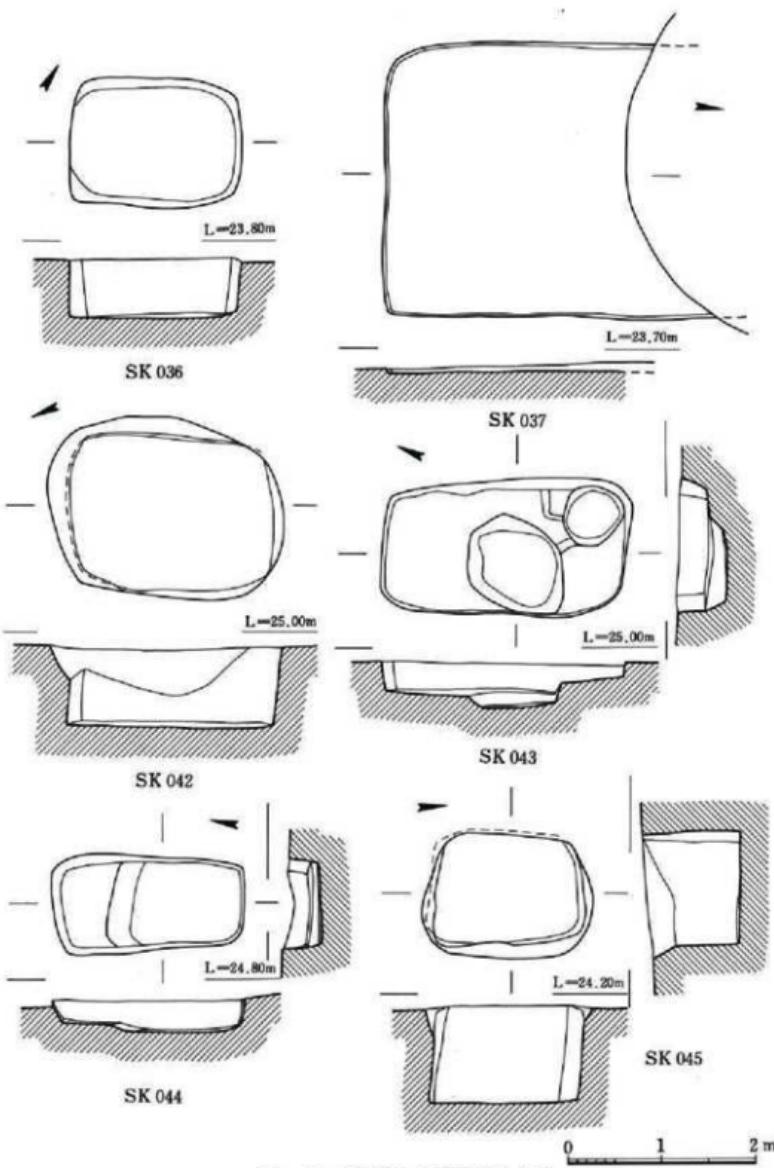


Fig. 41 贯藏穴・土壤実測図(5)

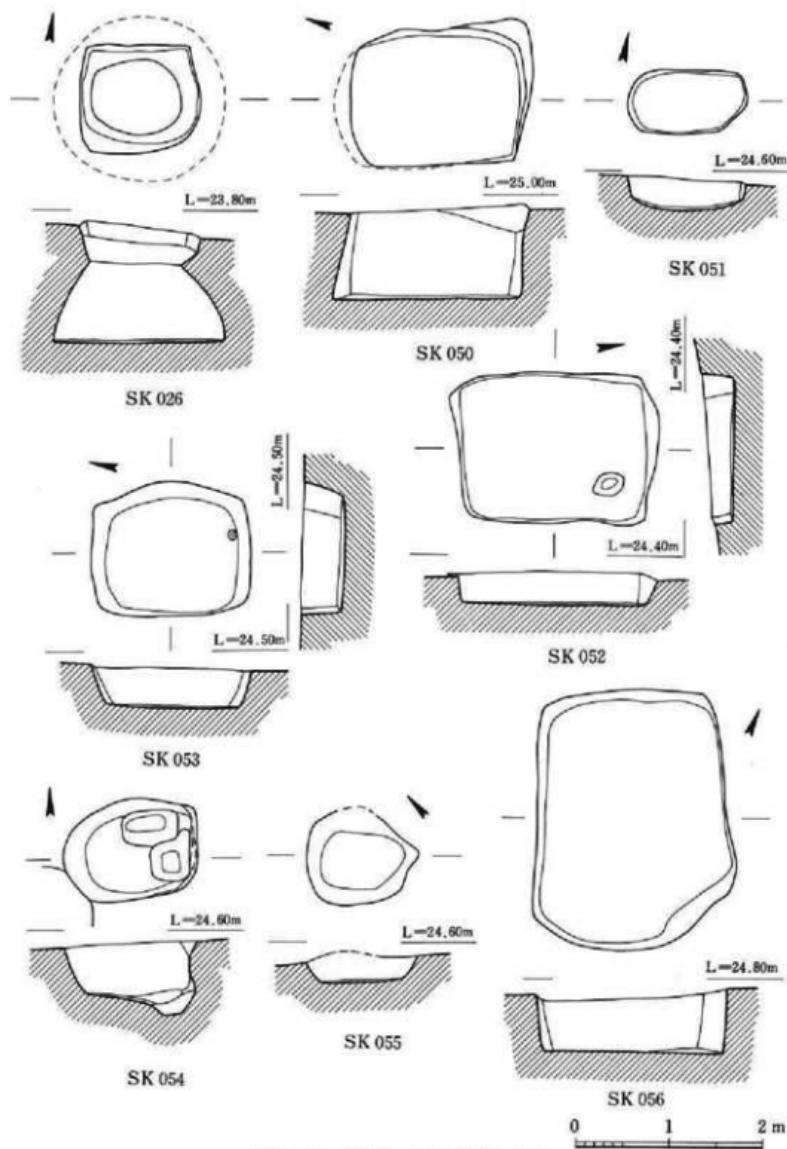


Fig. 42 貯藏穴・土壤実測図 (6)

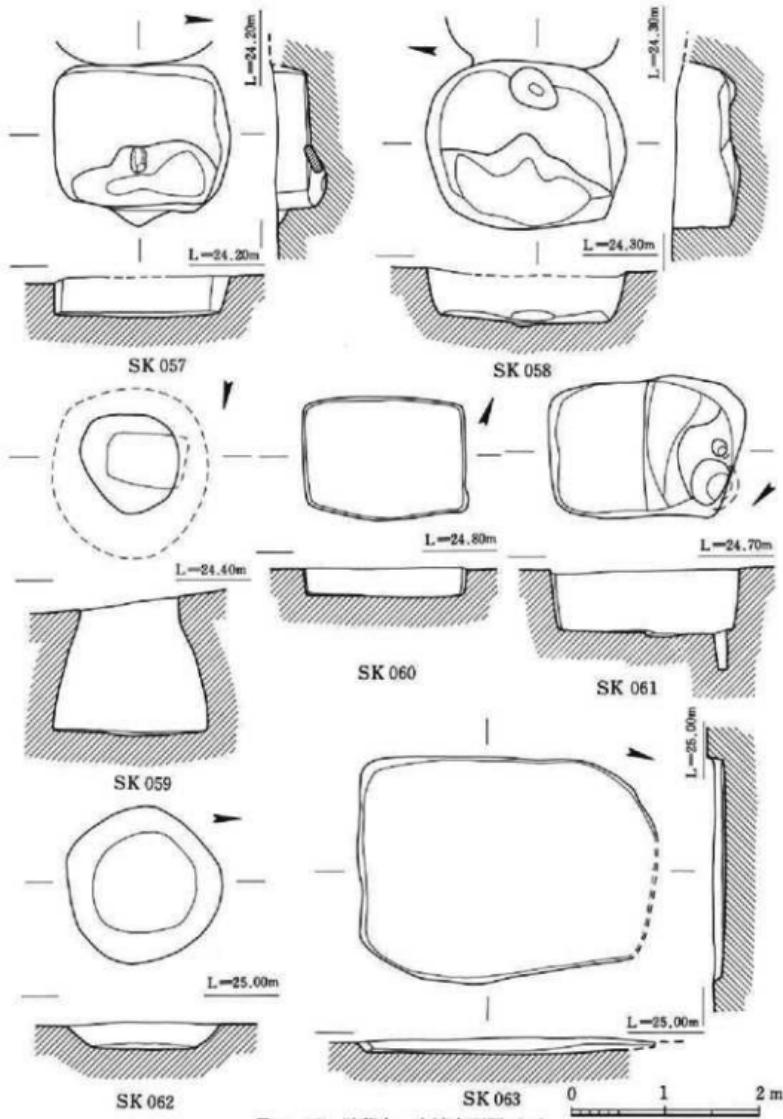


Fig. 43 貯藏穴・土壤実測図 (7)

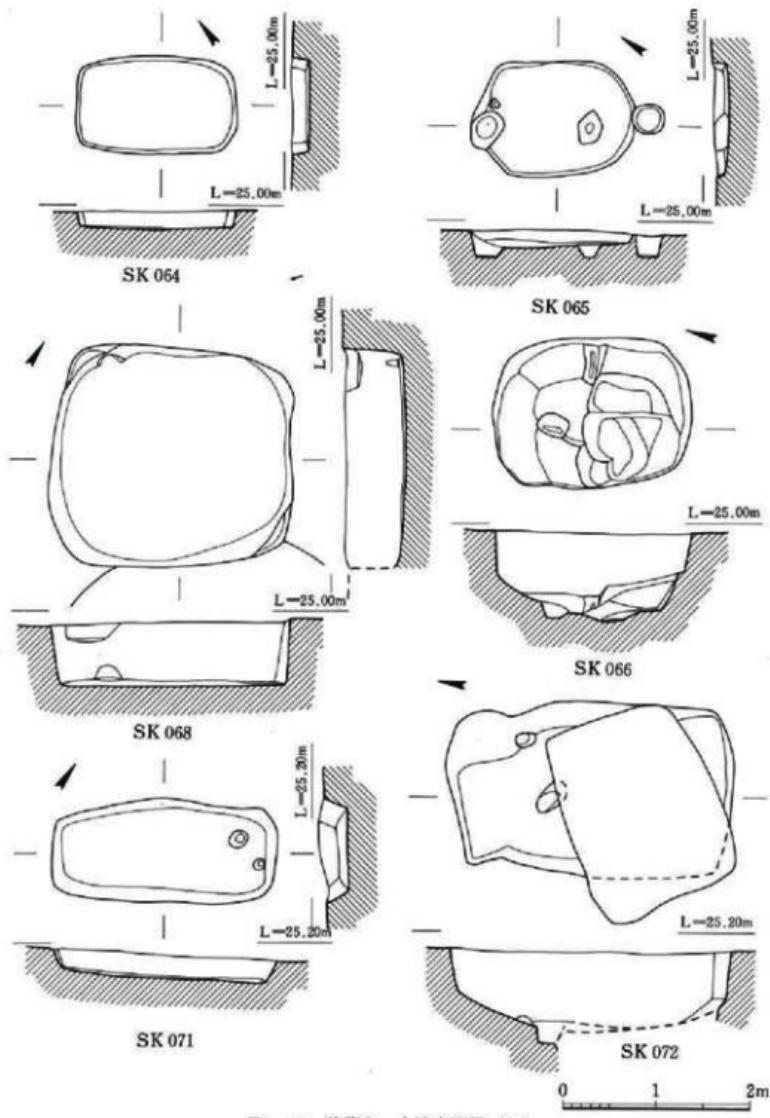


Fig 44 貯藏穴・土壤実測図 (8)

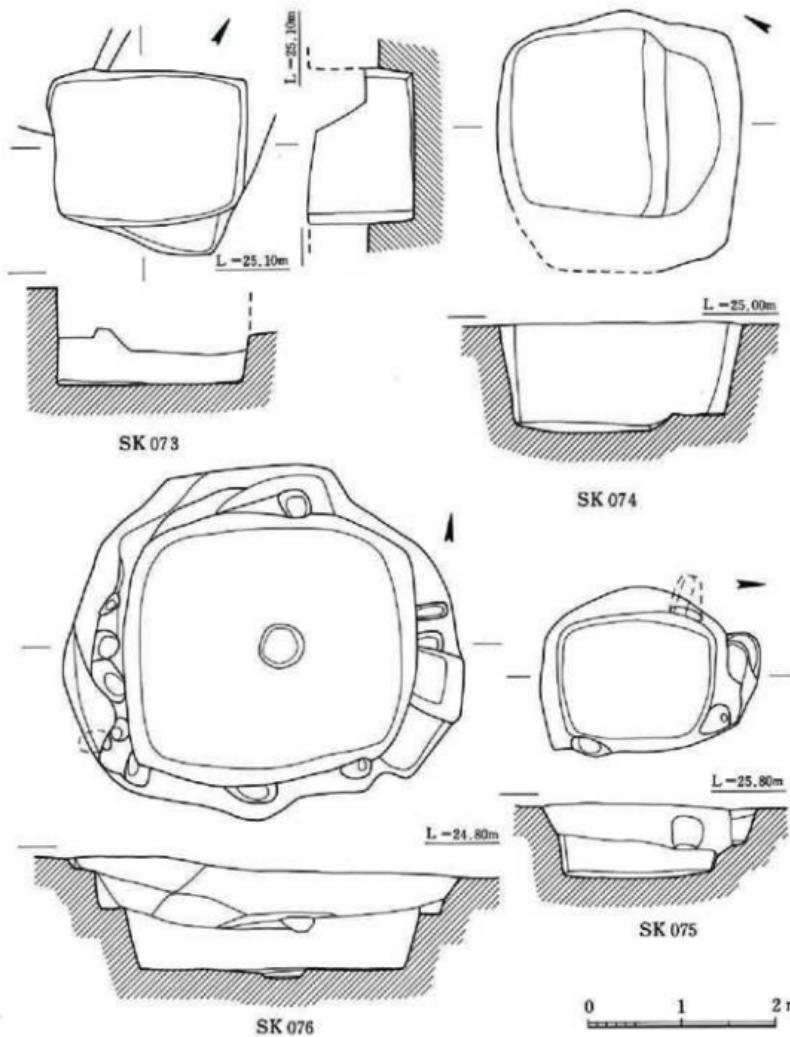


Fig. 45 廉蔵穴・土壤実測図 (9)

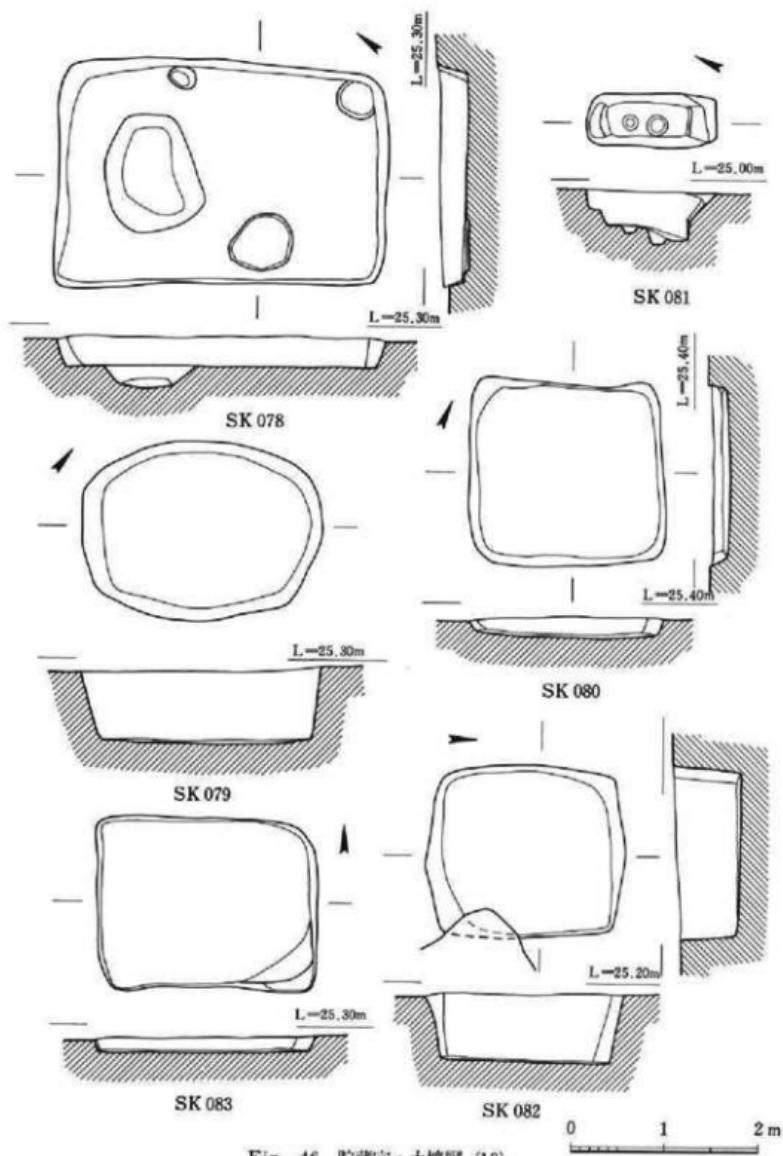


Fig. 46 貯藏穴・土壤図 (10)

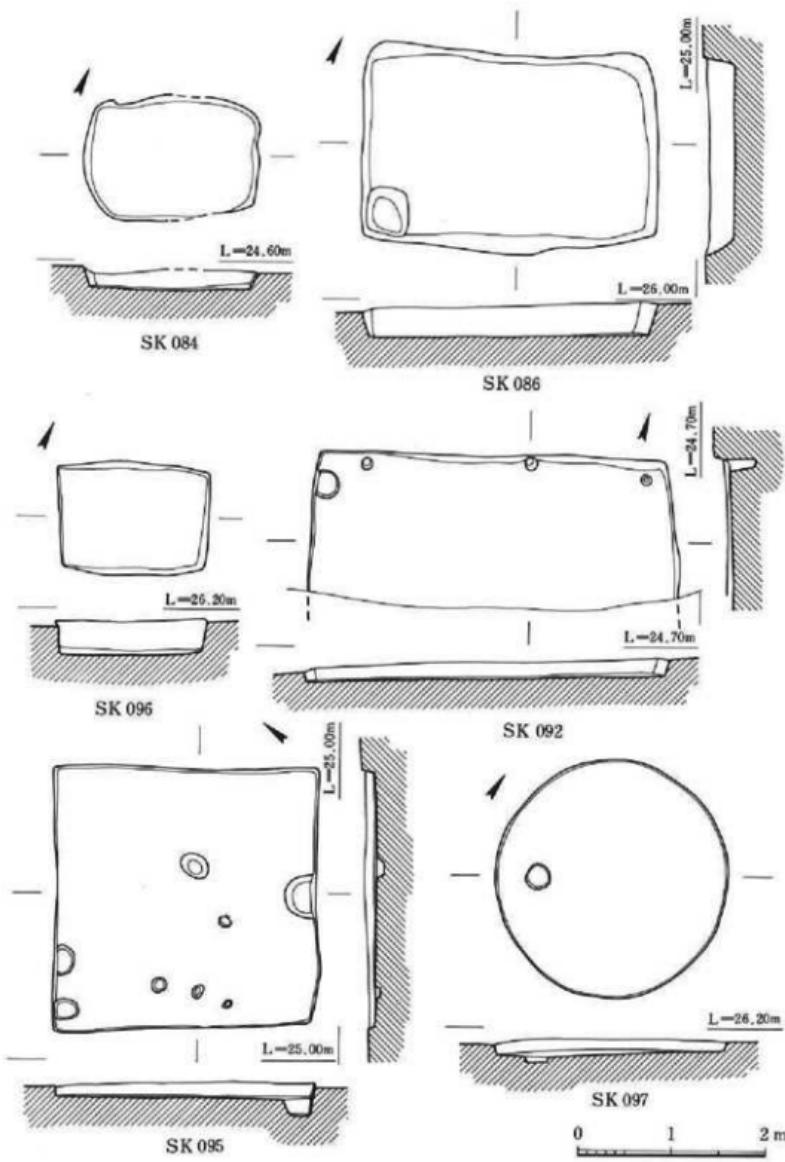


Fig. 47 貯藏穴・土壤図(1)

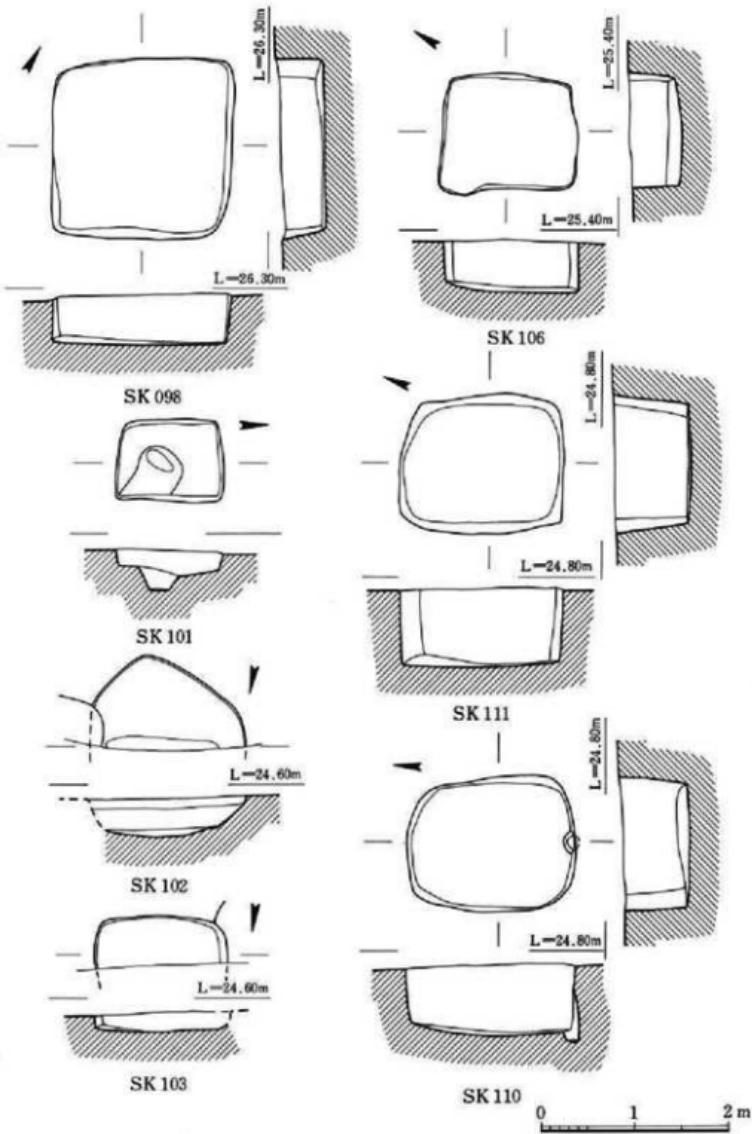
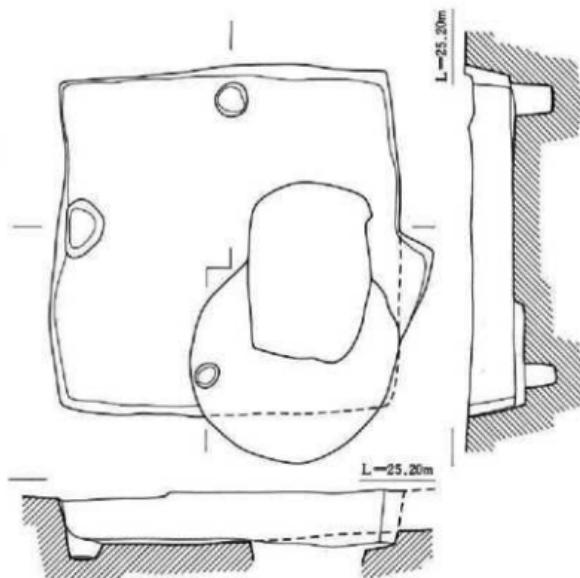
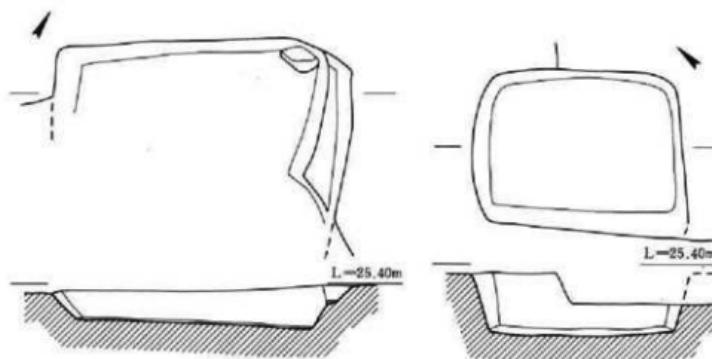


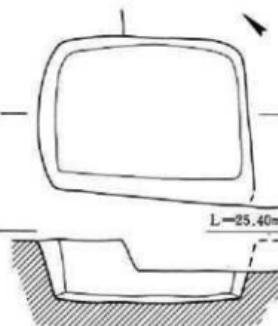
Fig. 48 貯藏穴・土壤図 (12)



SK 112



SK 115



SK 116

0 1 2 m

Fig. 49 貯藏穴・土壤実測図 (13)

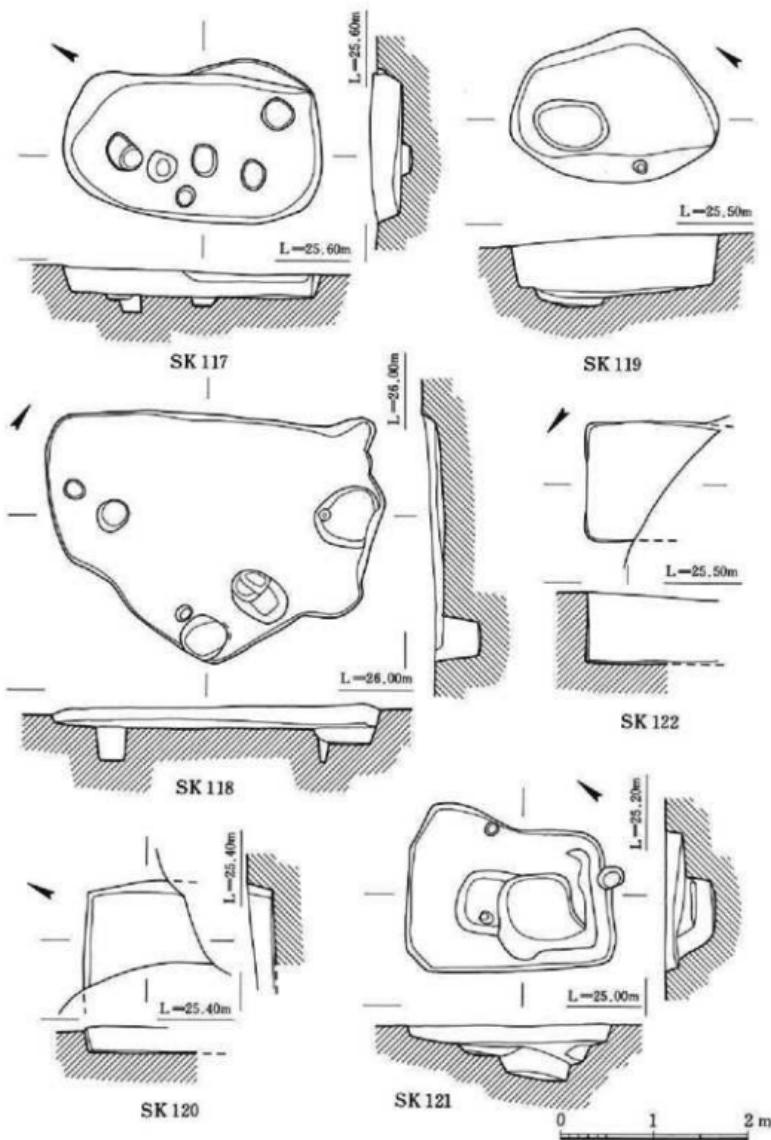


Fig 50 貯藏穴・土壤実測図 (14)

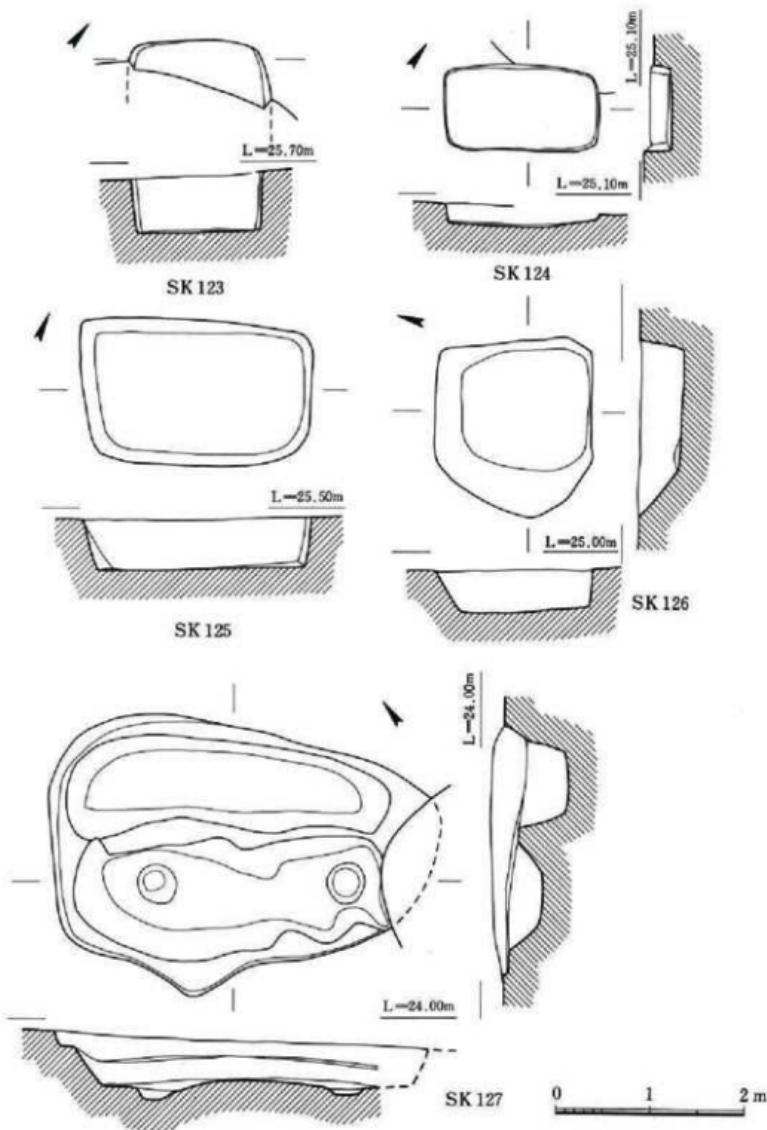


Fig. 51 貯藏穴・土壤実測図

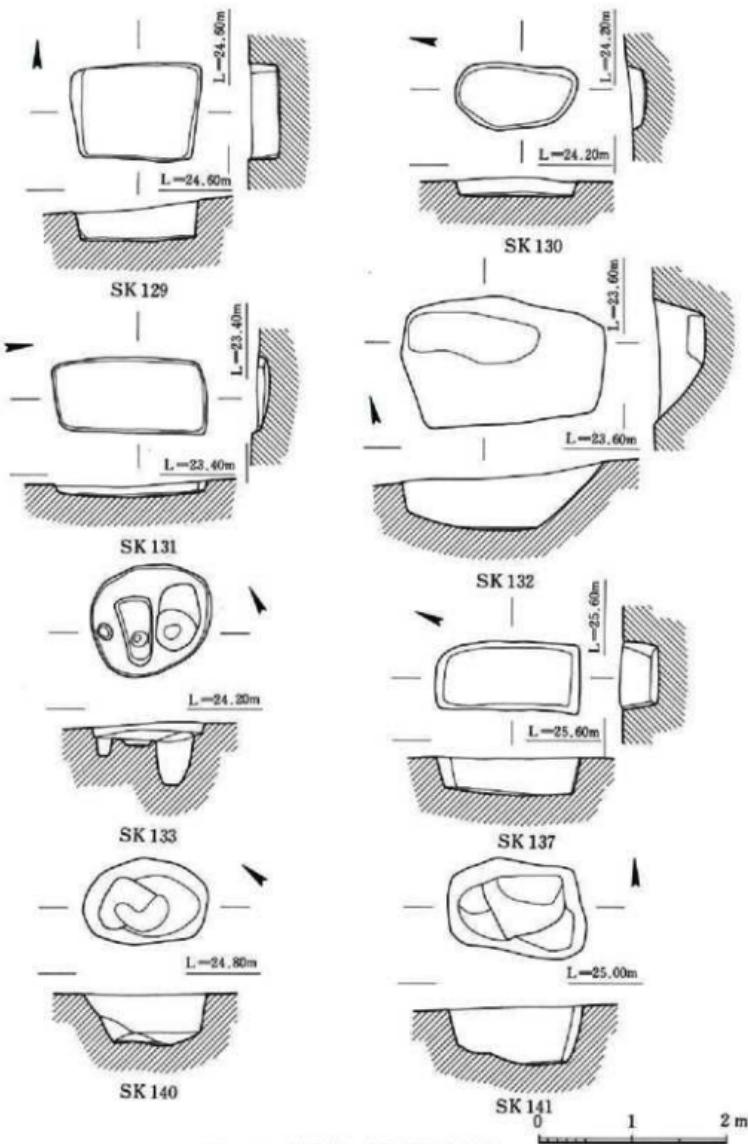


Fig. 52 貯藏穴・土壤実測図 (16)

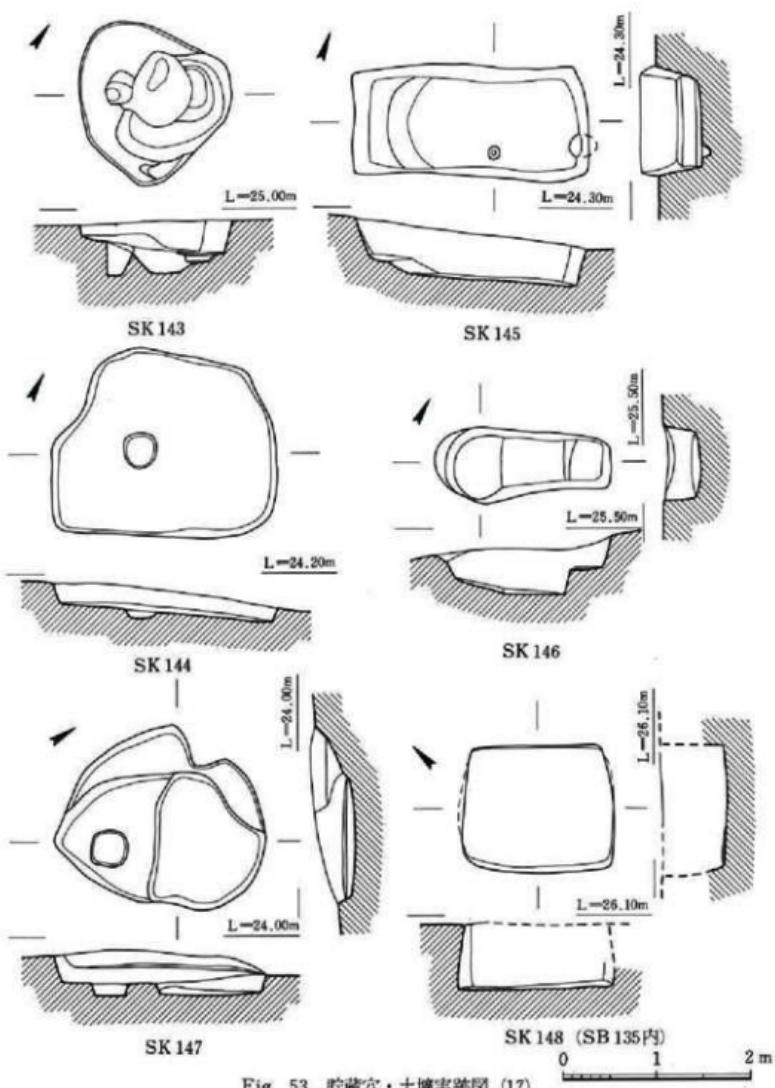


Fig. 53 貯藏穴・土壤実跡図 (17)

(4) 円形周溝墓

調査区南東部に孤立して存在する。内部主体として木棺をもつ外径約9.5mの円形周溝墓であるが、南東部周溝は削平されていた。

周溝は外周の径9.20~9.48mで、ほぼ正円に巡るが、南西部は0.72mの間掘削されず陸橋となっている。溝の断面は底面が平坦となるいわゆる梯形をなし、幅0.38~0.72mの規模である。深さは最も深いところで0.59mまで残存しており、溝底には数ヶ所深さ10cm程の穴状となっている部分もある。また陸橋部は主体部の主軸上に存在するが、主体部を挟んで反対側の周溝北東部には幅約1.2mの範囲で底面が約10cm高まっており、中央に径0.12m、深さ約10cmの小穴が存在する。また主体部主軸とほぼ直角北西部周溝も約1mの範囲で底面が10cm弱高まっているが、南東部は削平のため不明である。周溝内の土層は不明確であったが、ほぼレンズ状に3種類ぐらいの土が堆積していたことが窺われた。

主体部として長辺2.04m~1.94m、短辺1.14m~1.06mで、深さ22~24cm残存する壙が検出され、その主軸に沿って長さ1.80m、北西部での幅0.43m、南東部での幅0.36m、深さ1~2cmの棺の痕跡が認められた。おそらく木棺を納めたものであろう。また棺の中央下部には長径0.77m、短径0.24m、深さ10~12cmの長楕円形の穴が存在したが、主体部に伴うものかどうかは不明である。主体部の方位はN 60°Eである。

遺物としては土師器の小壺と甕がそれぞれ1個分陸橋部すぐ北の周溝内から40cmの間隔をもって出土しただけであった。

主体部の構造から棺幅の大きい南西側を被葬者の頭位と考えると、頭位方向に陸橋を設け、すぐわきに土器を供獻したことになる。また足元方向の周溝内の高まりや小穴も、主体部主軸線上にあり、この周溝墓の構造上の何らの痕跡であるかも知れない。

(5) 火葬墓

北部のS B001住居跡の南方約8.5m、SK117土壤東そばで検出された。

藏骨器を納めるための壙は長径0.44m、短径0.36mの円形に近い平面形をなし、深さは7cm残存していた。またこの壙の底面中央には径8.0cm、深さ2cmの円形の小穴を設けていた。

藏骨器としては、この壙内小穴直上に土師器の皿を上向きに置き、藏骨器本体となる口顎部を打ち欠いた須恵器壺を口が皿と合うように埋納され、壺の肩部から胴部にかけての周囲は3個の土師器杯で立てかけるように囲んでいた。

出土品としてはこれら藏骨器に用いられた土師器皿1個、土師器杯1個、須恵器壺1個以外皆無で、壺内部からは木炭・焼土・灰に混った小人骨片が出土しただけであった。

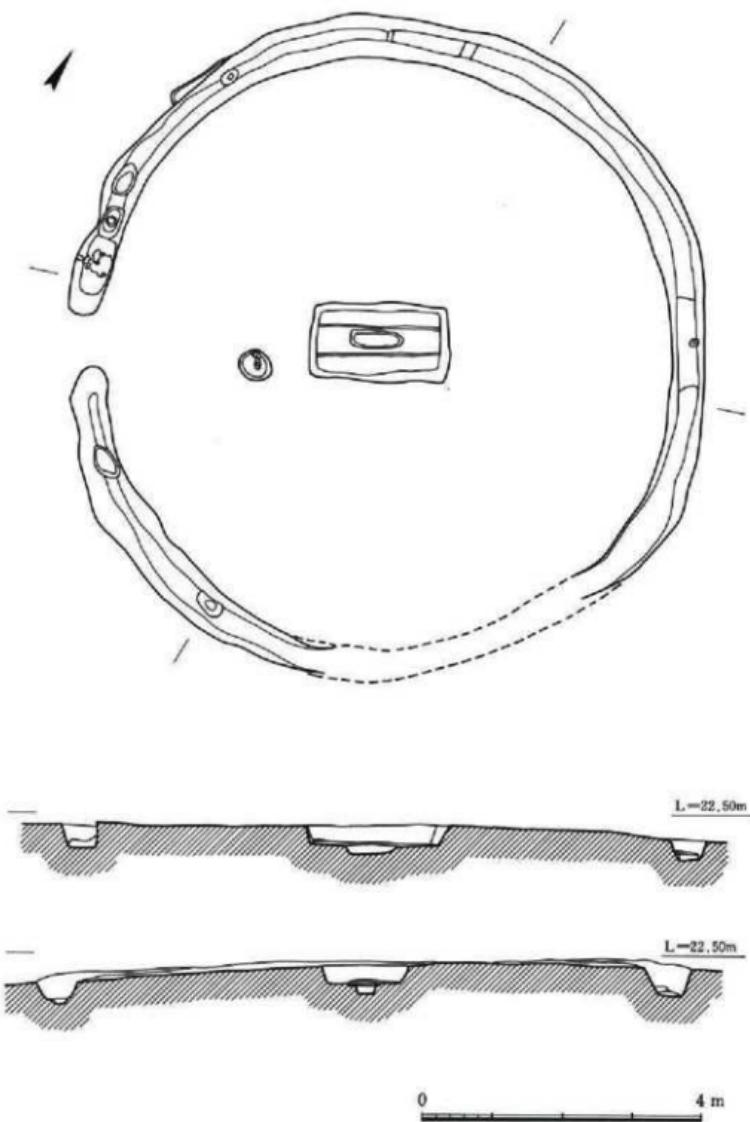


Fig. 54 円形周溝墓実測図

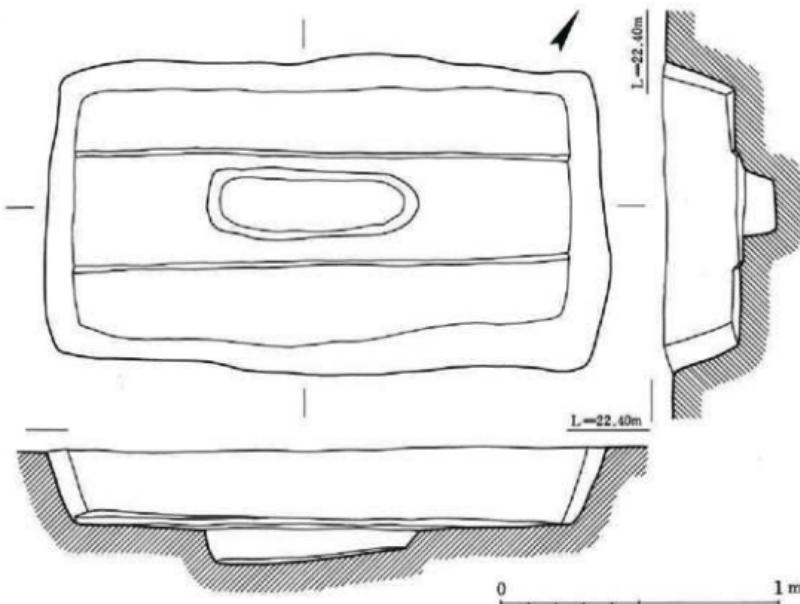


Fig. 55 円形周溝墓主体部実測図

(6) その他の遺構

以上述べた竪穴住居跡、土壙、円形周溝墓、火葬墓以外の遺構として、柱穴らしい小穴群や戦時中の塹跡が存在した。

柱穴群は北部の S B001住居跡と S B103・S B103住居跡に囲まれた地域一帯、中部の S K063土壙周辺および南部の平面長方形住居跡に囲まれた地域一帯に特に集中する。これらの中には柵状になるものも一部存在するが、建物跡と考えられるものは南部の S B044住居跡と S B047住居跡の間に存在する 1 間 × 2 (または 3) 間の掘立柱建物らしい遺構だけである。柱穴状の小穴内からは弥生土器片のうち平面円形住居跡と同時期のもの以外は出土しない。

戦時中の塹と考えられるものは 3ヶ所検出した。S K136・S K150・S K151土壙である。このうち S K136・S K150土壙は形態が同じで、径約 1.0m、深さ約 1.0m の塹で、内部は床面から上へ約 35cm 半円部分を掘り残し、丁度座席状にしている。S K150土壙からは機銃の鉄製弾倉や真鍮製薬莢が多数出土し、この塹を機銃座として利用したことが窺えた。また S K151土壙は径約 2.2m、深さ 0.60m の平面円形の塹で、中央部径 1.30m を床面から上位約 10cm 掘り

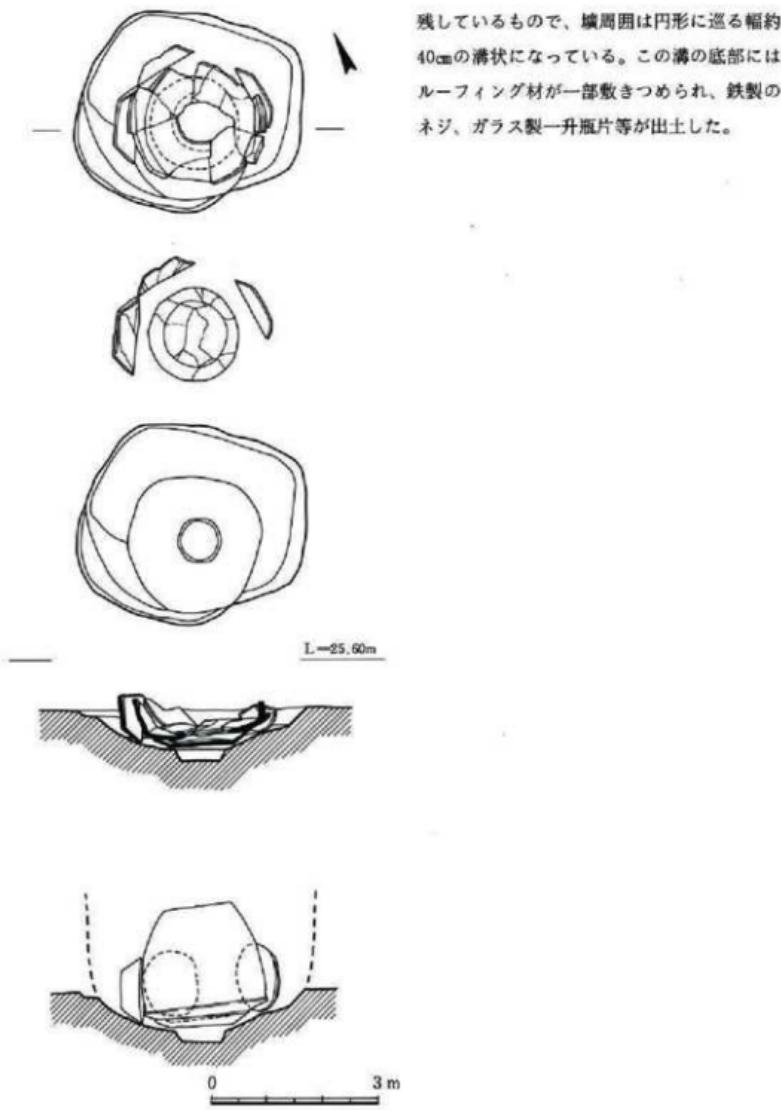


Fig. 56 火葬墓実測図及び復元図（下）

2. 遺 物

一本谷遺跡から出土した遺物には土器、土製品、石器、石製品、鉄器などがある。これらの遺物は時期的には弥生時代、古墳時代前期、平安時代前期の3群に大きく分れる。以下3時期に分けて概観したい。

(1) 弥生時代の遺物

一本谷遺跡出土の遺物の中で最も量が多い。ほとんどが竪穴住居跡や貯蔵穴、土壌から出土したものである。平面円形の竪穴住居跡ではSB069・SB091住居跡、平面長方形の竪穴住居跡ではSB034・SB039・SB047・SB049住居跡などからまとまりのある一括遺物を出土したが、特にSB039住居跡の一括遺物はすべてが床面で3群に分れて検出された。他の住居跡では土器の小破片を数個から十数個出土する程度であった。貯蔵穴や土壌から出土した遺物は小破片の土器が多いが、SK012・SK030・SK072貯蔵穴やSK086土壌からは土器を一括して出土した。

土器以外の弥生時代の遺物としては、石器・石製品（勾玉も含む）。土製品・鉄器がある。これらも竪穴住居跡から主に出土したものだが、特に石錐の出土数が多く、SB090・SB135住居跡では10個以上を出土している。

土器・土製品

土器には甕・壺・鉢・高杯・蓋・器台があり、土製品としては支脚・土弾・筋錘車がある。土器は形態の相違により大きく次のように分類される。

甕……A・B・C・D・E・F・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P

壺……A・B・C・D・E・F・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P・Q

鉢……A・B・C・D・E・F・G・H・I・J・K・L・M

高杯……A・B・C・D

蓋……A

器台……A・B・C・D・E

これらは細部の形態上の特徴や法量の相違によりさらにいくつかに細分されるものが多い。

甕A いぢじく形の器体にゆるやかに外反するいわゆる如意形口縁がつく口径16.5-25cmの甕である。出土量は少ないが、これらは口縁部に刻目がつかない甕Aa (109・172・

387)、刻目がつく甕Ab (124・494)、口縁下に沈線を1条線を1条めぐらせ甕Ac (131・510) に細分される。

甕B 甕Aと同形態の器形に如意形口縁の下位に断面三角形突帯を1条めぐらすもので、出土量が少ない。口縁部と突帯に刻目がつかない甕Ba (439・449・472) と刻目がつく甕Bb (173) に細分される。Ba類は口径が25cm前後の甕BaII (449・472) と40cmを越える甕BaI (439) がある。甕Bbは27cm前後で、器高は推定で32cm前後である。

甕C いちじく形の器形に断面逆L字形の短かい口縁がつく甕で、口径18cm前後と小形である。出土数が極めて少ない。

甕D いちじく形の器体の上端に断面三角形の突帯をめぐらすもので、口径18~24cmの甕である。口縁外周に刻目がつかない甕DaI (432) と刻目がつく甕Db (124・154) に細分される甕Dbには口外径24.0cm器高27.0cmのものがある。出土量は少ない。甕Daには口径11.8cm、器高12.5cmの小形の手堤土器(甕DaII、414)もある。

甕E 出土した甕の大半を占めるもので、甕Dと同器形で、口縁部下位に断面三角形突帯を1条めぐらすものであり、口縁、突帯外周に刻目がつかない甕Ea (393・409・515)、双方に刻目がつく甕Eb (177・474)、突帯のみに刻目がつく甕Ec (176・343)に細分できる。量的には甕Eaが甕Ebよりやや多く甕Ecは確実なもので1個体のみであった。法量的には口径18~25cm前後の甕EaIII (177・388)、30cm前後の甕Ea (337)・甕EbII (474)に2分され、さらに甕Eaには口外径40.2cm、器高43.1cmの大形品(甕EaI、515)もあった。甕Ecは口径26cm内外であった。

甕F (419) おそらくいちじく形の器体の上端が直立するもので、特別な口縁部を造らないものである。口径14.8cm、推定高15cm前後の小形品で、極めて稀なものである。

甕G いちじく形の器体に断面T字形の平坦口縁がつくもので、口径25~30cm前後の甕である。口縁部下位に断面三角形突帯を1条めぐらす甕Gb (478)と突帯をもたない甕Ga (476・477)に細分されるが、いずれも出土量が極めて少ない。

甕H 蓋形土器からの発展形態と考えられる口縁部が大きく外反する大形の甕で、口径は50cm前後と大きい。口縁部の内側に補強用の隆帯をもつ甕Hb (423・471)ともたない甕Ha (252)に分れる。両者とも出土数は少ない。

甕I (482) 1個体出土した。丸くふくらむいわゆる截頭卵形の器体に、内側への張り出しの強い断面T字形口縁部をもち胴部には断面M字形の突帯を1条をめぐらす大甕である。

これらの甕は破片が多く、全体を復元しうるものは極めて少なく、口縁部から底部まで復元できるものはわずか5個体しかない。底部の形態は、底部がすぼまるものと裾広がりのものに大別できるが、前者は完全な平底のものとわずかに上げ底のものに

分けられ、後者も平底のものと上げ底のものに分けられる。完全に復元できる5個体についてみると、甕DaⅡには裾広がりの上げ底の底部がつき、甕Dbには裾広がりの平底の底部がつくものが各1個体あった。甕EaⅢは3個体あり、甕EaⅠには裾が広がらない平底の底部がつくものが1個体あり、甕EaⅢには裾広がりの上底の底部と裾が広がらない平底の底部がつくものがそれぞれ1個体あった。

甕Aから甕Iのほとんどが外面ハケメ調整、内面ナデやナデツケ、口縁部・突堤周辺ヨコナデ調整であり、外面に煤が付着するものも存在する。

甕J (38) 砲弾形の器体に丸味をもって外に開く短かい断面くの字形口縁部がつくものである。底部は平底で内外面ともハケ目調整で、口径13.6cm、器高12.4cmである。

甕K (57) 截頭卵形の器体に稜がつかない断面くの字形口縁がつく。外面ハケメ、内面は上位がハケ目、下位がナデ調整。口径12.8cm。

甕L 截頭卵形の器体の断面くの字形口縁がつくもので、口縁部が短く体部と口縁部の屈曲部内外に稜がつき口縁部が丸く口縁端部を面取りする甕La (39)、口縁端部が丸く口縁端部も丸い甕Lb (61)に細分される。甕Laは体部外面ハケメ、内面ナデ、口縁部内面ハケメ調整である。口径13.4cm。

甕M 体部上位に肩部最大径をもつ長脛の截頭卵形の器体に端部を面取りした断面くの字形口縁がつくもので、体部と口縁部の屈曲部は内面に稜がつくが外面は丸味をもつ。底部は丸底気味の不安定な平底である。外面ハケメ、内面ナデ調整であるが、体部内面上端にはハケメが残る。口径24.9cm、器高44.9cmと大形の甕MⅠ (63)と口径17.0cmの小形の甕MⅡ (40)とに分れる。

甕N 器高に対して口径が大きく、底径も大きい類のもので屈曲の小さく端部が丸い断面くの字形口縁がつく。内外面ハケメ調整。平底の甕Na (59)と高台状の脚がつく甕Nb (60)に分れる。59は口径19.4cm、器高18.9cm、60は口径20.1cm、脚部を除く器高は17.9cmである。

甕O (88) 端部が面取りされた断面くの字形口縁をもつもので、屈曲部内面は断面三角形に突出し稜をつくり、外面は口縁部直下に断面三角形突堤を1条めぐらす。口縁外面下位にハケメが残るが、器体は内外面ハケメ調整と推定される。口径35.2cmと大形の甕で、埋葬用に用いられたものにこの類の大甕がある。

他に手捏により成形された甕形のミニチュアがある(甕P…37)。底部は丸底気味の平底で、内面ナデ、外面はヘラ状のものでタテ方向に削っている。残存高6.5cm。

甕A (130・375) いわゆるたまねぎ形に近いわずかに肩の張った丸い体部に断面逆L字形の口縁部がつく甕で、口縁部、頸部が比較的明瞭に区別できるものである。完全に復

元できるものが1個体あり(375)、口径18.5cm、器高31.1cmで、底部は厚い平底がつく。外面はハケ目を施し、赤色顔料を塗布した可能性がある。

壺B 丸い体部に大きく外反する口縁部がつくもので、素文の壺Ba(20・31・441)、肩部と頸部の境付近に2本の沈線をめぐらす壺Bb(267・468)、小さな断面の三角形突帯をめぐらす壺Bc(272・516・416)、三角形突帯とその下位に羽状文のつく壺Bd(156)に細分できる。これら壺Bは法量により大きく2分される。すなわち口径25cm前後~30cmに近く、器高が30cm以上のI類と口径10cm前後、器高20cm未満のII類であり、Ba・Bb・Bc類とともにI・II類に分類でき、Bd類は破片であるが全体が小さくII類に入るものと思われる。B類は外面にミガキを施したものが多い。

壺C (129) 1個体ある。長胴の壺で体部上半は壺Bbと同じく、口縁部を欠損するがおそらく大きく外反する口縁がつくと考えられ、その下位に2条の沈線がめぐる。しかし体部下位はすばまらず、丸味をもちらながら平底の底部に至る壺である。頸部径13.4cm、復元器高約26cmで、外面は摩耗のためナデかミガキが調整痕が不明瞭である。

壺D (26・218) 小破片が出土したにすぎない。おそらく丸味をもつ体部に直立あるいは内傾する短かい口縁部がつくいわゆる短頸壺の一類である。口径は12.2と16.0cm。この破片とともに、低い断面三角形突帯を2条めぐらす胴部片が出土しており、あるいは同一個体かも知れない。

壺E (470) 1個体出土した。最大径を上位にもつ丸味のある体部の内傾する上端外側に断面三角形突帯をつけた短頸壺で、口縁部には紐通しのための穿孔が4ヶ所ある。口径13.0cm、復元器高20.4cm、外面はナデ調整を施す。

壺F (483) 1個体出土した。上位に最大径をもつ器体に大きく外反する口頭部がつく、いわゆる広口壺である。口径25.2cm、復元器高は26.7cmで、器面は荒れて調整不明瞭であるが、おそらく丁寧に外面をナデたつくりの良い壺かと思われる。

壺G (128) ミニチュア土器である。口縁部を欠くが、器体上位が内傾して口縁部がつくもので、壺の類に入るだろう。ミニチュアにもかかわらず、外面は細かいハケ目調整を施す。胴径6.6cm、復元器高約7.5cmである。

壺H (41) 球形に近い体部に丸味をもって屈曲するくの字形の比較的短かい口縁がつくもので、端部は丸い。内面ナデ(外面は不明)調整である。口径9.6cm。

壺I (42) 球形に近い体部に稜をもって屈曲する断面逆L字形の極めて短かい口縁がつくもので、端部は面取りされる。外面ハケメ、内面ナデ調整。口径10.6cm。

壺J (52) 口縁部を欠く。算盤玉形に近い低い体部に内傾する頸部がつく小形の壺である。底部は尖り気味の丸味である。内面はナデ調整であるが部分的ハケメが残り、外面は赤色顔料を塗り磨研している。胴径13.2cm。

- 壺K (53・54・56)** 球形の器体にあまり開かない直立気味の口縁部がつくもので、底部は丸底である。大形の壺K I (56) と小形の壺K II (53・54) に分れる。壺K Iは外面ヘラミガキ、内面ハケメのあと部分的にヘラをあてている。胴径19.1cm、器高は推定20cm弱と考えられる。壺K IIは口縁部内面ヨコ方向ハケメ、体部内面上位はナデ、下位はヘラケズリ調整で、外面は赤色顔料を塗り磨研している。完形のもので口径9.4cm、器高13.0cm。
- 壺L (55)** 体部上位があまり内傾しない広口の壺で、直立気味に開く口縁部がつく。底部は丸底気味の平底である。外面は上半がハケメ、下位はヘラケズリ、内面は上半がヨコ方向のハケメ、下位はナデ調整である。口径14.6cm、器高13.6cm。
- 壺M** 脇径の大きい壺で、口頸部を欠くが、おそらくいわゆる袋状口縁がつくものと思われる。肩部に2条の断面三角形突帯を2条めぐらす壺Ma (43) と脇部に断面コの字突帯を1条めぐらす壺Mb (44) がある。前者は外面ハケメの後ナデ、内面ハケメ調整で、最大径32.3cm、後者は外面ハケメ、内面ナデ調整で最大径(突帯部径)32.4cmである。
- 壺N** 上位に最大径をもつ球形に近い器体に大きく開く頸部といわゆる袋状口縁がつくもので、法量により大形の壺NIと小形の壺N IIに分け、さらに突帯の有無や形状により壺NIは壺Na I、壺Nb I、壺Nc Iに細分される。壺Na I (50) は肩部に櫛描状の平行線帯がつくもので、底部は丸底気味の平底である。体部は内外面とも下半部が(ハケメ後?)ナデ、上半部・頸部はナデ調整である。口径23.0cm、器高39.8cm。壺Nb I (51) は肩部と頸部との境と体部下位に刻目がつく断面三角形突帯がそれぞれ1条めぐるもので、底部は丸底気味の平底である。内外面ともハケメ調整であるが脇部突帯下の外面は(ハケメ後)ナデしている。口径26.0cm、器高40.2cm。壺Nc I (105) は肩部と頸部の境に断面三角形突帯が2条めぐるもので、体部下半を欠く。外面ハケメ、内面は頸部がハケメ、体部はナデ調整。口径24.0cm。壺N II (86) は袋状口縁がつく頸部の短い小形の壺であるが、頸部の破片のみである。頸部は外面ハケメ、内面ナデ調整。口径14.1cm。壺N類の袋状口縁部と頸部の形態は壺Na I・Nb Iは頸部が長く口縁部の内側への屈曲も外部に稜をつくって内傾するが、壺Nc I・N IIは頸が短かく、口縁部の屈曲も鈍い。
- 壺O (356)** 肩部から口縁部にかけての破片で、内傾する肩部に、外に開く口縁部がつくものである。内面はハケメの後ナデ、外面ハケメ調整。残存脇径31.7cm。
- 壺P (84)** 口頸部の破片で、わずかに外反しながら内傾する頸部である。直立する口縁部の端部は面をもつ外面ハケメ内面ナデ調整。口径11.0cm。
- 壺Q (48)** 手捏により成形された壺形のミニチュアで、球形に近い体部にわずかに内傾しながら開く口縁部がつく。内外面ナデツケで成形している。口径4.6cm、器高7.0cm。

他にやや小形のもの（49）もある。

鉢A（174） はいわゆる如意形口縁をもつもので、口径32.8cm。

鉢B（334） 断面三角形に近い突帯を器体上端につけたもので、口径27.1cm。

鉢C 断面三角形の口縁部とその下位に、同じく断面三角形突帯を1条めぐらすもので、口縁部・突帯ともに刻目がつく鉢Ca（121・429、口径39.4cm）と、突帯のみに刻目がつく鉢Cb（123・口径48.4cm）に細分される。

鉢D（517） 大きく開いた体部上端をそのまま口縁としたもので、口径23.3cm、器高12.0cmである。これらは形態・技法の上から対応させると、鉢Aは対A・鉢Bは対D、鉢Caは対Eb、鉢Cbは対Ecとの共通点が多い。

これら5種の鉢は確実なものでそれぞれ1個体づしか出土していない。調整は各類に相違をみる。鉢Aは外面ハケ目、口縁部内面ハケ目、鉢Bは体部外面ミガキである。他の鉢C・Dは外面が摩耗して調整痕が不明瞭であるが、おそらくナデ調整と思われる。

鉢E 平底の底部から体部がわずかに内湾しながら直線的に開き、その端部をそのまま口縁部とした器高が低い鉢で、体部が直線的な鉢Ea（33）、体部がやや内湾する鉢Eb（32・78・79）、体部がやや内湾するが体部が大きく聞く鉢Ec（34）に細分できる。これら鉢Eは内面ナデで外面はハケメまたはハケメ後ナデしているものがある。口径15.6cm～17.8cm、器高6.7cm～8.1cm。鉢Ecは口径18.4cm、器高6.3cmと口径が大きくなっている。

鉢F（66） 内湾しながら聞く体部の上位が上へ立ち上るもので、底部を欠く、内外面ハケメ調整だが器面が荒れている。口径17.6cm。

鉢G（68） 内湾しながら聞く体部の上位が直立するもので器高が口径に較べ大きくなっている。器面が荒れており調整痕が不明瞭であるが、内面上位にはヨコ方向ハケメがかすかに残る。口径11.6cm、器高8.7cm。

鉢H（67） 小形の鉢で、やや内傾する体部上位を強いヨコナデによって受け部状の立ち上り口縁をつくっている。体部は外面ハラミガキ、内面ケズリ後ナデ調整。口径8.6cm。

鉢I 平底に近い丸底の底部からわずかに内湾しながら外に聞く体部がつくもので、脚部がつかない鉢Ia（65）と脚付きの鉢Ib（64）に分れる。两者とも体部外面ハケメ調整。鉢Iaは口径14.6cm、器高7.8cm。鉢Ibは口径13.5cm、残存器高8.4cm。

鉢J 半球形に近い器体に断面くの字形口縁がつくもので、小形で深みのある鉢JII（94）とやや大形で浅い鉢JI（95・96）に分れる。鉢JIIは内面ナデ、外面不明で、口径21.4cm、器高12.9cm。鉢JIは外面ハケメ調整であるが内面はハケメのものとナデ

調整のものがある。口径26.6cm-30.2cm。

鉢K (69) 浅い鉢で、丸底の底部から大きく外に開く体部は上位で直立し、外反する幅広の口縁部がつく。内外面ともハケメ調整で、口縁端部は面取りする。口外径24.8cm、器高8.8cm。

鉢L (80) 平底に近い丸底の底部に外に開く体部がつく大形の鉢で、やや肥厚した体部上端を面取りしそのまま口縁とし、体部上位に断面台形の突帯を1条めぐらすものである。内面ナデ、外面ハケメ調整。口外径30.2cm、器高14.9cm。

鉢M 手捏により成形された鉢形のミニチュア土器である。丸底の底部から体部が直線的に開く鉢Ma (81) と体部が内湾する鉢Mb (396) に分れる。双方ともナデツケで調整されており、外面には特に指頭圧痕が残る。鉢Maは口径7.6cm、器高3.5cm、鉢Mbは口径7.7cm、器高3.9cm。

高杯A (385) 杯底部と脚上部の小破片である。体部は内湾気味にひらく。内外面ナデ調整。

高杯B (35) 杯部の破片のみである。大きく開いた杯底部から口縁部が垂直に立ち上り、先端を面取りしてそのまま口縁としたものである。口縁部はヨコナデ、他は不明瞭ながらナデ調整らしい。口径30.3cm。

高杯C (72) 杯底部がわずかに内湾しながら大きく開き、鉢Kのように大きく外反する口縁部がつくと推定されるもので、杯体部と口縁部との境は内外ともに稜がつく。脚部は長くラッパ状に開き、円形の孔を4または8ヶ所穿っている。杯体部内外ナデ、脚部外面ハケメ、内面ナデ調整が主である。推定口径26cm前後、推定器高21cm前後、脚裾部径15.8cm-17.0cm。

高杯D (71) 脚部のみ存在する。ラッパ状の脚部が下位で内湾するもので4ヶ所に円形小孔を穿つ。脚部上位は外面ハケメ後タテ方向にヘラ状のものでミガキ、内面にはシボリ痕が残る。中位から裾部上の外面はハケメであるが、内面は裾部上がハケメ、中位がヘラケズリとなっている。裾部径19.7cm。高杯Cに較べ脚部がやや長めである。

高杯E (74) 底部外縁から大きく外反する口縁部がつく杯部と、これとほぼ同形態の裾部の上にエンタシス状の中ぶくらみのある支柱がつくもので、杯部・脚裾部先端を欠く。杯の底部と口縁部との境および脚裾部の外反屈曲部は突帯状に隆起し、刻目を施す。脚裾部上位には5ヶ所に円形小孔を穿つ。ナデツケ調整の脚部支柱内面を除き、内外面ともハケメを施すが、杯部内面と脚部外面はヘラミガキでハケメを消している。杯口縁部現存径18.5cm、脚裾部現存径16.3cm、現存器高18.6cm。

蓋A (386) 器体が大きく開き笠形となる。底部は裾広がりの上げ底で、上部でくびれるためつまみ状になっている。口外径23.8cm、器高9.5cm。底部付近の外面にハケ目が残るが、他はナデ調整である。

また蓋E（紐通し孔付きの短頸蓋）と組み合う蓋も存在したと考えられるが、出土をみなかった。

器台A (479・480) 口径が裾部径よりわずかに小さく、全体的に鼓形をなす。口縁部・裾部内面にヨコ方向のハケ目、外面はタテ方向のハケ目を施す。器高は14.6cmと14.8cmである。

器台B (47) 口縁部がゆるやかに外反し、端部に面をもつもので下半部を欠いている。受部内外ヨコナデ、体部外面ハケメ調整、内面は表面剥離のため不明。受部径16.0cmと中期の器台Aに較べ大形である。

器台C (76) 直線的に聞く長い脚部に外反して聞く受部がつく。受部端部ともに面をもつ。外面はタタキ、内面は受部がハケメ後ナデ、受部と脚部の境はナデ、脚部は細かなハケメ調整。受部径15.3cm、裾部径19.0cm、器高22.9cm。

器台D (75) 器台Cと全体的には似ているが、受部と脚部のくびれが器台Cに較べ下位にある。大きく聞く受部の端部は内側へ屈曲させて袋状にしている。両端部とも丸い。内外面ともハケメ調整、内面の受部と脚部の境はナデ上げている。受部外径18.0cm、裾部径17.2cm、器高24.2cm。受部径が裾部径を凌ぐ。

器台E (93) いわゆる杏形器台と呼ばれるもので、上端を欠く。内面ナデ調整、外面は磨耗のため調整不明。裾部径14.2cm、器高13.9cm。

土製品としては支脚、土弾、紡錘車がある。

支脚は横断面の形態により大きく3種類に分類できる。断面が円形で、内部が中空で器台に似た形態のもの（A・D）、断面が円形のもの（B）、断面が横円形のもの（E）断面が四角形のもの（C・F）である。

支脚A (138・509) は高さは12~13cm、裾部径6.5~8cmで、**支脚B**は高さ8~12cm、裾部径5~7cmで上部が小さくなるが、上面が平面になる支脚Ba (141)、上面が丸くなる支脚Bb (256)に分かれ、さらに中位がくびれ上面に1条の溝がつく支脚Bc (448)、中位がくびれ上下面がへこむ支脚Bd (140)に分かれる。**支脚C**は高さ10cm~13cm前後で断面形がほぼ正方形に近い四角形をなす。縦断面は、長方形になる支脚

C_a (391)、上位が小さく台形になる支脚 C_b (366・367) に分れるが、支脚 C_bの中には上面に 1 条の溝がつくもの (142) もある。

整形は概して、ナデ調整が多いが、中には指頭圧痕が明瞭に残るものもある。

支脚 D は横断面の形態が円形で内部が中空で器台に似た形態のものである。2 個体あるが双方とも破片である。脚部が開く支脚 D_a (77) と、上位が内傾し径 2.8cm の穴があく支脚 D_b (98) に分れる。双方とも内外面ともナデツケで形成している。77 は裾部径 10.4cm、98 は上位屈曲部外径 7.5cm。支脚 E (108) は横断面が精円形で下面は平坦で、上面には短径方向にくぼみがつく。ナデツケとヘラ状の削りで形成されている。高さ 10.0cm、長径 7.3cm、短径 5.8cm。支脚 F (107) は横断面が正方形に近く、上面に 1 条のくぼみがつく。全面ナデにより成形。上面径 4.6cm、現存高 5.9cm。

土彈 (220・221・324・325) 出土数が少ない。すべてナデで整形されている。小さいもので長さ 3.0cm、径 1.9cm 大きいもので長さ 5.0cm、径 2.8cm である。

土製紡錘車 (9・28・30) 出土数が少ない。径 3.6~4.5cm、厚さ 0.8~1.1cm である。

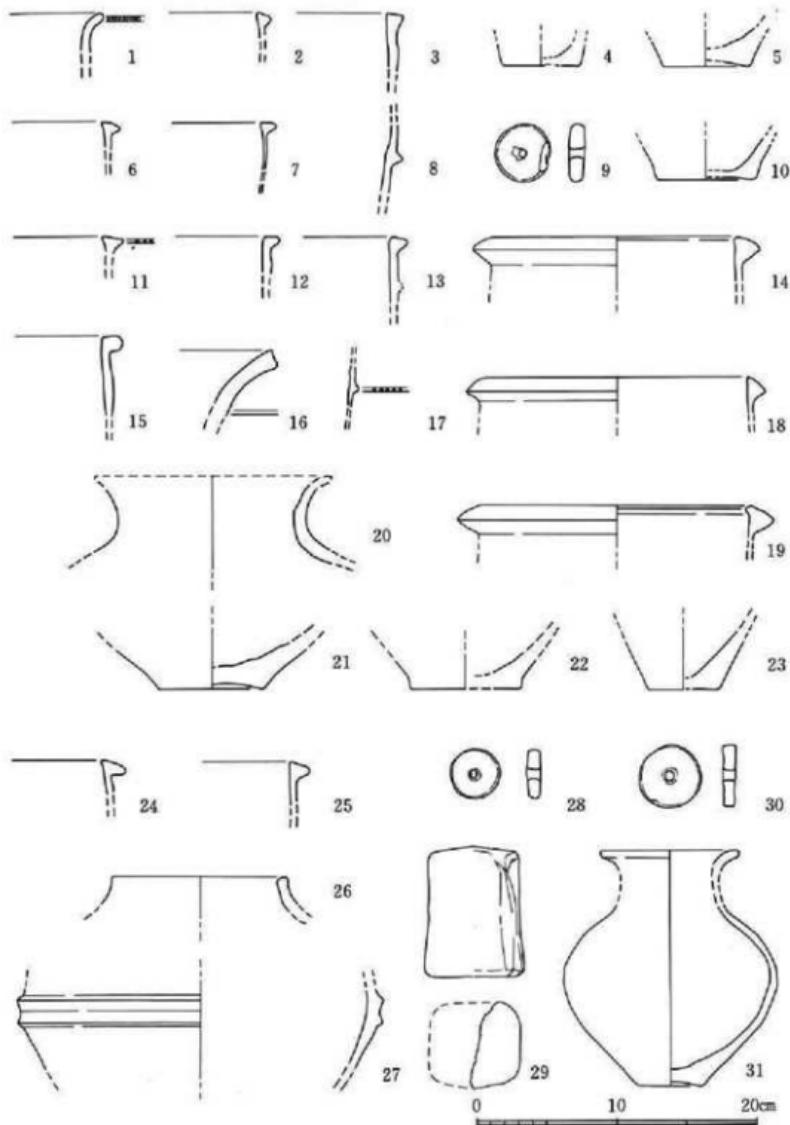


Fig. 57 住居跡出土土器・土製品実測図（1）
 (1-5 SB 031, 6-10 SB 044, 11-23 SB 013, 24-29 SB 038, 30-31 SB 041)

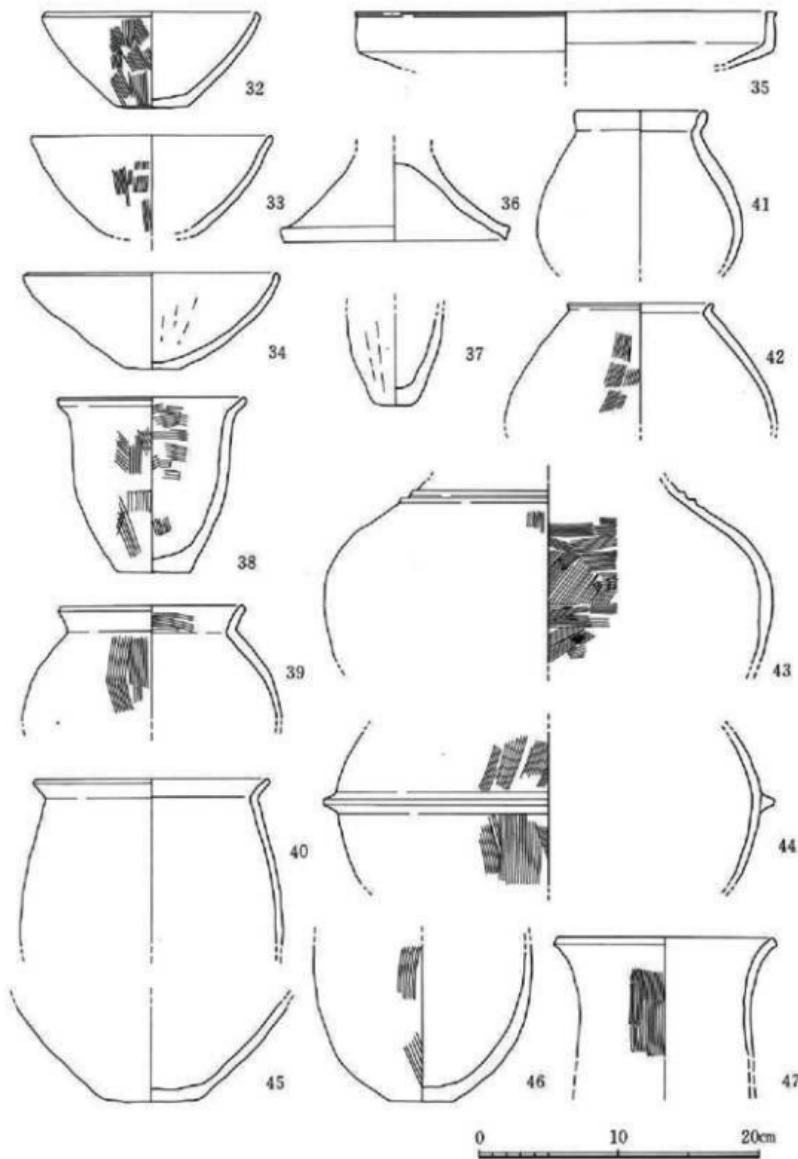


Fig. 58 住居跡出土土器・土製品実測図 (2)
(32~47 SB 034)

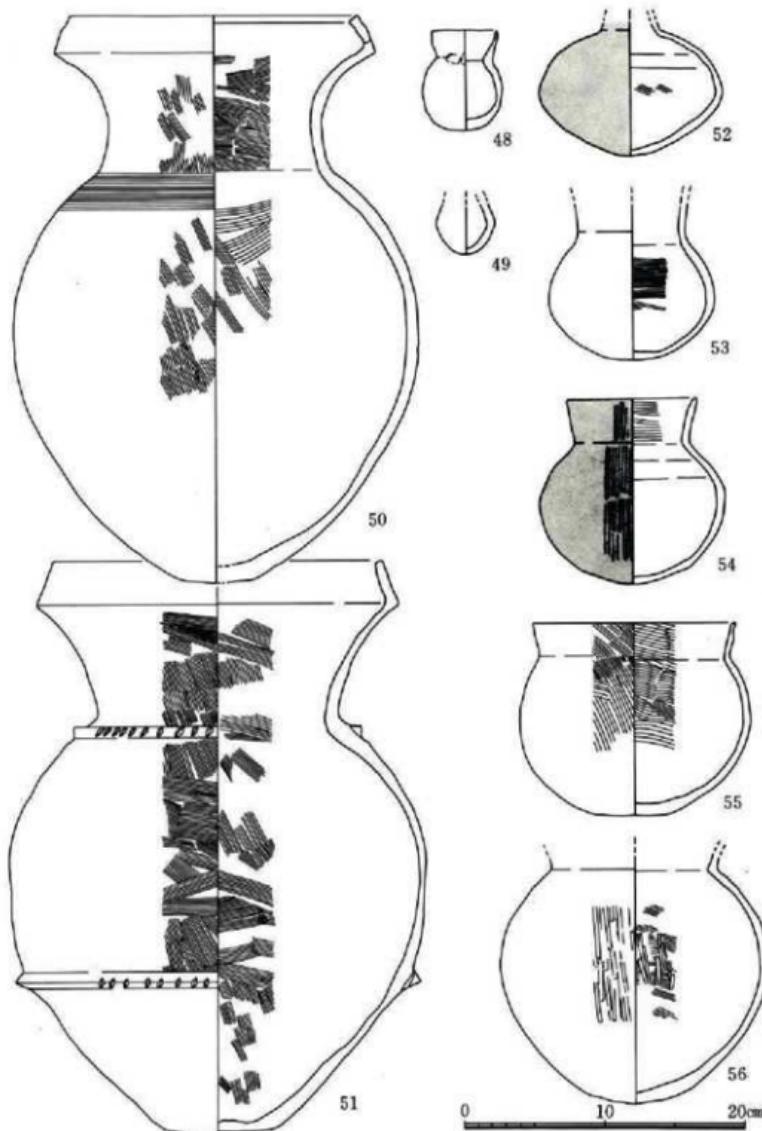


Fig. 59 住居跡出土土器・土製品実測図 (3)
(48~56 SB 039)

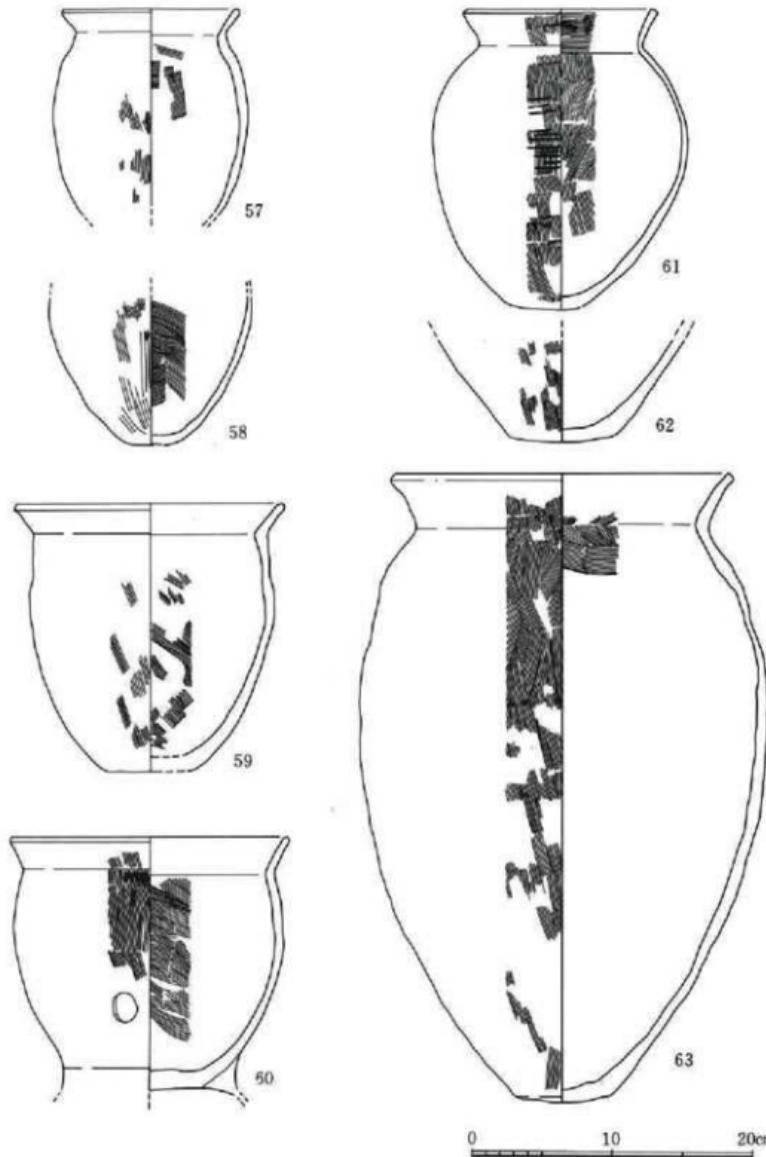


Fig. 60 住居跡出土土器・土製品実測図(4)

(57-63 SB 039)

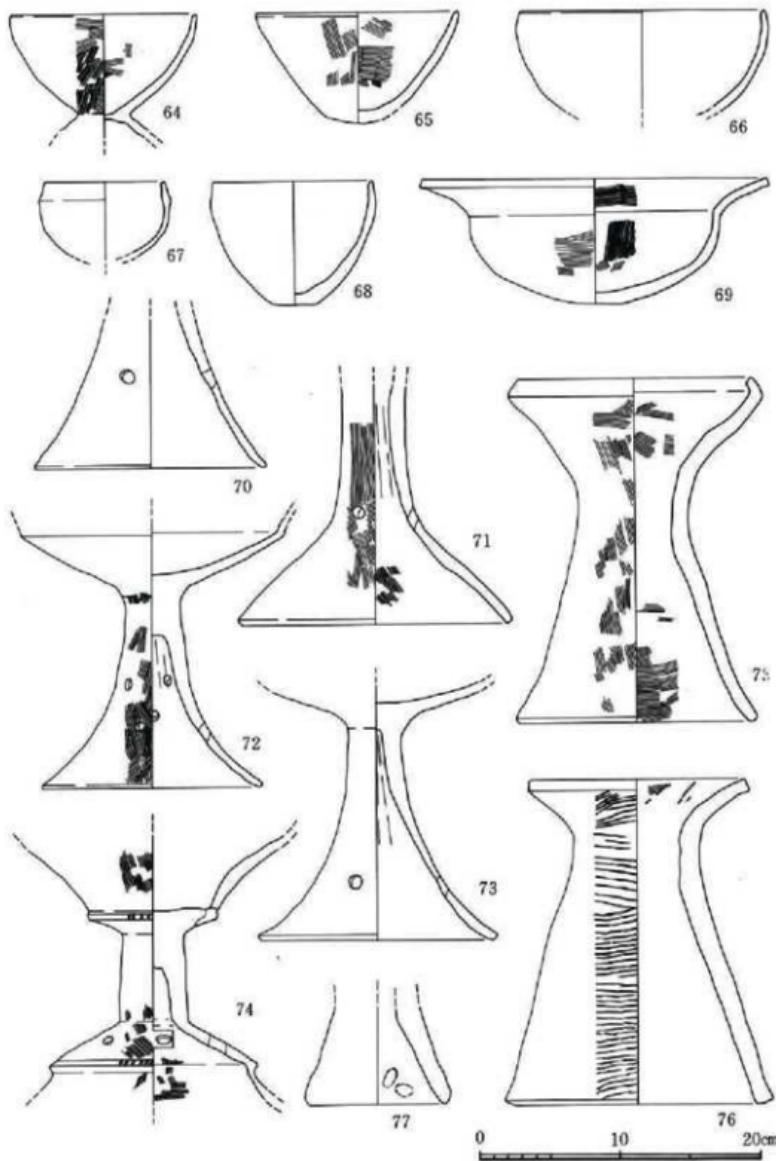


Fig. 61 住居跡出土土器・土製品実測図 (5)
(64~77 SB 039)

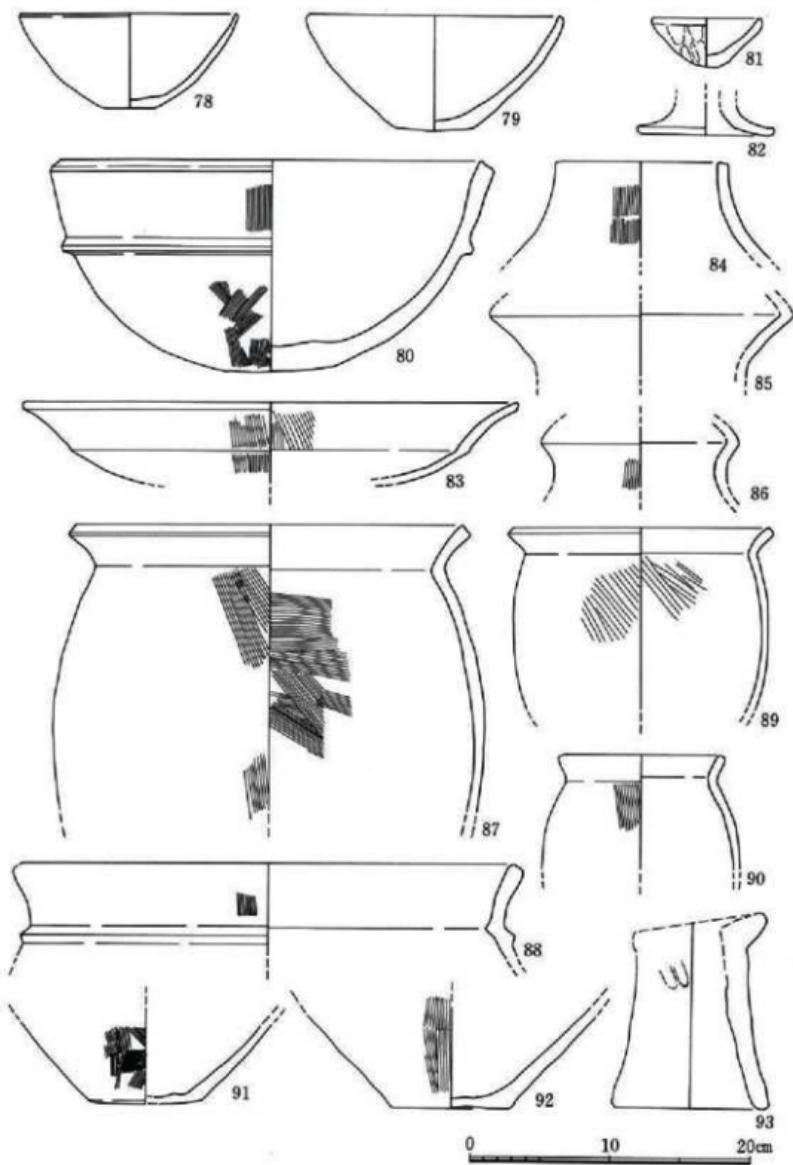


Fig. 62 住居跡出土土器・土製品実測図 (6)
(78-93 SB 047)

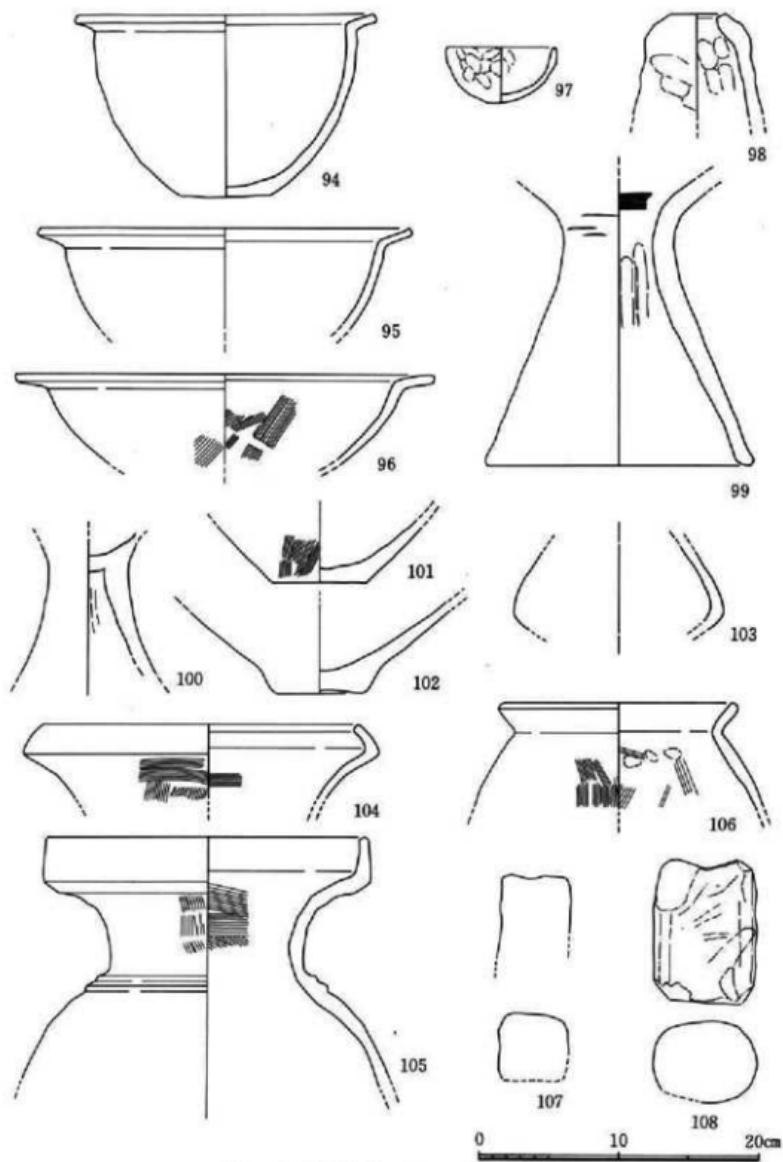


Fig. 63 住居跡出土土器・土製品実測図 (7)
(94~108 SB 049)

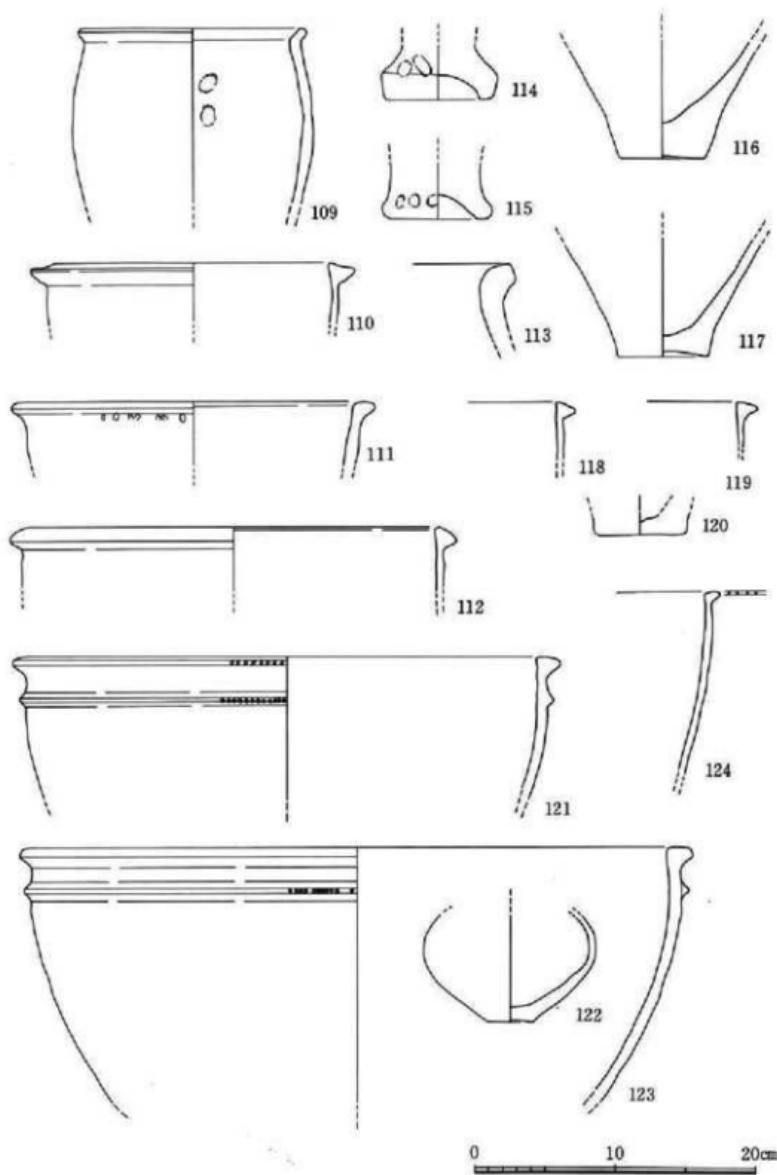


Fig. 64 住居跡出土土器・土製品実測図 (8)
(109-117 SB 048, 118-120 SB 067, 121-123 SB 070, 124 SB 077)

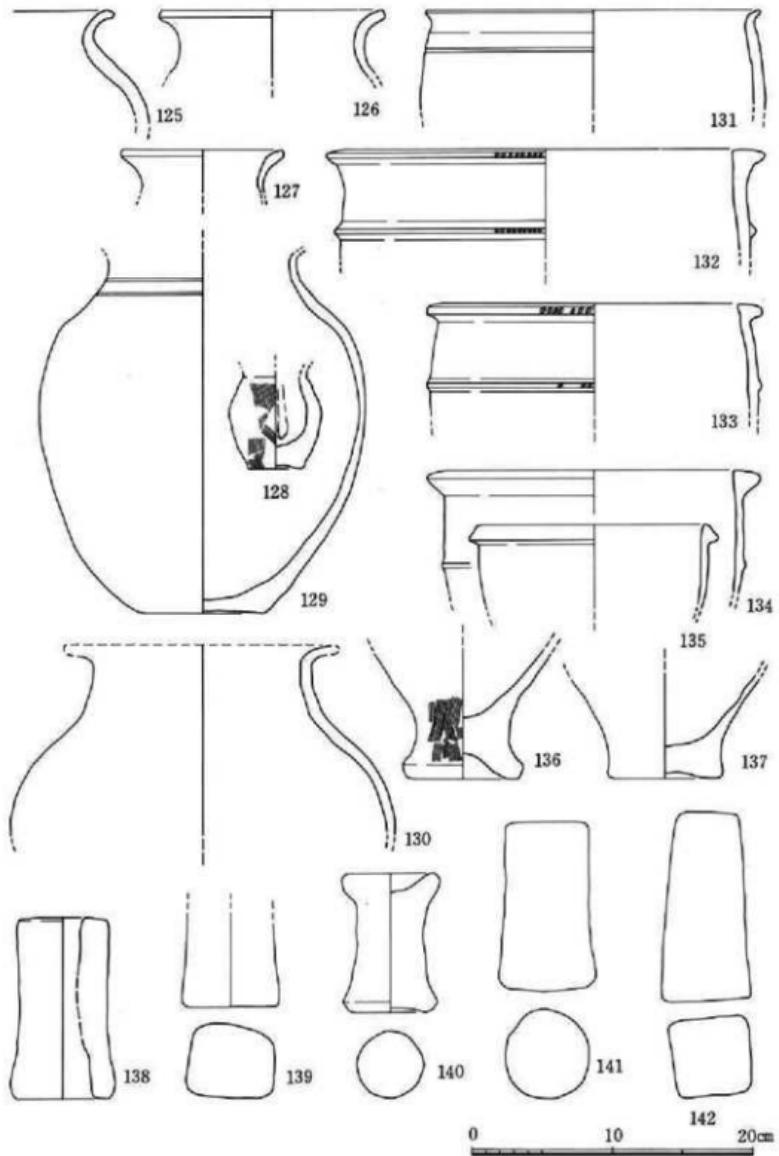


Fig. 65 住居跡出土土器・土製品実測図 (9)
(125~142 SB 069)

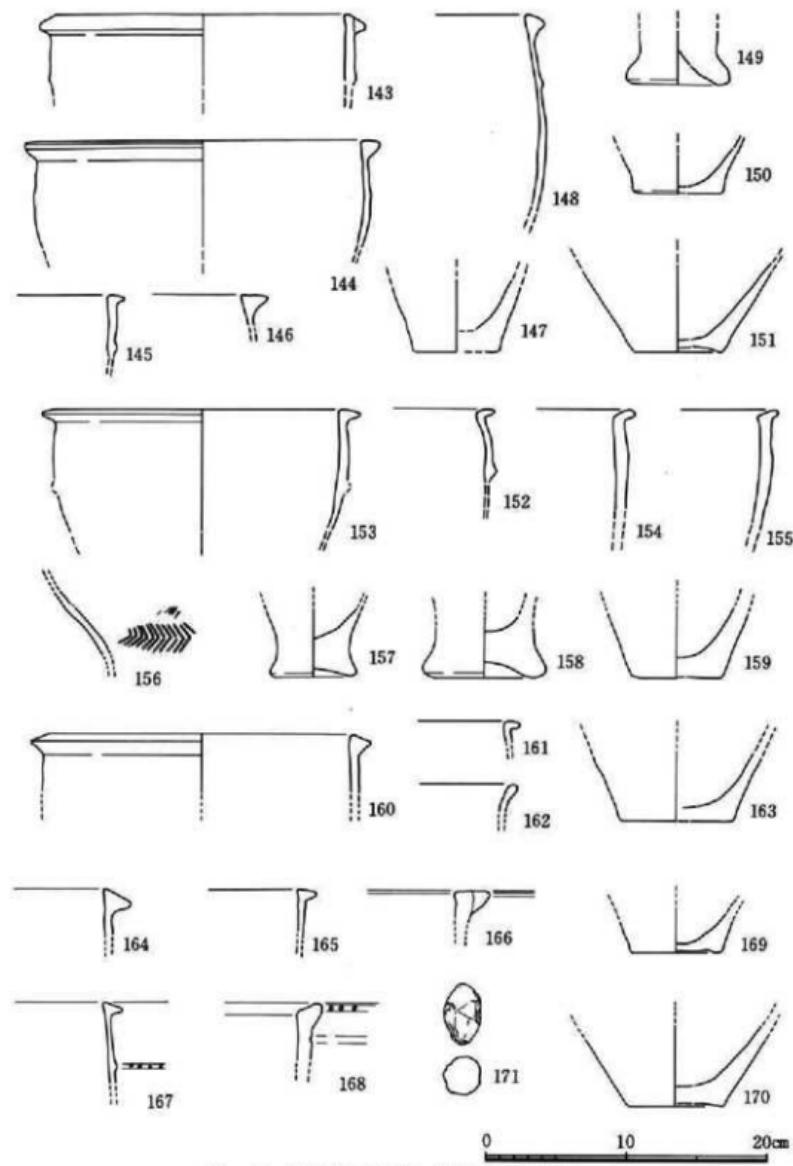


Fig. 66 住居跡出土土器・土製品実測図 (10)
 (143~147 SB 085, 148~152 SB 087, 153~159 SB 088, 160~163 SB 089, 164~171 SB 090)

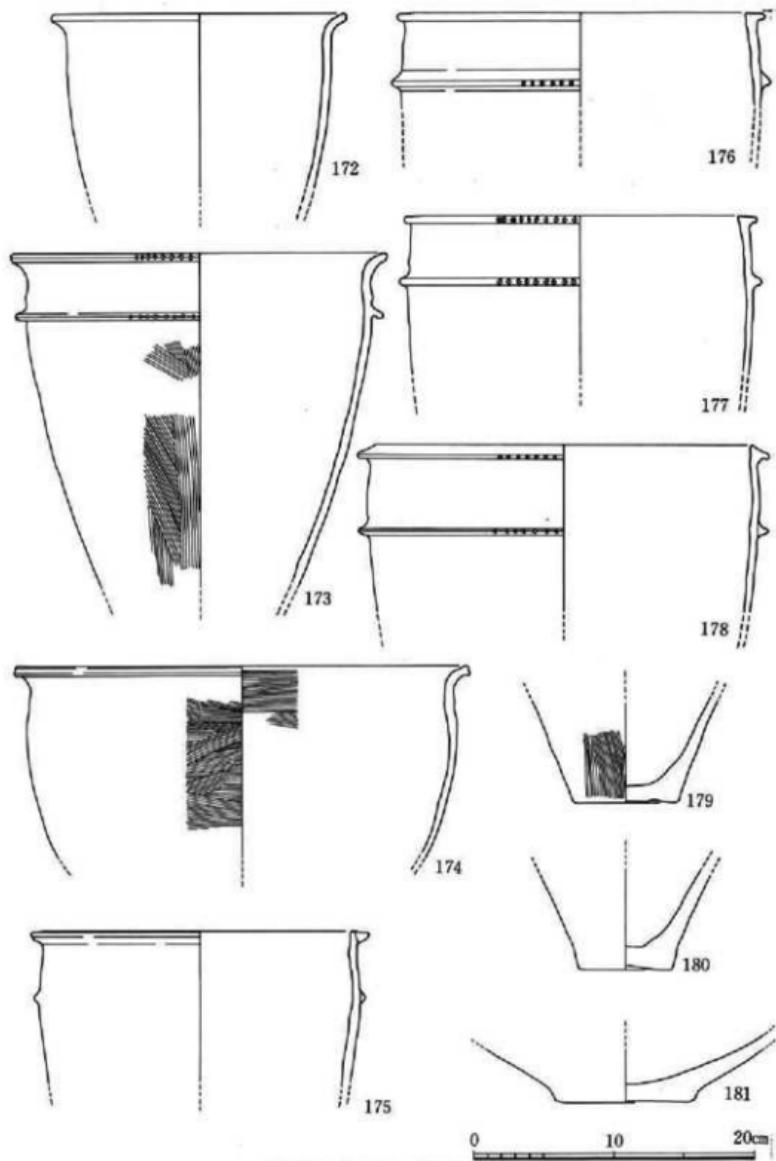


Fig. 67 住居跡出土土器・土製品実測図(11)
(172-181 SB 091)

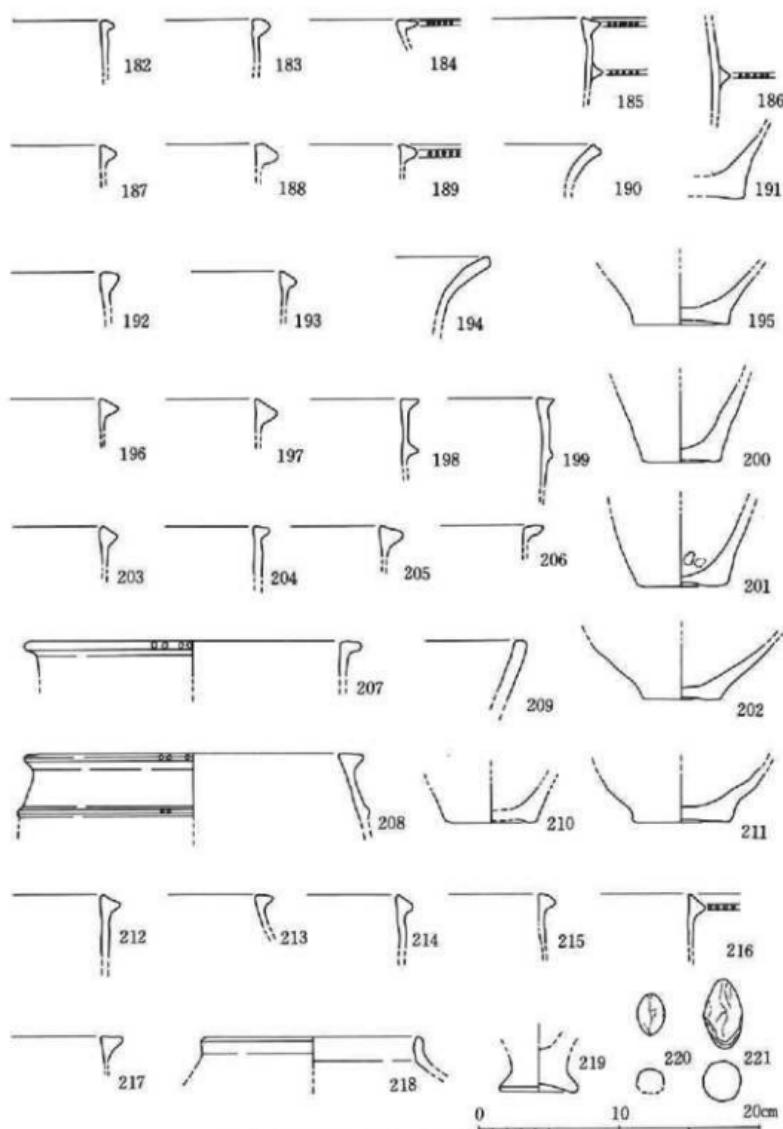


Fig. 68 住居跡出土土器・土製品実測図 (12)
 (182~186 SB 093, 187~191 SB 094, 192~196 SB 099, 196~202 SB 100, 203~211 SB 103, 212~221 SB 104)

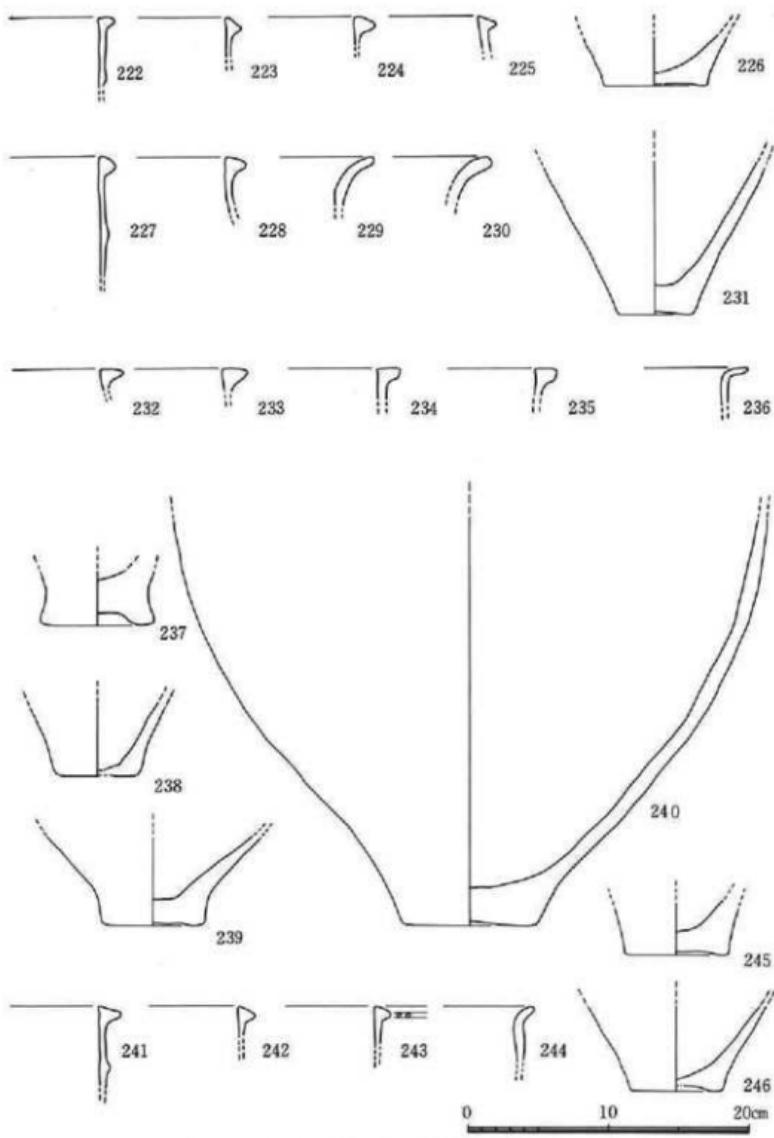


Fig. 69 住居跡出土土器・土製品尖測図 (13)
 (222~226 SB113, 227~231 SB114, 232~240 SB134, 241~246 SB135)

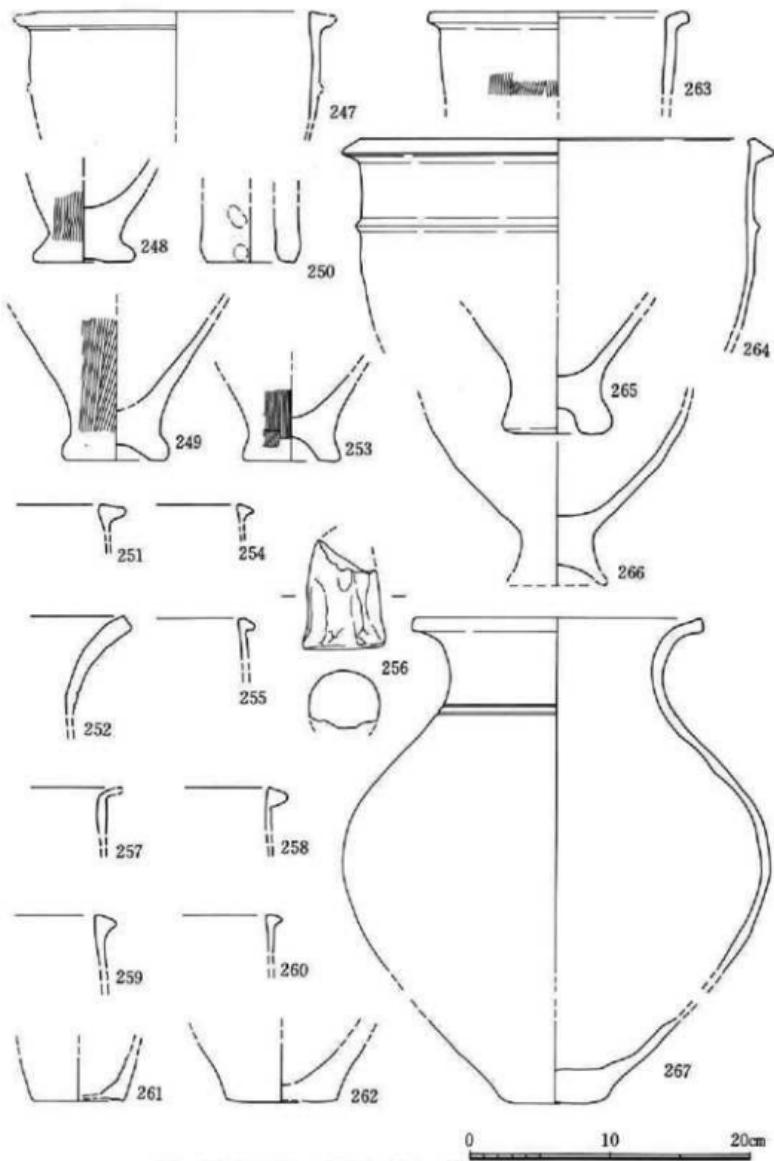


Fig. 70 貯蔵穴・土壤出土土器・土製品実測図(1)
 (247-253 SK 002, 254 SK 006, 255 SK 006, 256 SK 007, 257-262 SK 011, 263-267 SK 012)

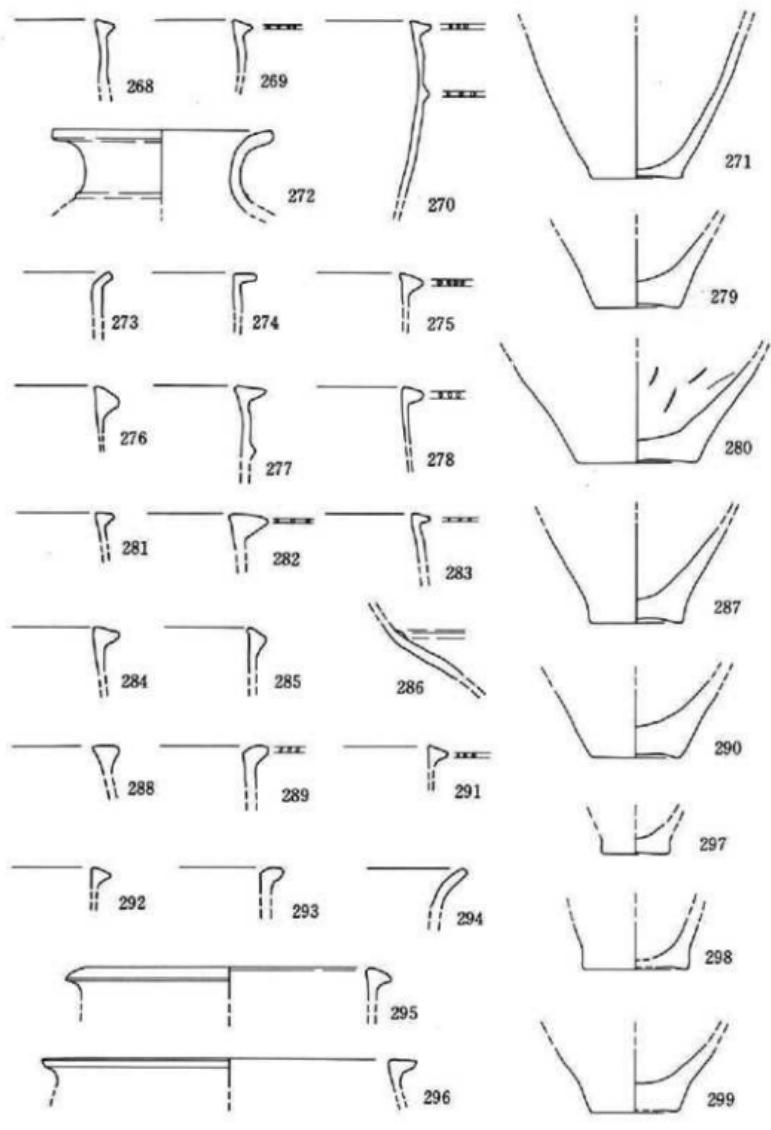


Fig. 71 貯藏穴・土壤出土土器・土製品実測図(2)
 (268~271 SK 014, 272~280 SK 016, 281~287 SK 017, 288~290 SK 018, 291~299 SK 019)

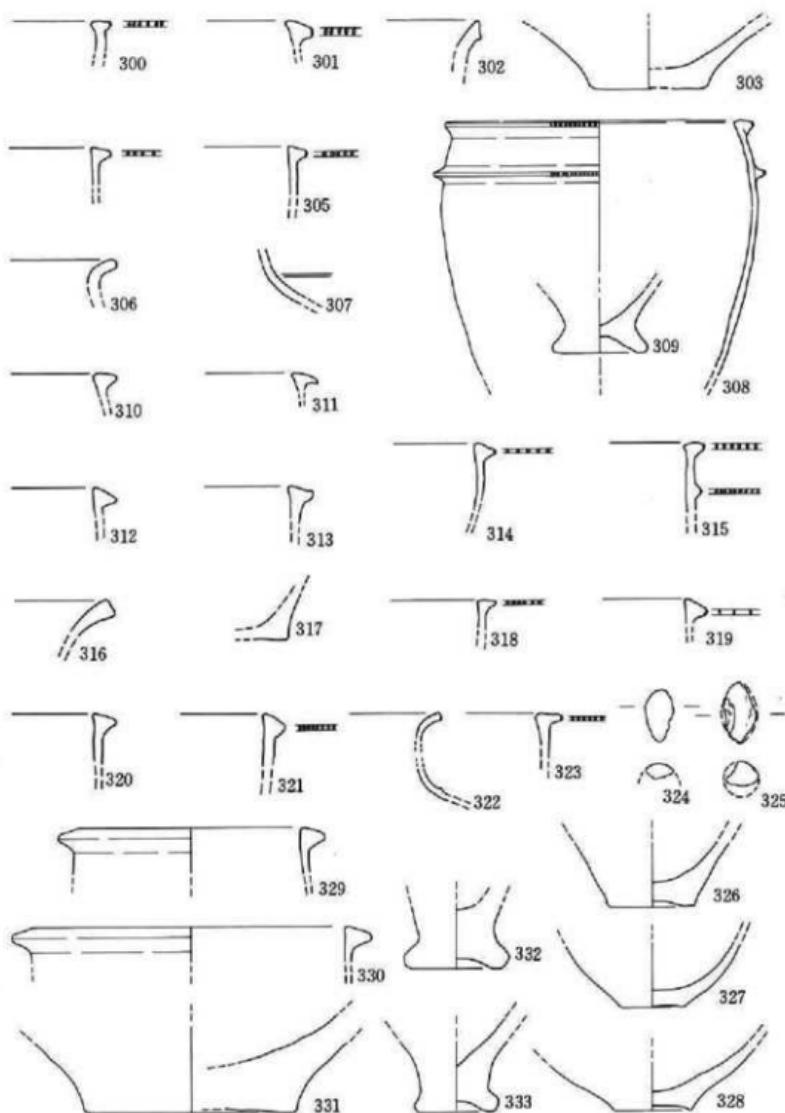


Fig. 72 貯藏穴・土壤出土土器・土製品実測図 (3) 0 10 20cm
 (300~303 SK 020, 304~309 SK 021, 310~311 SK 022, 312~313 SK 023, 314~315 SK 024,
 316~317 SK 025, 318~319 SK 026, 320~321 SK 027, 322~328 SK 028, 329~333 SK 029)

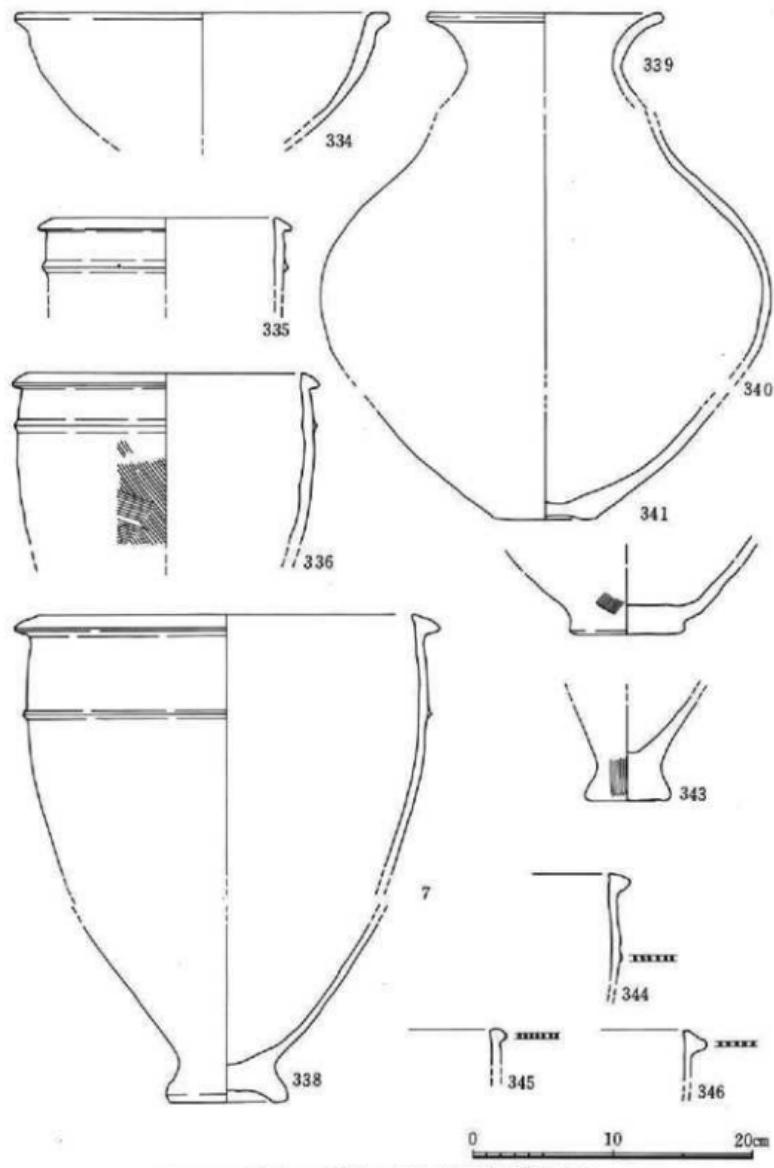


Fig. 73 訳藏穴・土壤出土土器・土製品実測図(4)
(334-343 SK 030, 344 SK 031, 345・346 SK 035)

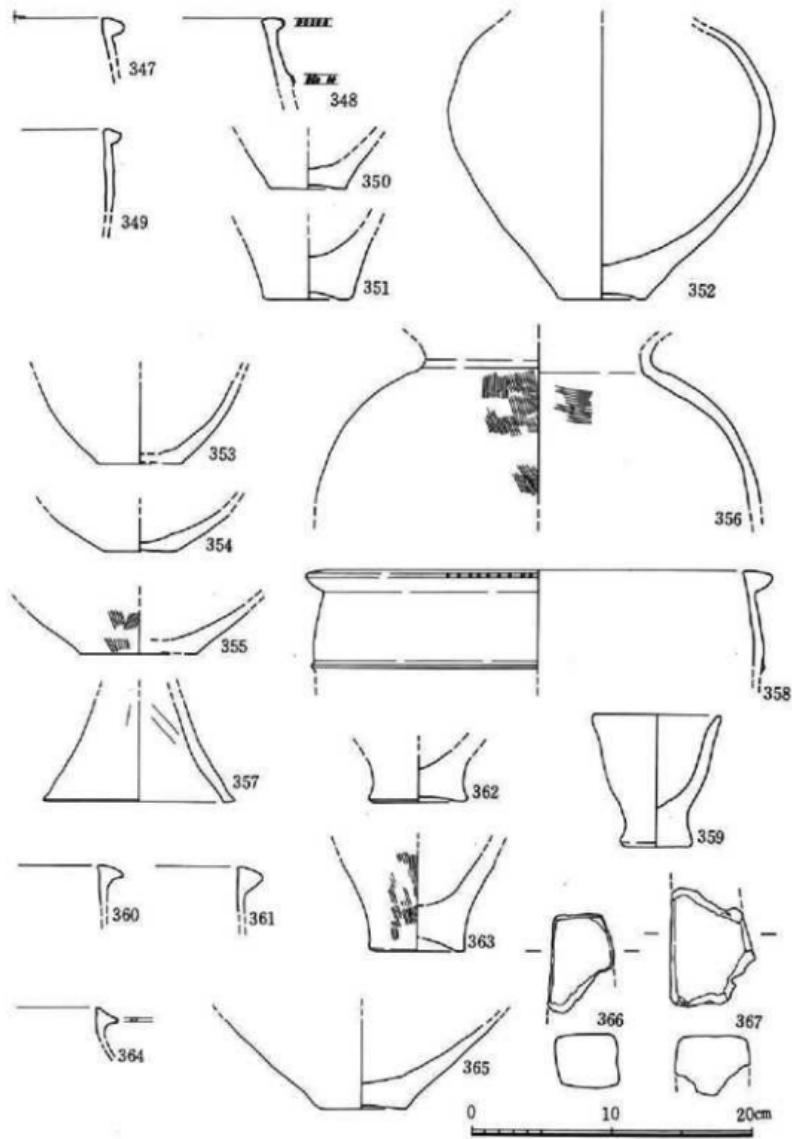


Fig. 74 眼藏穴・土壤出土土器・土製品実測図 (5)
(347-352 SK 036, 353-357 SK 042, 358-363 SK 043, 364-367 SK 044)

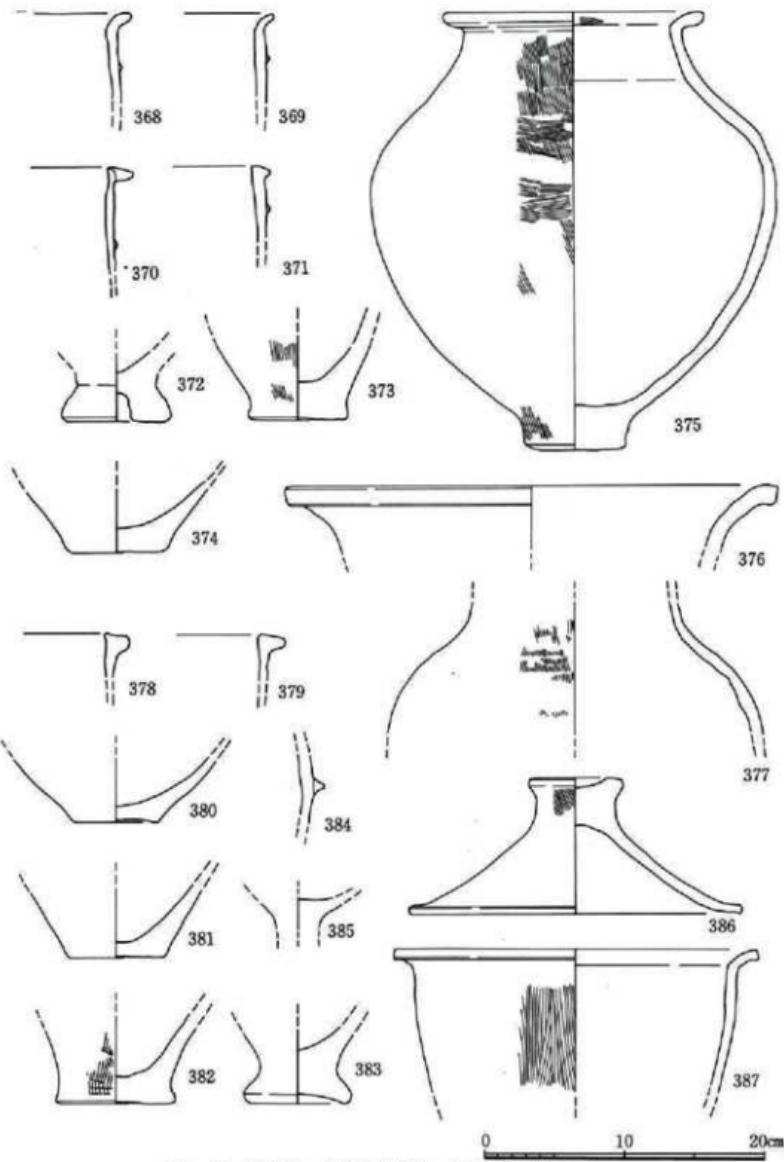


Fig. 75 貯藏穴・土壤出土土器・土製品実測図(6)

(368-375 SK 045, 376-387 SK 050)

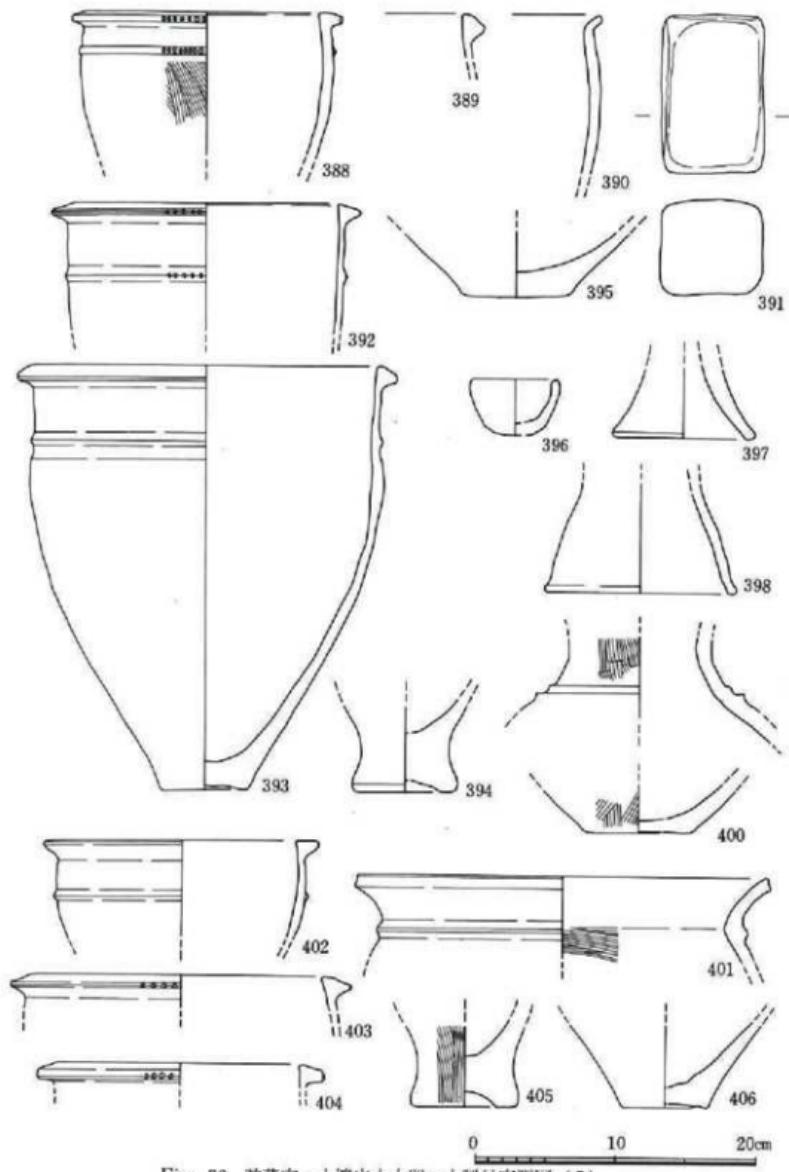


Fig. 76 考古学・土壤出土土器・土製品実測図 (7)
 (388~391 SK 051, 392~394 SK 052, 395 SK 053, 396~401 SK 054, 402 SK 055, 403 SK 056, 404~406 SK 057)

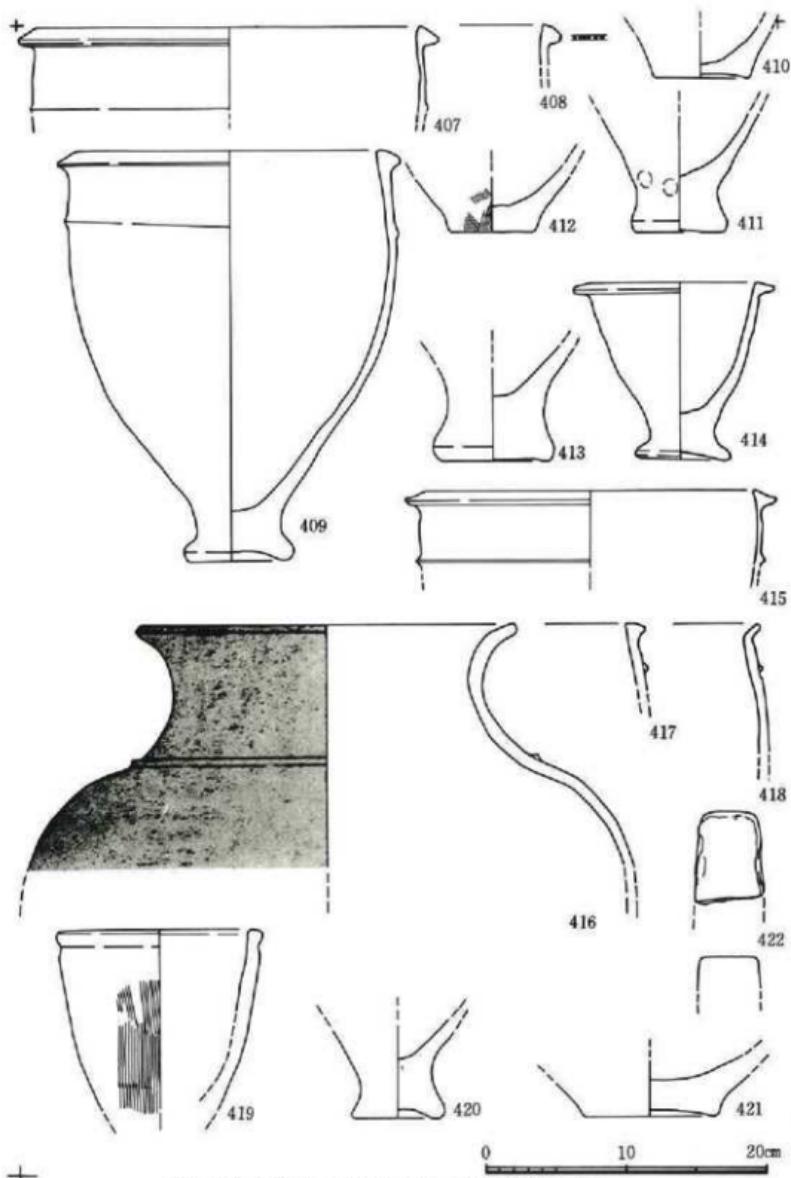


Fig. 77 廪藏穴・土壤出土土器・土製品実測図 (8)

(407~411 SK 058, 412~415 SK 059, 416~422 SK 060)

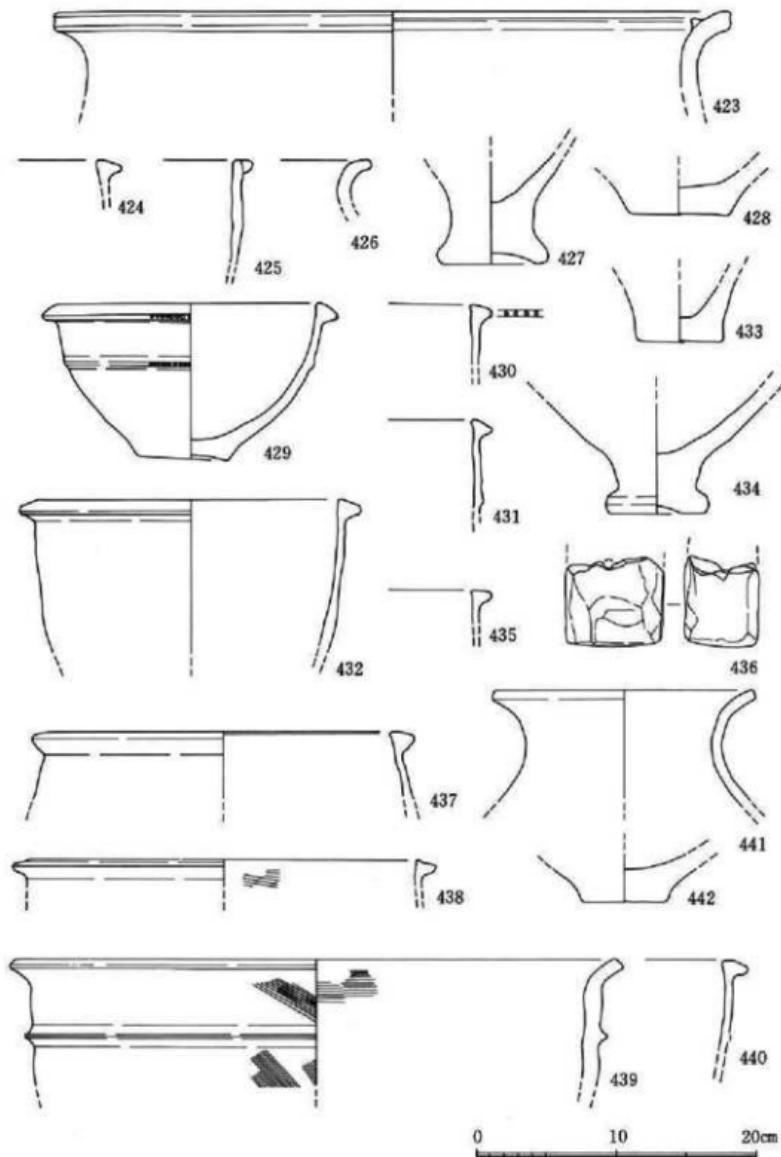


Fig. 78 貯藏穴・土壤出土土器・土製品実測図（9）
 (423~428 SK 061, 429~434 SK 062, 435・436 SK 063, 437~442 SK 064)

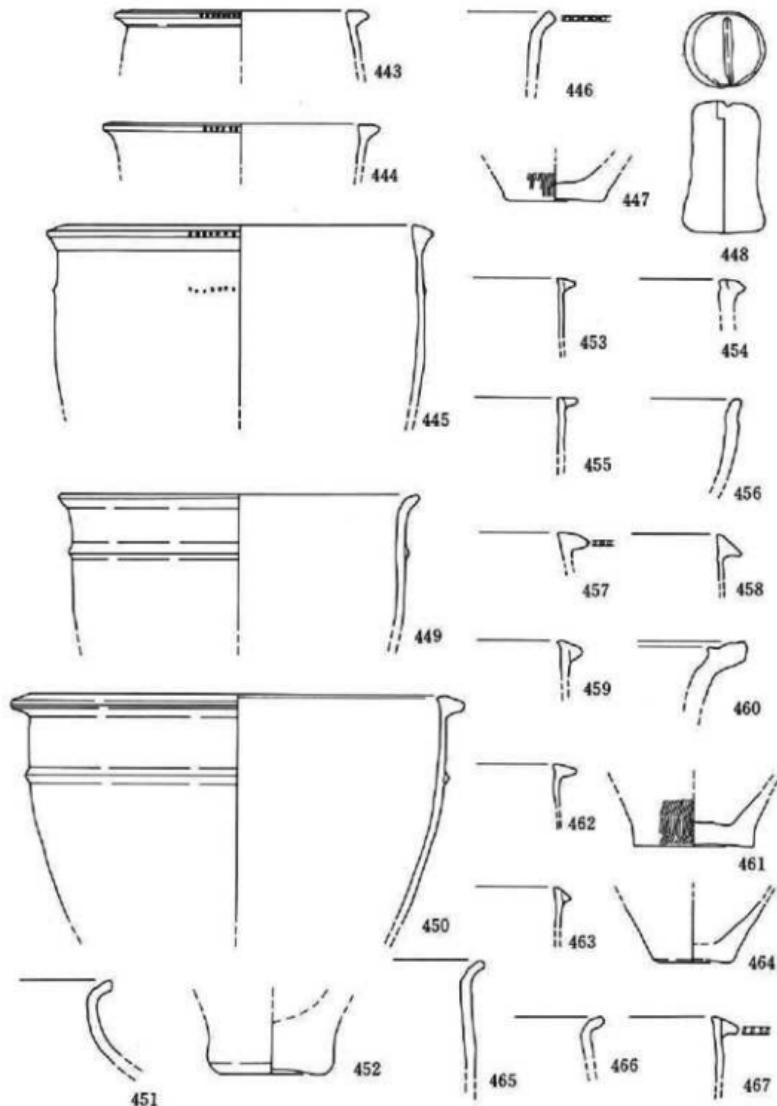


Fig. 79 貯藏穴・土壤出土土器・土製品実測図 (10)

(443~448 SK 068, 449~452 SK 071, 453・454 SK 074, 455・456 SK 075, 457~460 SK 076,)
 (461~464 SK 078, 465~467 SK 079)

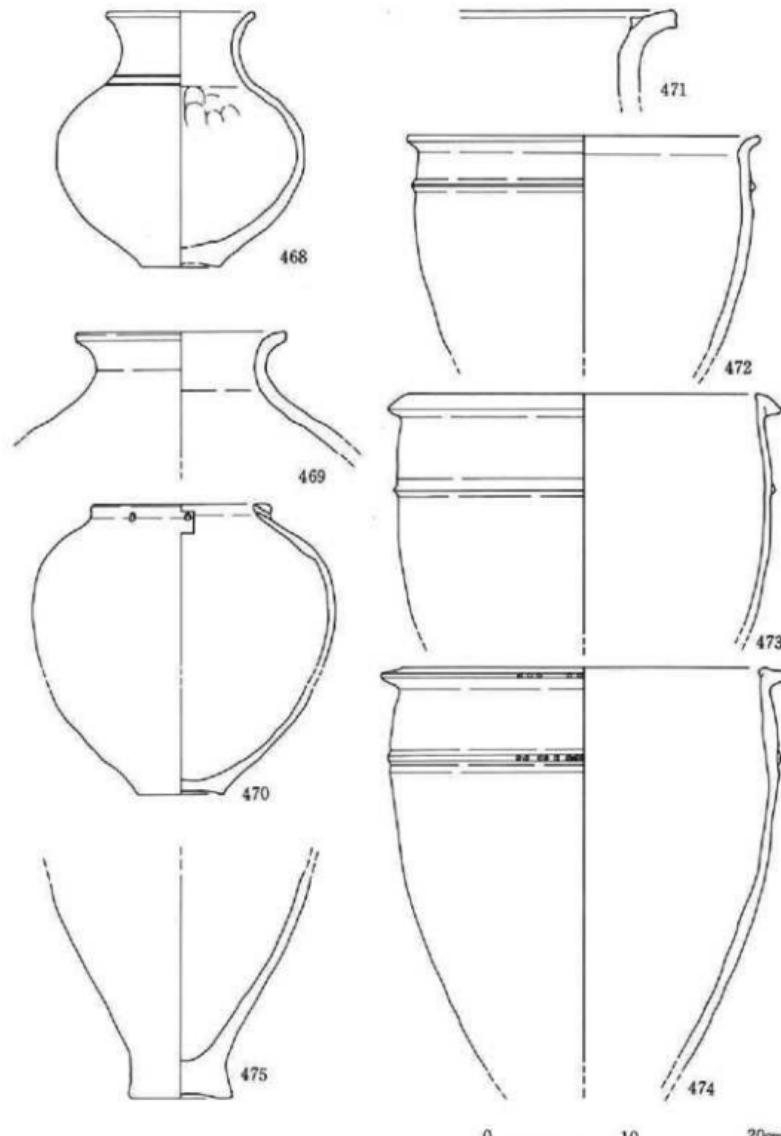


Fig. 80 貯藏穴・土壤出土土器・土製品実測図 (11)
(468-474 SK 072)

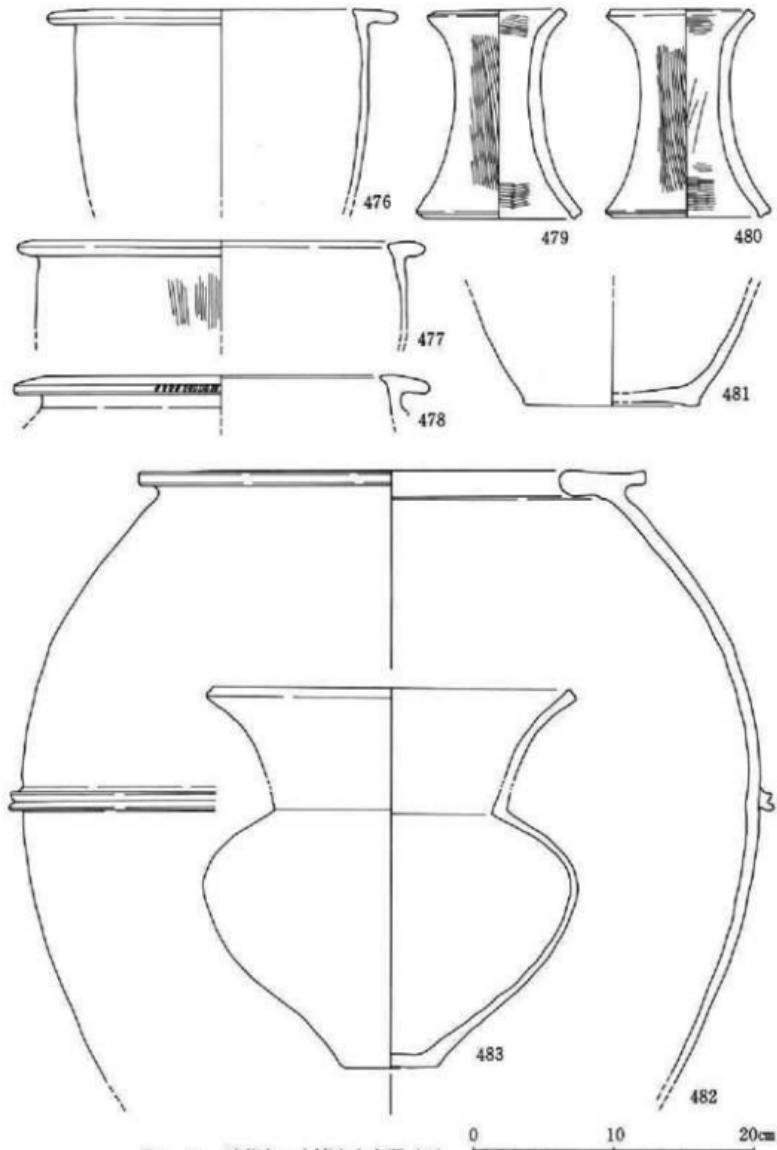


Fig. 81 贯藏穴・土壤出土土器 (12)
(476~483 SK 086)

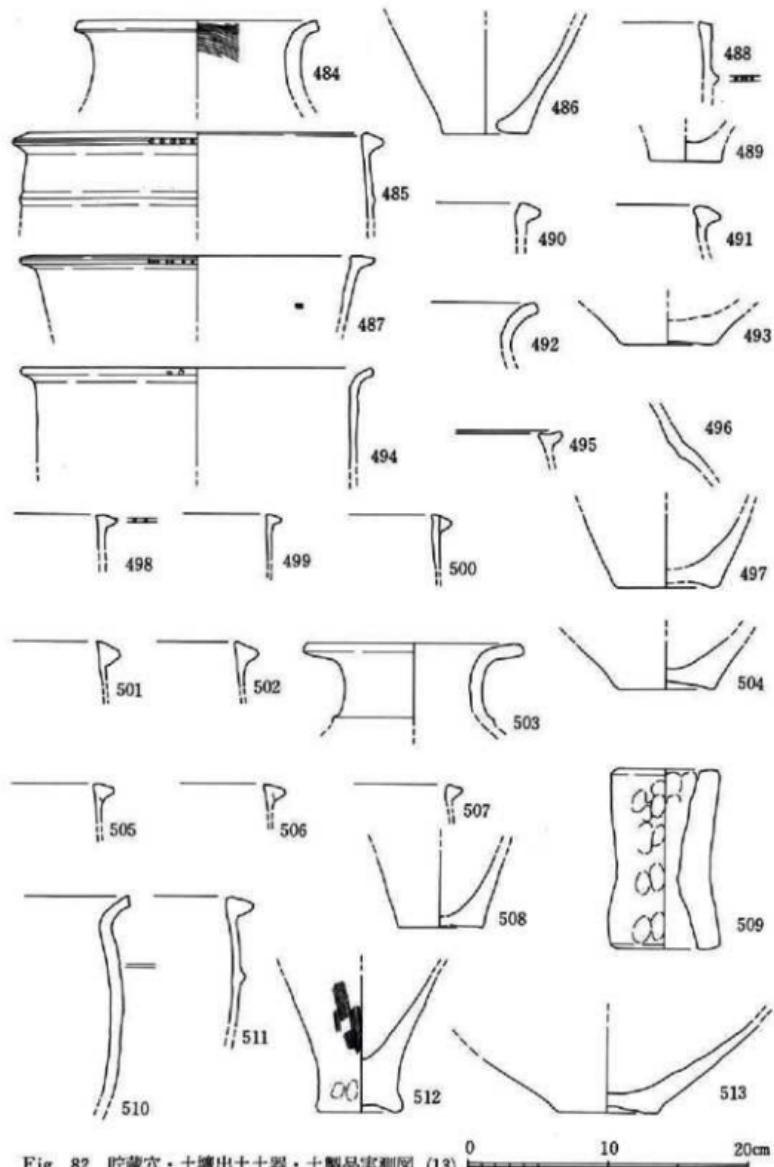


Fig. 82 貯藏穴・土壤出土土器・土製品実測図 (13)
 (484~486 SK 080, 487 SK 081, 488~489 SK 083, 490~493 SK 084, 494~497 SK 092, 498~500 SK 095,
 501~504 SK 096, 505 SK 097, 506 SK 098, 507~508 SK 105, 509 SK 106, 510~513 SK 111)

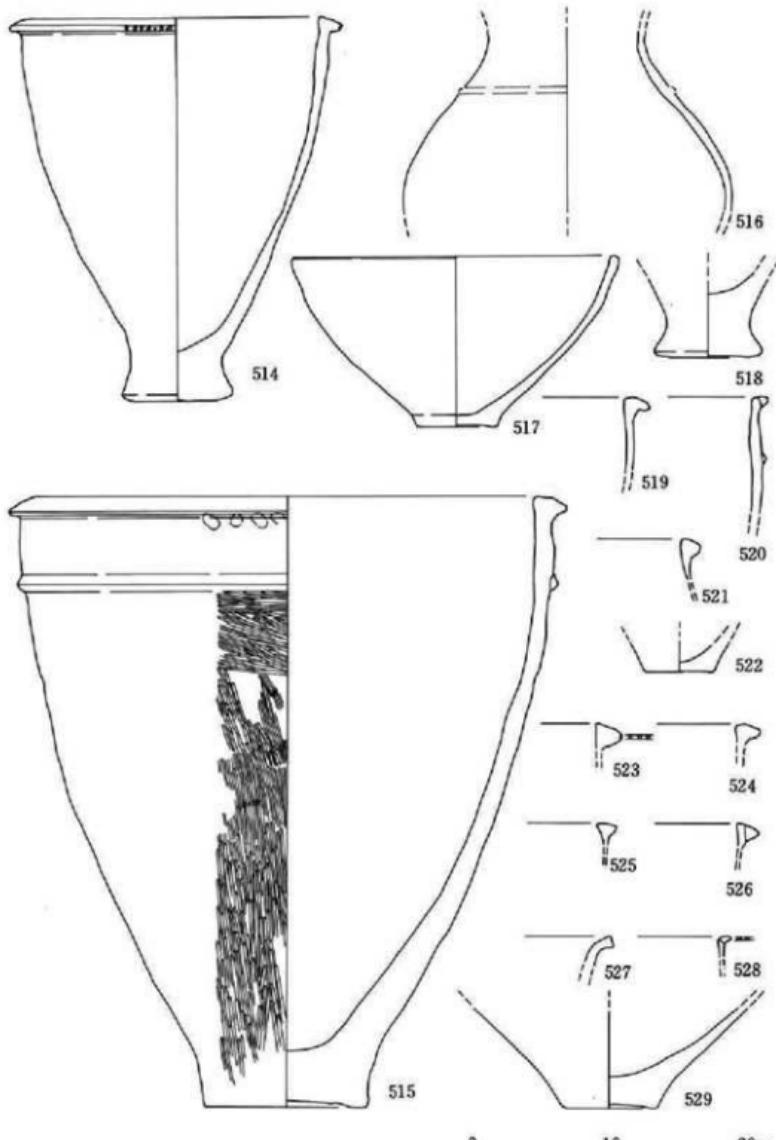


Fig. 83 貯藏穴・土壤出土土器・土製品実測図 (14)

(514-516 SK110, 517 SK112, 518 SK116, 519-520 SK117, 521-522 SK118, 523-524 SK119,
525-526 SK123, 527-529 SK148)

石器・石製品・鉄製品

石器・石製品としては石鎌・石斧・石包丁・石刃・スクレイパー状の石器・砥石・磨石・叩き石・石皿・紡錘車・勾玉などが出土した。鉄製品としては鉄鎌状の鉄片が1つある。

石鎌

石鎌は92点出土した。うち磨製石鎌は3点で他はすべて打製のものであったが、形態は平基式、凹基式、柳葉形のものに分れる。

磨製石鎌はすべて平基式で、全長が短かい小形のもの(530)と幅の割に全長が長いもの(531)、これと同形と考えられる大形のもの(532)に分れる。石材はすべて凝灰岩質のものである。

打製石鎌は平基式、凹基式、柳葉形のものに分類されるが、個体数は凹基式のものが最も多く、次いで柳葉形のものが多く、平基式のものは極端に少ない。平基式のものは二等辺三角形をなすが、2辺が湾曲するもの(533)と直線的なもの(534)がある。双方ともサスカイト製だが、他に黒曜石製のものも存在する。凹基式のもの(535~551)は形態が多様である。基部の抉りが大きいもの(538・539・543)はわずかしか出土しておらず、側辺から脚部にかけて湾曲する。538は黒曜石、539・543はサスカイト製である。基部の抉りが小さいものは正三角形に近い形態のものと(540~544)と二等辺三角形に近いもの(535~537・545~551)に大別されるが、それぞれ、側縁が直線的なものと湾曲するものに分れる。石材はすべての形態で、黒曜石・サスカイト両者が用いられている。柳葉形のもの(552~565)にも形態が種々ある。側縁が緩やかに湾曲するもの(552~554、561~565)、側縁が湾曲するが最大幅部が基部に寄っているもの(557~560)、側縁が角張り菱形に近くなるもの(555・556)などに分れる。石材はサスカイトが圧倒的に多く、556・563など数点だけが黒曜石製である。

出土した89点の打製石鎌に用いられた石材は黒曜石24点、サスカイト65点で、その割合は約1:3となっている。

Tab. 3 石鎌一覧表

()は残存法量

| 番号 | 出土遺物 | 重さ (kg・g) | | | 石質 （主成分） | 備考 |
|----|------|-----------|-----|-----|-------------|-------------|
| | | 丸石 | 楕円 | 角石 | | |
| 5B | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.2 | 1.05 | ハレート 平基式 柳葉 |
| 5E | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.2 | 1.05 | * |
| 5F | S BM | 0.7 | 1.0 | 0.3 | (0.6) | * |
| 5G | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.3 | 1.05 | * |
| 5H | S BM | 1.0 | 2.0 | 0.6 | 2.00 | * |
| 5I | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 1.05 | * |
| 5J | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 1.05 | 凹基式 |
| 5K | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.3 | 0.5 | * |
| 5L | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 1.05 | * |
| 5M | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 1.05 | * |
| 5N | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 1.05 | * |
| 5O | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 0.5 | * |
| 5P | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 0.5 | * |
| 5Q | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 0.5 | * |
| 5R | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 0.5 | * |
| 5S | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 0.5 | * |
| 5T | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 0.5 | * |
| 5U | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 0.5 | * |
| 5V | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 0.5 | * |
| 5W | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 0.5 | * |
| 5X | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 0.5 | * |
| 5Y | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 0.5 | * |
| 5Z | S BM | 1.0 | 1.0 | 0.4 | 0.5 | * |

| 番号 | 出土場所 | 寸法(cm・g) | | | | 石質 （セメント等） | 測定者 |
|-----|-------|----------|-------|-----|--------|---------------|-----|
| | | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | | |
| 92 | S 806 | 2.5 | (2.5) | 1.0 | 0.60 | ■ a. | 四面六 |
| 93 | S 810 | 2.0 | 1.1 | 0.4 | 0.55 | ■ a. | + |
| 94 | S 809 | (3.0) | 1.1 | 1.0 | (1.00) | ■ a. | + |
| 95 | S 812 | 1.9 | (1.0) | 0.9 | 0.55 | ○ b. | + |
| 96 | S 810 | 2.0 | 1.1 | 0.6 | 0.65 | ■ a. | + |
| 97 | 表盤 | 2.0 | 1.0 | 0.4 | 1.30 | ○ b. | + |
| 98 | S 806 | 2.1 | 1.0 | 0.4 | 0.65 | ■ a. | + |
| 99 | S 812 | 2.0 | 1.0 | 0.4 | 1.25 | ■ a. | + |
| 100 | S 809 | (2.0) | (2.0) | 0.4 | 0.30 | ■ a. | + |
| 101 | S 810 | (2.0) | 2.1 | 1.0 | (2.0) | ■ a. | + |
| 102 | S 806 | 2.0 | 1.0 | 0.5 | 1.30 | ■ a. | 脚錠形 |
| 103 | S 806 | 1.9 | 1.0 | 0.4 | 1.30 | ■ a. | + |
| 104 | S 812 | 1.9 | 1.0 | 0.4 | 1.45 | ■ a. | + |
| 105 | S 806 | 1.9 | 1.0 | 0.5 | 1.00 | ■ a. | + |
| 106 | S 807 | (1.0) | 1.0 | 0.6 | (0.90) | ○ b. | + |
| 107 | S 806 | 1.8 | 1.0 | 0.6 | 1.00 | ■ a. | + |
| 108 | S 806 | 2.2 | 1.1 | 0.5 | 1.30 | ■ a. | + |
| 109 | S 812 | (2.0) | 1.0 | 0.5 | (0.90) | ■ a. | + |
| 110 | S 810 | 1.9 | 1.2 | 0.4 | 1.00 | ■ a. | + |
| 111 | S 812 | (2.0) | 1.4 | 0.4 | (1.00) | ■ a. | + |
| 112 | S 810 | (2.0) | 1.0 | 0.5 | (1.00) | ■ a. | + |
| 113 | S 805 | 2.1 | 1.25 | 0.5 | 2.65 | ○ b. | + |
| 114 | S 810 | 2.0 | 1.0 | 0.5 | 1.00 | ■ a. | + |
| 115 | S 810 | 4.3 | 1.0 | 0.5 | 1.00 | ■ a. | + |

石祥

石斧には打製石斧と磨製石斧がある。

打製石斧は3点出土した。形態は長方形に近い長楕円形の石鎌状の扁平石斧である。石材は緑泥片岩でもろくなっている。

磨製石斧には小形の石ノミ状の柱状片刃石斧（566）、扁平片刃石斧（567・568・569・571）、柱状片刃石斧（抉りが入ると思われるもの、570・572・573）、刃部が丸いもの（577）、太形蛤刃石斧（578～583）などがある。これらのうち扁平片刃石斧は幅広のもの（568）と縦長のものに分類されるが、後者には大、中、小と法量的に分けられ、用途による使い分けが窺える。石材は片刃石斧類は主に石英安山岩質のもので、577は蛇紋岩、太形蛤刃石斧は玄武岩である。

石包丁 (584~590)

石包丁は出土数が少なく、また完形品もない。破片から復元するとすべて外湾刃半月形の石包丁である可能性が高い。石材は凝灰岩質。全体を復元できそうな2点の法量は587が復元長16cm弱、幅6.1cm、厚さ0.4cm、590が復元長10.4cm、幅4.6cm、厚さ0.7cmである。

剥片・削器 (595~602)

石讃以外の打製石器として黒曜石やサスカイトを用いた削器状の石器や剝片がある。595～597は黒曜石製の剝片で、595・596は横長剝片で、595は長さ3.0cm、幅3.4cm、厚さ0.85cm、596は長さ2.4cm、幅3.85cm、厚さ0.7cm、597は縦長剝片で、長さ3.3cm、幅2.5cm、厚さ0.8cmである。3点とも自然面を打面としており、打角はそれぞれ138°、103°、140°である。

598～602は削器状の石器で、すべてサヌカイト製である。598・599は縦長剥片を用いており、598は片縁は両面、他は片面から深形のウロコ状調整を施す。現存長6.6cm、幅2.8cm、厚さ1.15cm。599は上半部の片面にウロコ状の極浅形調整を施す。長さ5.9cm、幅2.75cm、厚さ0.7cm。600～602は横長剥片を用いた横形削器状の石器で、いずれも両面調整を施す。600は長さ5.6cm、現存幅5.5cm、厚さ1.3cm。601は長さ5.1cm、幅5.25cm、厚さ2.0cm。602は長さ5.1cm、幅6.7cm、厚さ0.75cm。

紡錘車（591～594）

石製紡錘車は4点出土した。591は復元径4.3cm、厚さ0.4cm。592は復元径5.6cm、厚さ0.5cm。593は径5.7cm、厚さ0.65cm、孔径0.6cm。594は径5.85cm、厚さ0.5cm、孔径0.8cm。

砥石（603～614）

すべて砂岩を用いており、形態も様々である。砂岩の質の粗密により荒砥・中砥に分けられる。

Tab. 4 砥石一覧表

() は残存法量

| 番 号 | 出土場所 | 法 量 (cm) | | | 備 考 |
|-----|--------|----------|-----|-----|---------|
| | | 長さ | 幅 | 厚さ | |
| 603 | S B 80 | 3.0 | 1.8 | 1.4 | 中砥、4面使用 |
| 604 | S E 80 | 2.8 | 1.4 | 1.0 | + |
| 605 | S B 80 | 2.8 | 5.5 | 4.5 | 完成、+ |
| 606 | S B 80 | 2.0 | 3.2 | 2.1 | 中砥、2面使用 |
| 607 | S B 80 | 3.2 | 3.1 | 1.6 | + |
| 608 | S B 80 | 2.5 | 3.8 | 2.1 | 荒砥、+ |
| 609 | S B 80 | 3.2 | 3.7 | 2.4 | + |
| 610 | S E 80 | 3.0 | 1.7 | 1.1 | + |
| 611 | S E 80 | 2.1 | 5.0 | 4.5 | + |
| 612 | S B 80 | 4.0 | 3.1 | 3.2 | + |
| 613 | S B 80 | 3.6 | 3.8 | 1.2 | + |
| 614 | S B 80 | 3.6 | 3.5 | 1.3 | + |

石皿（615・616）

石皿状の破片が2点出土した。どちらも砂岩製で、615が現存長8.9cm、現存幅9.4cm、最大厚3.1cm、616が現存長6.5cm、現存幅8.4cm、最大厚2.7cm。

叩き石（617）

叩き石は1点出土した。砂岩製で、現存長10.1cm、最大幅3.85cm、最大厚3.1cm。先端には使用痕が残る。

磨石（618～621）

619は橢円形になると考えられるが、他は正円形に近い。618は径9.8cm、厚さ6.1cm、619は厚さ4.85cm、620は径9.2cm、厚さ5.4cm、621は径12.2cm、厚さ5.5cmである。618・619は玄武岩質、620は砂岩、621は花崗岩である。

勾玉（622・623）

622はS B 069出土で、頭は角ぼり尻は尖り気味である。頭の平坦面に土字状の刻線をつけ、片側の側面から背部にかけても刻線がつくが、文様をなしているとは考え難い。長さ3.1cm、

最大幅1.0cm、最大厚0.8cm。暗い灰緑色で、表面は比較的光沢がある。

623はSB 093出土で、本来完形品であったが調査時に二折したものである。頭は丸味をもつて、尻は角ばるものと考えられる。頭の前に大きな刻みをつけ、J字頭状になっている。長さ4.5cm、最大幅2.1cm、最大厚1.2cm。明るい灰緑色でうぐいす色に近く、表面の光沢は弱い。欠損部では板状に剥離している。

鉄器片 (624)

SB 047出土の唯一の鉄器である。鍛がひどく復元が困難であるが、基部が厚くなり、折れ曲っているものと考えられる。おそらく鐵鎌の破片であろう。現存長3.7cm、幅3.6cm、厚さ0.3cm。

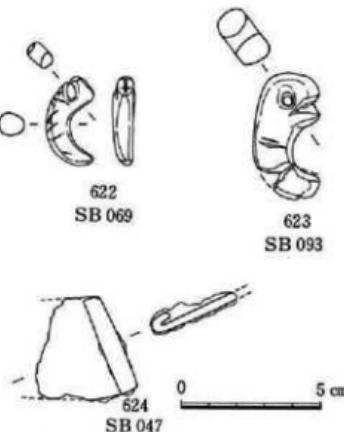


Fig. 84 勾玉・鉄器実測図

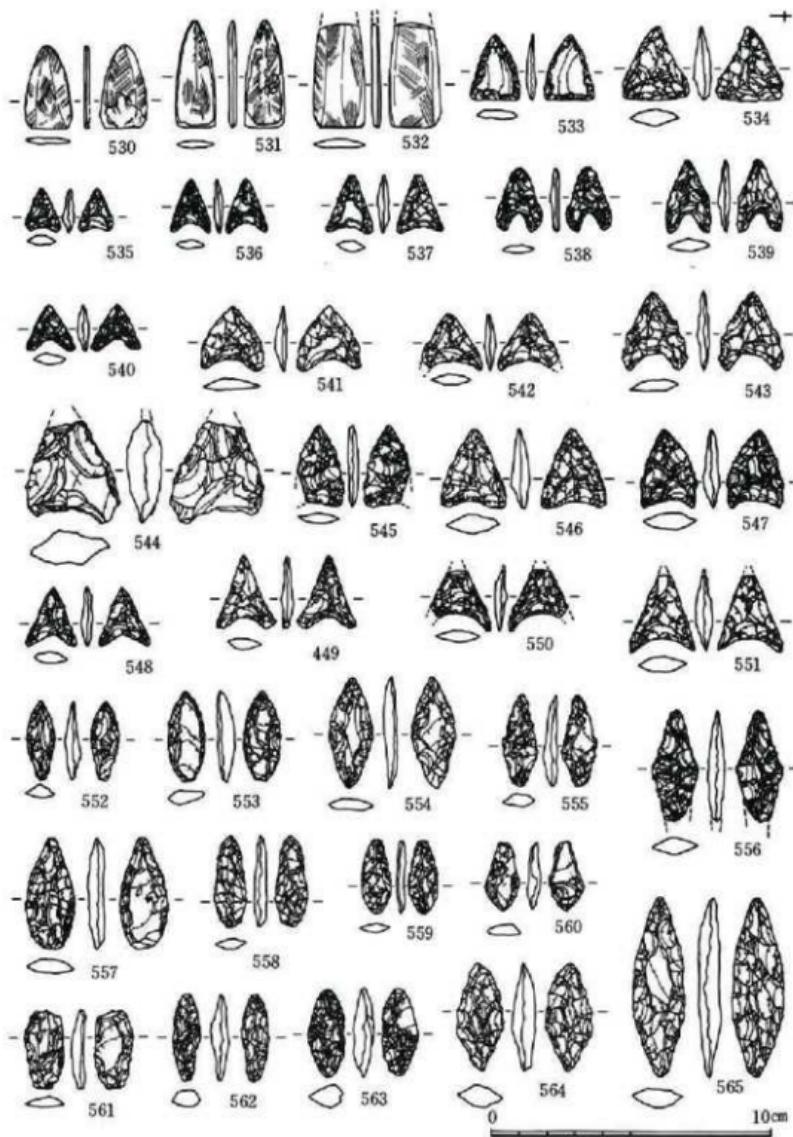


Fig. 85 石歯実測図

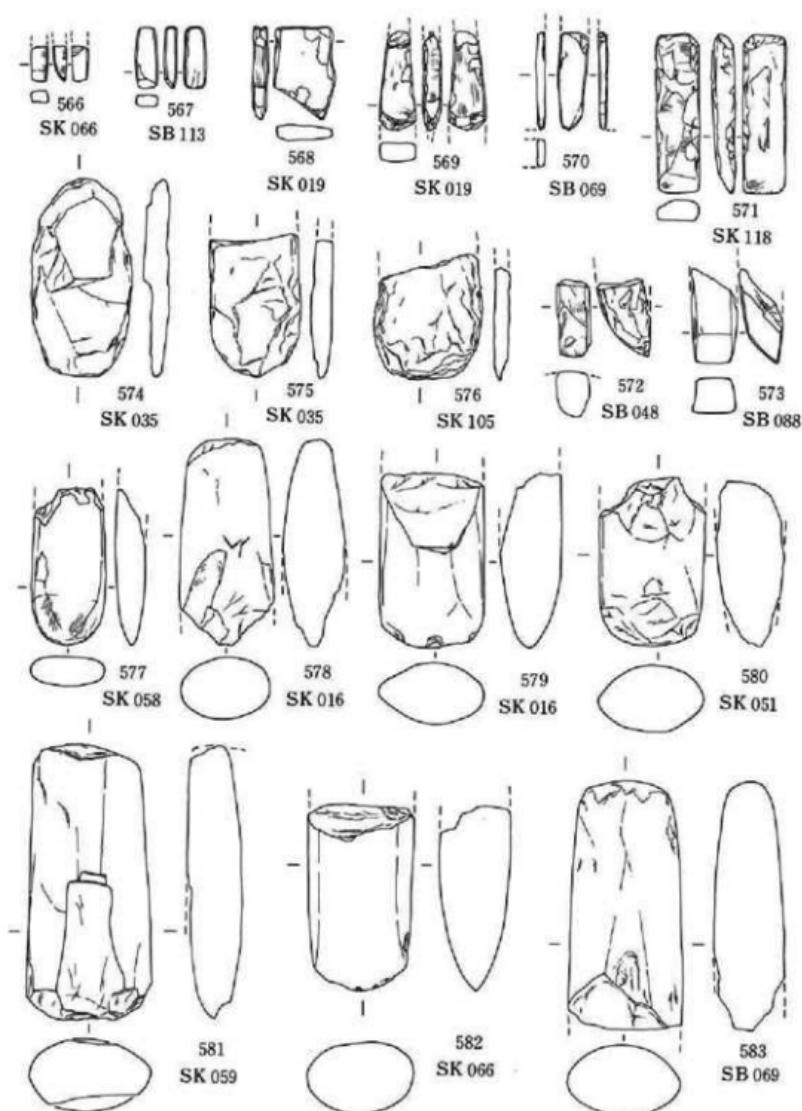


Fig. 86 石斧実測図

0 10 20cm

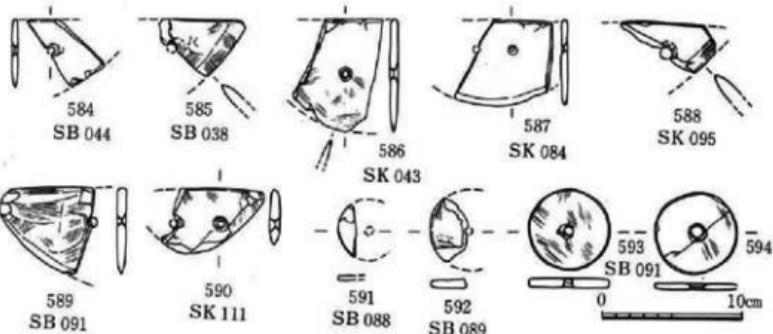


Fig. 87 石製紡車実測図

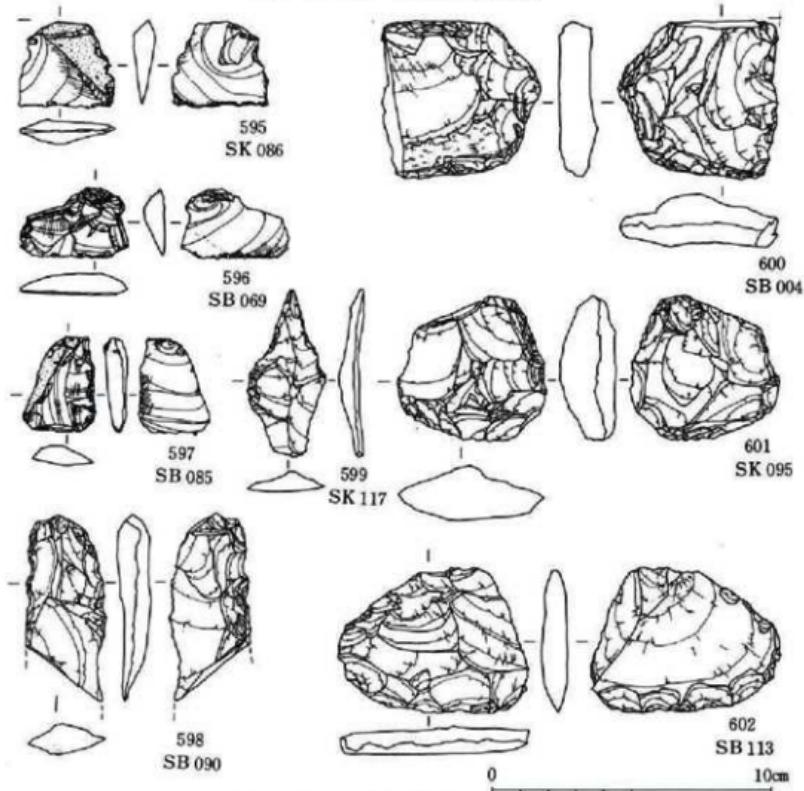


Fig. 88 打製石器実測図

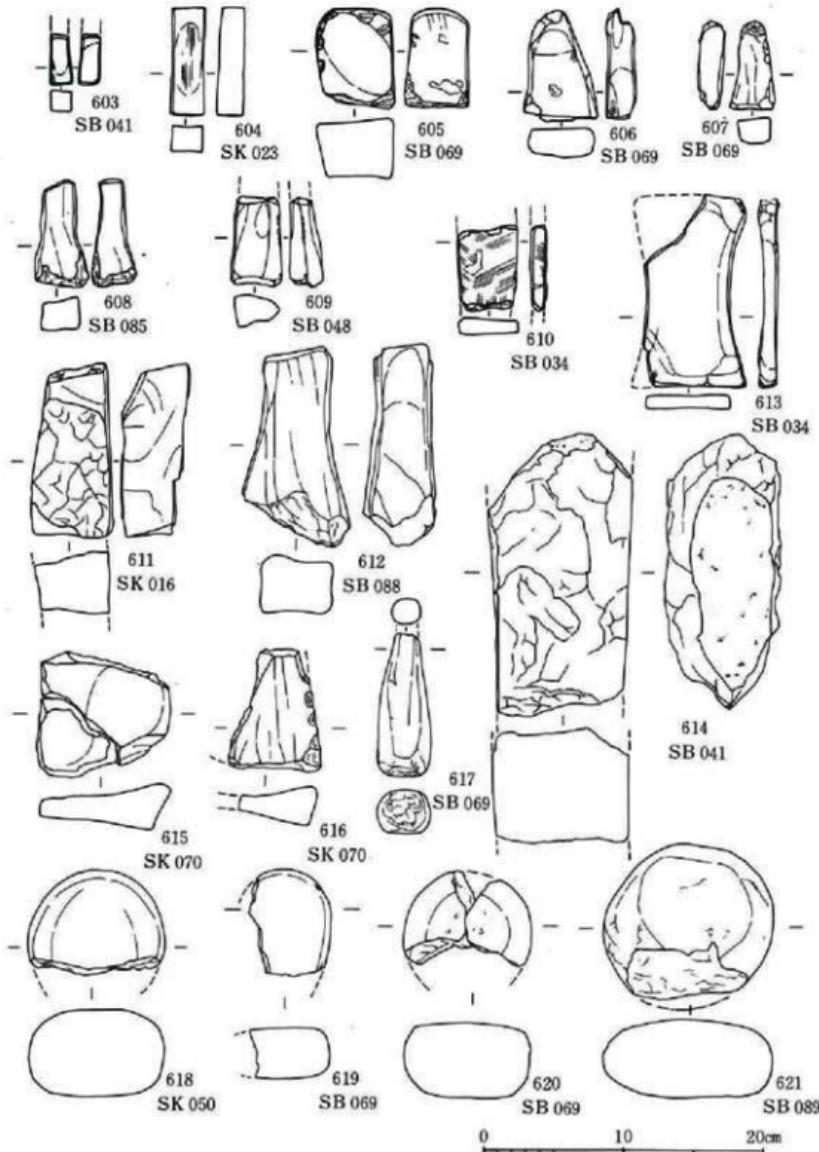


Fig. 89 砂岩・石皿・叩石・磨石実測図

(2) 古墳時代の遺物

古墳時代前期の遺物としては円形周溝墓の周溝から出土した土師器の壺と甕それぞれ1個体のみである。

壺 (625) いわゆる小形丸底壺と呼ばれるもので、球形の器体に直線的に開く口頭部がつく。体部外面はハケ目、内面ヘラケズリ、口頭部外面はヨコナデ調整である。口径10.3cm、器高10.8cm、褐色で胎土には細かい砂粒を含む。外面には黒色の漆状の樹脂を塗布している。

甕 (626) 口頭部・底部を欠く。体部は球形で、下位の器壁が厚くなっている。外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整である。最大径35.0cm、残存器高27.4cm、褐色で、胎土には0.5~5mmの砂粒を含む。

(3) 平安時代の遺物

平安時代の遺物としては、火葬墓から出土した土師器皿1個体、土師器杯3個体、須恵器壺1個体の計5個体の土器があげられる。

皿 (630) 平底の底部から直線的に大きく開く比較的短い体部をもつもので、成形はロクロによる水挽きでなされ底部はヘラで切り離しされている。口径18.8cm、底径10.7cm、器高2.4cm。明るい黄褐色で、胎土には砂粒をほとんど含まない。

杯 3個体とも平底の底部から直線的に上方に開く体部をもつもので、成形はロクロによる水挽きでなされ、底部はヘラ切り離しされている。3個体ともそれぞれ細部で異なる。

底部と体部の屈曲部が角張り、口縁部がわずかに外反するもの (627)、体部が直線的に開きそのまま口縁部となるもの (628)、底部と体部の屈曲部が丸味をもつて口縁部がわずかに外反するもの (629) の3種である。色調、胎土は上記の皿と同一である。

壺 (631) 肩の張る平底の須恵器壺である。肩は張りが強く断面三角形になり突出する。肩部上位には高台状の突帯が1条めぐる。頭部以上は欠損しているが、おそらく口頭部を欠いて藏骨器として用いたものである。底部は中央部が突出する不安定な平底になっているが、底部と体部の境に低い高台がついていたかも知れない。成形は粘土紐の輪積みによるものと考えられ、ロクロにより内外面を整形している。肩部径24.0cm、残存器高約20cmである。内面明黄灰色、外面黒灰色ないし明黄灰色で、胎土には細かい砂粒をわずかに含む。

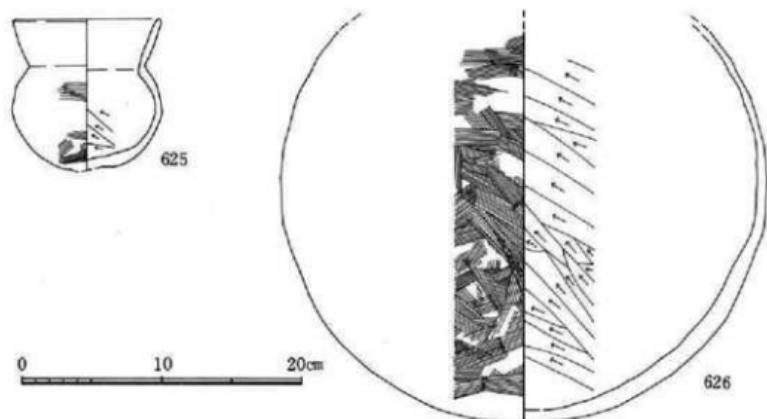


Fig. 90 円形周溝墓出土土師器実測図

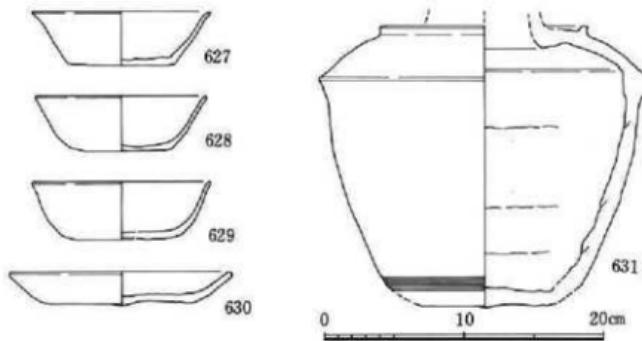


Fig. 91 火葬墓出土土師器・須恵器実測図

IV. くずれ塚 古墳

1. 概 要

くずれ塚古墳は造成予定地内検出遺構のうち唯一の古墳であり、東段丘の弥生時代の集落を中心とする一本谷遺跡とは谷水田を挟んで西方約250mの位置にあたるので、別に報告する。

くずれ塚古墳が存在する西段丘は、第2次世界大戦最中の昭和17・18年に建設された目連原飛行場の東側にあたり、軍用機の掩体などの施設が構築されていた地域である。調査時においても、古墳の周辺にいくつかの掩体跡などが存在しており、この段丘の西側は元來の地形が破壊されている部分も少なくなかった。

くずれ塚は、西段丘西に設けられた三田川自動車学校と北側の土取跡に接する北西隅に遺存していた。標高約26.5mの位置で四方への見通しの良い位置を占めている。

この古墳は以前より知られており、簡単な計測を行なわれている。目連原古墳群の報告書(註)にも少し触れられている。

「無名塚の東方約二百米にくずれ塚というのがある。径六十尺高さ十尺の円墳であるが元横口式石室があったらしくその石室の巨室は下津毛部落の石橋に使用したと言っている。墳の中中央部に巾十尺位の大溝が貫通しているのでその所伝は正しいと思われる。埴輪や葺石は見られないが可なり大きい古墳であって或は只字式の石室ではなかったかと考えられているので参考のためあげておく。」

報告によれば、この古墳は飛行場建設の際破壊を免れたことや、分布地図中の大体の位置、および上記報告文の内容などから、今回調査を実施した古墳が、くずれ塚であると断定した。また古墳北側の土取はその後拡大されたことを知り得た。

発掘調査の結果、くずれ塚古墳は復元径20~24m、墳丘が約2m残存する円墳であり、石室はその掘り方から推定して、南西方向に開口する横穴式石室であると判明した。

註

松尾操作「目連原古墳群調査報告」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第9輯1950

2. 造 構

(1) 墳丘・周溝

墳丘は全体の半分弱遺存しており、石室上部から北西側はすでに破壊されていた。周溝が調査区北東隅と南西隅でカーブを強めることから、墳形は正円ではなく、石室方向に長い橢円形であったことが推定される。北東一南西の長さ約24m、南東一北西の長さ約20mであったと推定される。

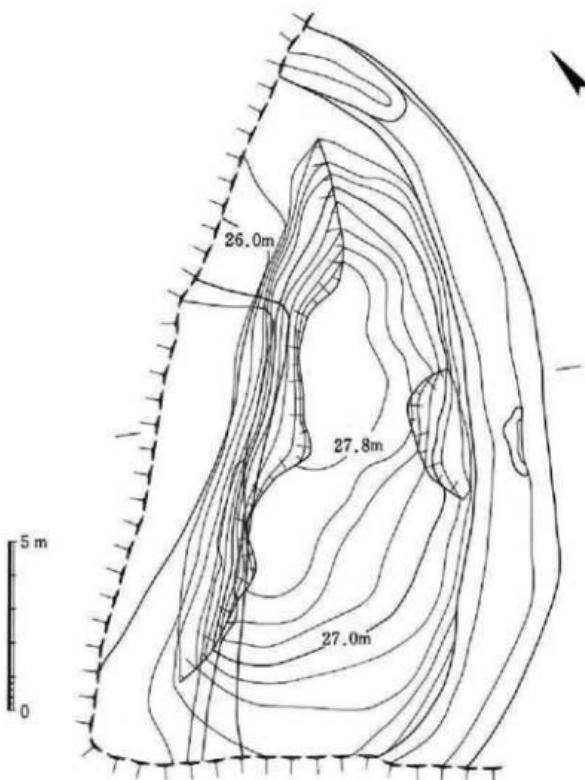


Fig. 92 くずれ塚古墳墳丘実測図（表土除去後）

墳丘は旧地表上に構築されており、上部に厚さ5~6cmの黒色土が存在する。墳丘の積み上げは細かくなされている。旧地表の上には30cmの厚さで石室掘り方の土と考えられる黄褐色粘質土を置き、その上部には黒色土と褐色系統の土を交互に積み上げており、鮮やかな鍋模様となっている。土層断面からみると墳丘は大きく5段階に分けて積み上げ作業を行なっているようである。なお墳丘を覆っていた表土は80~90cmの厚さであった。

精円形に巡ると考えられる周溝は、幅1.7~2.9m、深さ0.16~0.55mであるが深さは0.45m前後が平均的である。周溝の断面は下面が平坦となるいわゆる梯形に近く、流れ込んだ土は褐色系統の土で、レンズ状に堆積している。

遺物としては、墳丘覆土から須恵器窓の口頭部片、円筒埴輪帽部片、土師器高杯片の他、上層からは中世の土師器杯、白磁碗などを出土し、周溝内では特に西部から須恵器杯・庭・短頭壺・高杯・窓口頭部片などを出土した。

(2) 石室

石室は破壊がひどく、石室を構成していた石材のほとんどが抜き取られ、搬出されてしまっていた。また石室北西側は土取りにより破壊され、石室の復元を困難にしている。石室は旧地表から掘り込まれた掘り方に設けられているが、石材の抜き跡によってしかその構造を復元することができない。

石室の掘り方は旧地表面から約1.3mの深さに掘り込まれており、その壁際には石室床面から深さ約0.2mの溝状の痕が巡るが、これが玄室の腰石等の石材を据えた跡や、石材を抜き取る際の掘り跡と考えられる。玄室と考えられる部分の床面には人頭大から拳大の河原石が集石して検出され、奥壁と考えられる部分から南西約10m付近では約2m周囲の範囲に人頭大から拳大の河原石が多数存在しており、閉塞石の一部であろうことが推測された。このような状況から、石室は主軸方向がN50°Eをとり南西に開口する全長約10mの横穴式石室であることが推定された。石室は石材の抜き跡から、玄室はそれぞれ長さ2m前後の複室で構成され、約3.5mの羨道がつく石室構造であった可能性が強い。

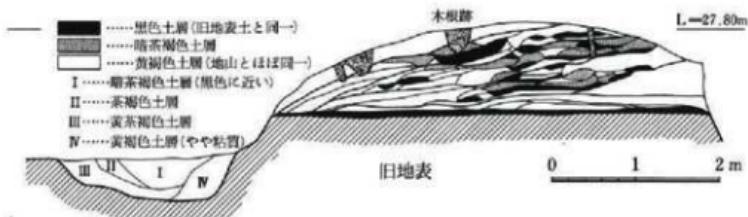


Fig. 93 くずれ塚古墳墳丘・周溝断面土層図

遺物としては玄室内の後室と推定される部分から須恵器平瓶や壺の裾部、銅鏡、中世の土師器杯などが、前室と推定される部分から鉄鑄・馬具などの鉄製品・耳環・ガラス小玉などの装身具などが出土したが、くずれ塚で特に多数の遺物を出土したのは後門と推定される集石周辺及びその前面にかけてであった。須恵器杯・高杯・甌・平瓶・提瓶・壺・高台付壺・土師器杯の他円筒埴輪片など多数であるが、閉塞石と考えられる塊石に混って銅鏡1個体分の破片がかたまって発見された。

3. 遺 物

くずれ塚古墳から出土した遺物には土師器・須恵器などの土器や炻器・磁器、利器・馬具などの鉄器の他に銅鏡、銅鏡、耳環、ガラス製丸玉がある。これらの遺物は時期的にはくずれ塚古墳に伴なう遺物と、古墳に伴なわない他の遺物に分かれる。

(1) 古墳時代の遺物

くずれ塚古墳に伴なう遺物としては、主に石室跡や石室前面、周溝、墳丘内から出土した。

須恵器

須恵器には蓋・杯・高杯・壺・甌・甌・平瓶・提瓶などがある。形態や法量により蓋A・蓋Ba・蓋Bb・蓋Bc・杯Aa・杯Ab・杯Ba・杯Bb・高杯A・高杯Bb・高杯Bb・高杯Bc・

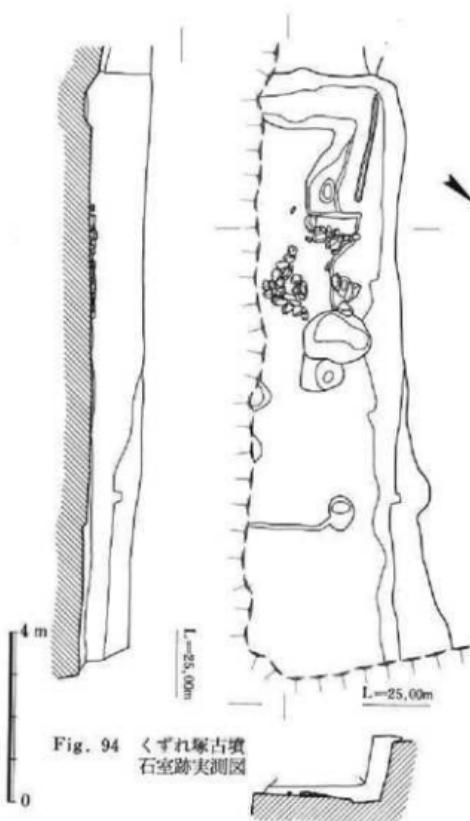


Fig. 94 くずれ塚古墳
石室跡実測図

壺A・壺A・壺Ba・壺Bb・壺A I・壺B・平瓶・平瓶B・提瓶Aに分類される。

壺A (632) わずかに丸味をもつ天井部に外へひらく口縁部がつくもので口縁部のかえりやつまみがつかない。天井部と口縁部の境外面には稜をもち、口縁端部は説いが丸い。天井部外面にヘラ記号がつく。ロクロ成形によるが、天井部外面はヘラケズリ。口径11.9cm、器高4.0cm。

壺B (633~636) なだらかに下る低い天井部につまみがつき、口縁部にかえりがつく。天井部はヘラケズリで他はロクロナデ調整。細部の違いにより次の3つに細分される。壺Baは上面の平坦なつまみのつく天井部が直線的に下るもので、かえりは口縁端部より低い。口縁端部・かえり先端はともに説い。口径11.0cm、器高3.4cm。壺Bb (634) は天井部は丸味をもち、中くぼみのある扁平なつまみがつく。口縁端部やかえりのつくりは壺Baに似るが、先端は丸い。口径11.4cm、器高3.2cm。壺Bc (635・636) は天井部上面は比較的平坦で、扁平で、扁平なつまみと、口縁端部とほぼ同じ高さのかえりがつく。天井部外面にヘラ記号がつくもの (636) もある。635は口径13.8cm、器高2.4cm。636は、口径14.2cm、器高2.6cm。

杯A (637・638) 底体部が丸く、立ちあがりと受部をもつもので、立ちあがりと受部の先端は丸い。底体部下位は回転ヘラケズリ、他はロクロナデ。杯A (637) は底体部が特に丸く、立ちあがりが内傾し、受部は上外方にのびるもので、底部にヘラ記号がつく口径10.0cm、器高4.0cm。杯A b (638) は底部が平坦で、立ちあがりは内傾した後直立し、受部は上外方にのびる。口径12.3cm、器高4.0cm。

杯B (639・640) 立ちあがりがつかない杯で、底部には外開きの高台がつく。口縁端部は丸い。底部外面は回転ヘラケズリ、他はロクロナデ調整。杯Ba (639) は底体部はゆるやかに立ちあがり、口縁端部は外反するもので、高台内にヘラ記号がつく。口径12.8cm、器高4.7cm、高台径8.6cm。杯Bb (640) は底体部が屈曲して直線的に立ちあがるもので、端部は丸い。高台内にヘラ記号がつく。口径13.0cm、器高4.7cm、高台径8.2cm。

高杯A (641) 杯部に立ちあがりをもたないもので、脚部の大半を欠く。杯体部は屈曲して直線的に立ちあがる。ロクロ挽きの際の段がつく。口径9.2cm。

高杯B (642~644) 立ちあがりのつく杯部にラッパ状にひらく脚部がつくもので、ロクロナデ調整により成形されている。立ちあがり、受部とも端部は丸い。杯底体部は丸く、底部を回転ヘラケズリした後、脚部と接合している。主に脚部の形態により3つに細分される。高杯Ba (642) は立ちあがりが内傾し、受部は小さい。脚部は短く、裾部で内傾する。口径10.6cm、器高8.3cm、脚裾部径9.4cm。高杯Bb (643) は立ちあがりがやや内傾し、受部は水平にのびる。

脚部は長く、裾部では水平に外反し、下方へ屈曲する。口径12.1cm、器高13.9cm、脚裾部径14.9cm。高杯Bc(644)は立ちあがりがつよく内傾し、受部は上外方へのびる。脚部は高杯Bbに較べさらに長くなり裾部は水平に外反し、端部ははねあがる。脚部の上位にはロクロナデによる凹線が2条めぐる。口径10.8cm、器高17.5cm、脚裾部径14.2cm。

壺A(649) 小形の壺で、丸底から内湾する体部は上位で屈曲して肩部をつくり、内傾する口頸部がつく。口縁端部は丸い。肩部に2条の沈線がめぐる。口径3.5cm、器高6.7cm、肩部径9.4cm。

壺A(653) 口頸部の破片である。口頸部は外気味にらく長いもので、口縁部は下方および外に肥厚する。2条の沈線で浮かせた突帯が口縁部下と頸部に2条めぐり、口縁部と上位突帯の間および突帯の間3ヶ所に波状文をめぐらすが、中位の波状文は2条重ねている。ロクロナデ調整。口径40.6cm、口頸部高14.5cm。

壺B(654～659) 外反気味の短い口頸部がつくもので、体部内面は同心円タタキ目、外面は格子状タタキ目の後ロクロナデ、口頸部内外面はロクロナデ調整。口縁部の形態により2つに細分される。壺Ba(654～658)は口縁部を下方、外、上方などへ肥厚させるもので、口縁や肩部に文様がつくものもある。654には口縁部外面にヘラ記号がつく。口径18.5cm～27.5cm、口頸部高5cm前後。壺Bb(659)は口縁部が外反しただけのもので、器体は上位で張る球形に近いものである。体部外面下位はロクロナデを行なっていない。口径22.6cm、器高48.2cm、口頸部高4.4cm。

壺A(645～647) 球形に近い体部に上方にひらく長い口頸部がつくもので、上位で大きく外反する頸部から口縁部は上外方に屈曲する。屈曲部は、上に1条の沈線がめぐり突帯状になる。器体の大小により壺A I(647)、壺A II(645)に細分される。647は体部径9.4cmで最大径部に刺突文帯がつく。645は体部径6.6cm、口径10.8cm、器高12.2cmで、肩部に刺突文帯がつく。

壺B(648) 台付の壺である。口頸部を欠く。球形に近い体部に大きく外にひらく低い台がつくもので、体部中位や上位にカキメがつき、その間に刺突文を施す。他はロクロナデ。体部径8.2cm、台裾部径6.6cm。

平瓶A(650) 体部の大半を欠く。口頸部は直線的に上方にひらき、口縁部は丸い。体部外面カキ目、他はロクロナデ調整で、上位に把手状のつまみを付す。口径6.2cm。

平瓶B(651) 体部の大半を欠く。口頸部がわざかに外反しながらひらくもので、口縁端

部が肥厚する。体部上位外面カキメ、他はロクロナデ調整。口径8.6cm

提瓶A (652) 口頸部を欠く。正面が正円形の器体の肩部に左右一対の先端の丸い把手を付す。外面は円心円のカキメ、内面はロクロナデ調整。体部径16.5cm、推定厚10.9cm。

土師器

土師器には碗と高杯がある。

碗 (660) 丸底から体部は内湾しながらゆるやかにひらき、上端では垂直になり、丸い口縁端部となる。外面はラミガキ調整で、内面はタテ方向に放射状の暗文をつける。外面赤色顔料を塗布。口径16.4cm、器高5.8cm。

高杯 (661～664) 661は杯部で、大きくひらく体部から口縁部はわずかに上方に屈曲して立ちあがる。端部は丸い。外面とも赤色顔料を塗布する。口径13.4cm。662は脚部で、わずかに外反しながらひらく脚部から裾部は水平に外にひらき、端部は丸い。裾部径10.6cm。663・664は杯底部とラッパ状にひらく脚部上位の破片である。どちらも外面と杯部内面に赤色顔料を塗布する。

埴輪 (665・666) 2個とも円筒埴輪の破片である。665は突堤部の破片で、突堤は断面コの字である。外面ヨコナデ、内面ナデ調整。器壁は厚さ1.5cm、突堤の高さ1.0cm。666は裾部片で外面ハケメ、内面ナデ調整。裾部厚1.7cm。

壺 (667) 焙口の裾部片である。裾部は内外へ広がり肥厚する。ハケメ調整。器壁の厚さ2.2cm、裾部の復元厚4.8cm。

銅鏡 (674)

銅鏡1面分が10片程に散乱して出土した。径7.8cm、紐の部分の厚さ0.7cm、縁の厚さ0.47cmを計る。縁は三角縁で、内側には5箇を界し、外から鋸齒文、鋸齒文、櫛齒文、珠文帯を配するが、珠文が主文となり、他の文様帯を副文としているものと考えられる。彷彿三角縁珠文鏡と呼ぶべき小形鏡である。全面緑青に覆われており緑灰色になっているが、比較的銅質は良く、部分的に黒色に近い緑色をなす。

銅鏡 (677)

底部を欠損する。内湾しながら開く体部は上位で垂直に立ち上り、その上端を内側へ肥厚させ口縁部とするが、端部は丸い。口縁端部より下位1.45cmと2.0cmの位置に幅0.1cm弱の沈線が巡る。表面は緑青に覆われ、もうくなっており、緑灰色となっている。高台はつかないものと

考えられる。口径17.8cm、推定器高8.5cm内外。

耳環 (675)

金箔張りである。全体の径は横3.15cm、縦2.95cmで、断面は0.7cm～0.85cmの円形に近い精円形をなす。

小玉 (676)

ガラス製のコバルトブルーの小玉である。長さ0.8cm、径0.6～0.7cm、孔径0.2cm弱である。

鉄器・鉄製品

鉄器・鉄製品には留金具・鉗具・四葉座金・縁金具などの馬具、刀子、鎌などの武器その他がある。

留金具 (678～686)

完形に近いものは679～681、683・684の4点である。形態的には側縁が平行で頭が丸くなるものの(678・679・682)、長方形の片側の両角を除いたもの(681)、側辺が頭の方へ狭くなり、頭が丸いもの(680)、正方形のもの(683・684)などに分れる。682～685は鉄地金銅張りである。

鉗具 (689・690)

690は長は5.5cm、幅3.6cm、底辺幅3.3cmで、径0.55cmの断面円形の鉄棒を折り曲げて作られたものである。689は径0.6cm。

四葉座金 (688)

座金は正方形の4葉を十字形に配したもので、幅3.7cm、厚さ0.3cmで、1葉を欠く。紙は頭径1.4cm、全長4.0cm。鉄地金銅張り。

縁金具 (684)

湾曲する座金は幅0.55～0.6cm、厚さ0.1cm強で、頭径0.45、全長0.55cmの紙が約1cmの間隔で付く。

刀子 (693)

鉢と茎の先端を欠く。刃部は厚いつくりで、闇が刃部側へ突出するつくりである。茎は断面長方形。現存長10.0cm。

鐵鎌 (694～701)

694は平根方頭斧箭式で、茎を欠く。鎌身の長さ6.0cm、幅2.5cm、厚さ0.1～0.45cm。695～701はいわゆる長頸鎌で、細根式の片丸造りのものであるが、695は鎌身と範被の境が明瞭でない。695は現存長8.2cm、幅0.9cm、厚さ0.25～0.35cm。696・697は鎌身と茎の先端を欠く破片で、範被と茎の境に棘状突起がつく。現存長はそれぞれ8.6～10.0cm。698～701は鎌身と範被の一部の破片である。すべて片丸造の鎌身である。鎌身の法量は698が長さ2.9cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm、699が長さ1.8cm、幅0.9cm、厚さ0.4cm、700が長さ2.0cm、幅1.05cm、厚さ0.3cm。

701が現存長1.75cm、幅1.1cm、厚さ0.4cmである。

その他の鉄製品

692は鞘金具の破片と考えられる。現存長3.5cm、幅3.05cm、厚さ0.3cm。691は全体の約3分の1の破片と考えられるもので、巴形に透しが5ヶ所程入りそうなもので、中央部は高く盛り上がる。復元径6.3cm、高さ0.6cm、鉄板の厚さ0.15cm。あるいは尾鉢とも考えられるが、とにかく馬具の一種であろう。

(2) その他の遺物

くずれ塚古墳に伴なう遺物以外に、墳丘の覆土上層から土師器の小皿や杯、陶磁器の碗や皿が出土し、玄室床面から土師器杯が出土した。

土師器

小皿 (668・669) 668は平底にわずかに内溝しながらひらく短かい口縁部がつく。内外面ロクロナデ調整、底部は糸切り離し、口径7.2cm器高2.0cm。669は平底に直線的にひらく短かい口縁部がつく。内外面ロクロナデ調整、底部は糸切り離しの後、板目がつく。口径8.8cm、器高1.3cm。

杯 (670・671) どちらも底部片で平底である。670は上げ底氣味の平底となっており、外表面は糸切り離し痕が残る。底径11.7cm。671は平底で、外面は板目痕が残る。底径9.6cm。

陶磁器

青磁皿 (672)

直線的に大きくひらく体部の上位を上方へわずかに屈曲させ口縁部としている。屈曲部の内面には沈線が1条めぐり、釉だまりとなっている。内面には櫛描文を描く。内外面ロクロナデ。素地は黄味を帯びた灰白色で、釉は黄緑色に発色している。口径10~11cm程度の皿である。

白磁碗 (673)

わずかに内溝しながら大きくひらく体部の先端はわずかに肥厚し外反して口縁部となる。体部中位より下はカンナで削りを施し、角が鋭い幅広の高台を削り出している。内面見込みには凹線が1条めぐる。内面と外面体部上半は施釉され、他は露胎。素地は黄味を帯びた灰白色で、釉は微量の鉄分を含んでいるらしく緑色がかった明るい灰色に発色している。口径17.6cm、復元器高6.4cm、高台径7.4cm。

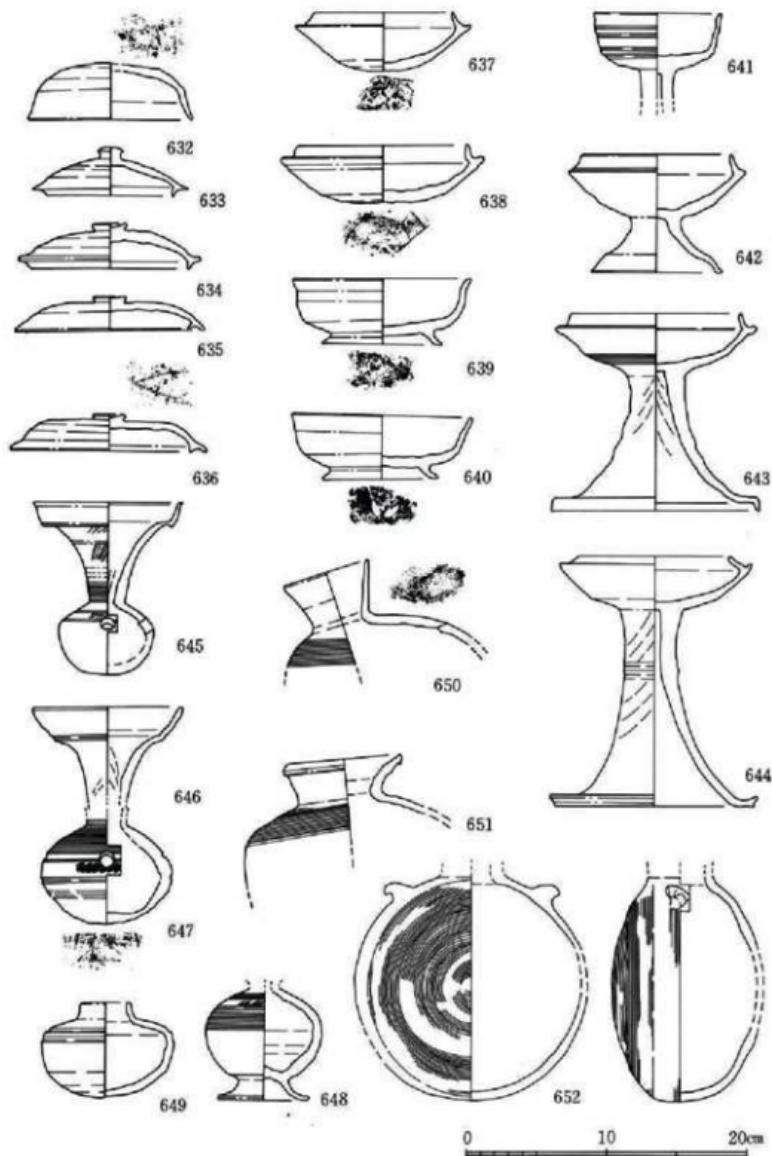


Fig. 95 くずれ塚古墳出土須恵器実測図 (1)

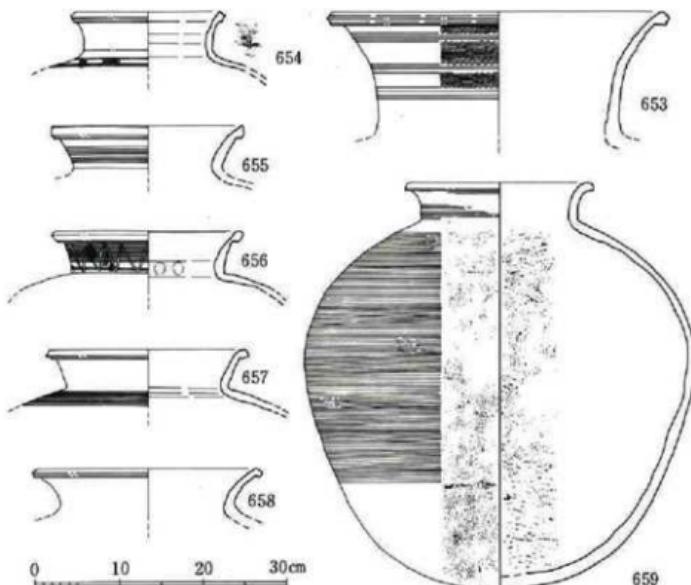


Fig. 96 くずれ塚古墳出土須恵器実測図（2）

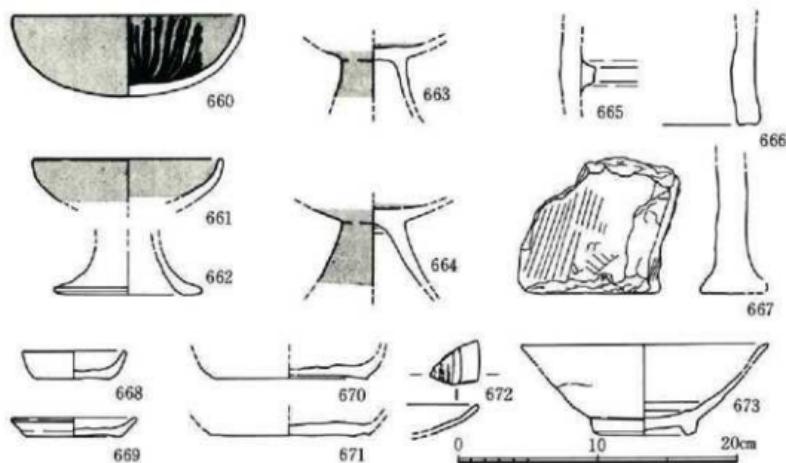


Fig. 97 くずれ塚古墳出土土師器・埴輪・甕・陶磁器実測図

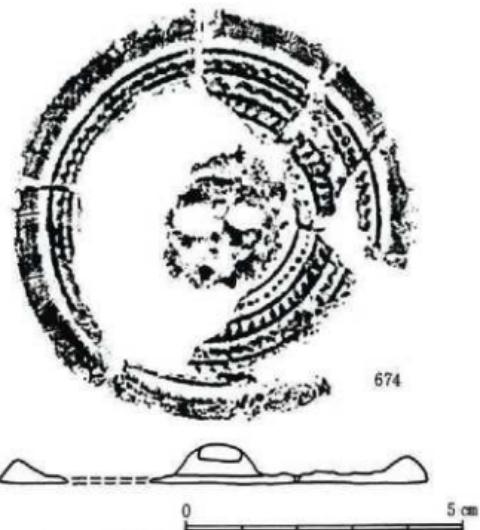


Fig. 98 くずれ塚古墳出土銅鏡拓影(原寸)

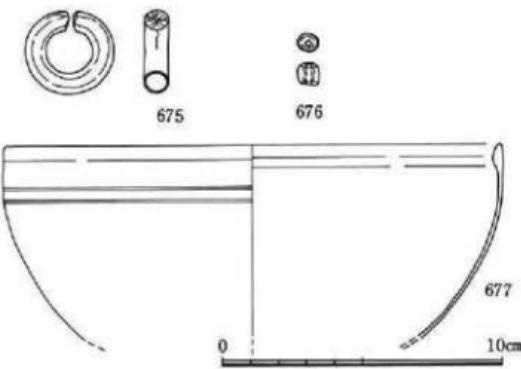


Fig. 99 くずれ塚古墳出土耳環・小玉・銅鏡実測図

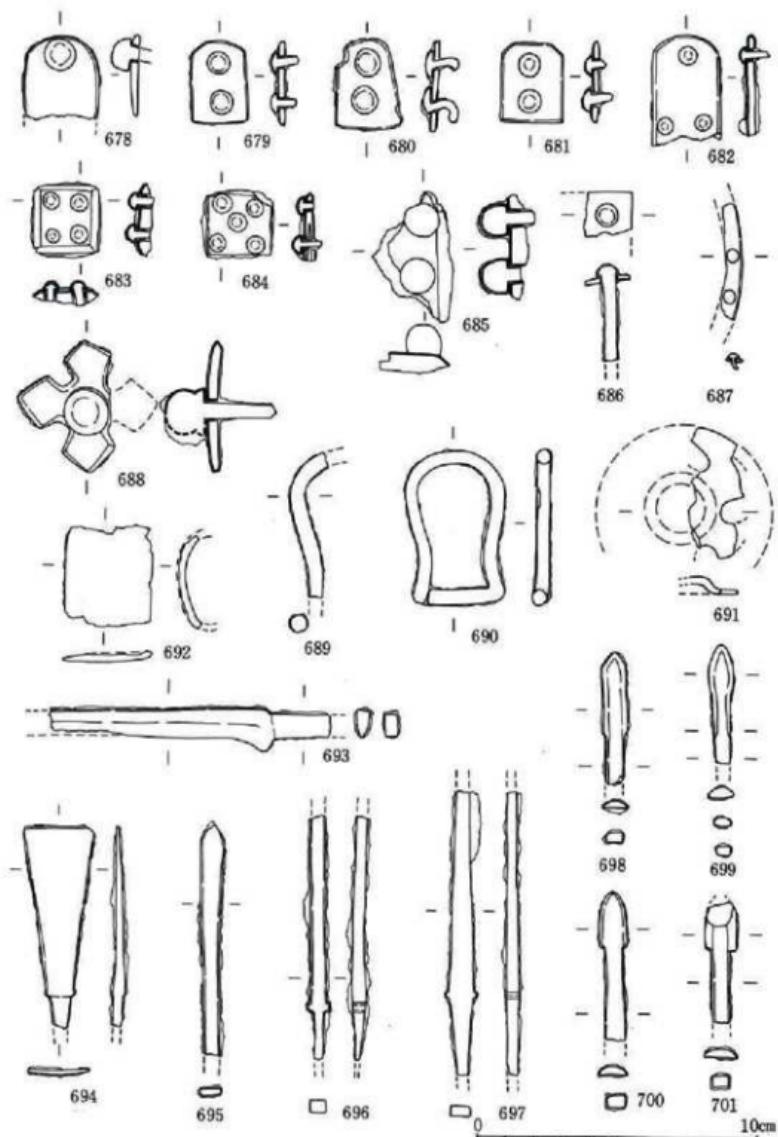


Fig. 100 くずれ塚古墳出土鉄器・鉄製品実測図

V. おわりに

発掘調査の結果、一本谷遺跡は弥生時代の前期末から中期前葉にかけての時期と後期中頃～後半の一時期に営まれた集落、古墳時代前期の円形周溝墓、平安時代前期の火葬墓などからなる遺跡であることが明らかになった。また西段丘上に存在するくずれ塚古墳は横穴式石室をもつ古墳時代後期の円墳であることが判明した。以下、調査の成果と問題点について簡単に述べてみたい。

1. 弥生時代の一本谷遺跡

弥生時代の集落は現在の水田面との比高7～14mの段丘の尾根と東西斜面に立地する。竪穴住居跡は尾根の稜線に沿い、それらを囲むように両斜面の特に東斜面には貯蔵穴や土壙が分布している。

周辺地域では弥生時代の集落は水田面との比高が小さな低段丘や微高地上に存在することが通例で、一本谷集落の在り方は特殊な例とみることができる。近年調査された中原町町南遺跡⁽¹⁾も同様な立地条件であることが注目される。

集落が尾根上に立地するため、個々の竪穴住居はその位置設定にあたってはおのずから地形的な規制を受けることは想像にかたくなく、尾根上の平坦面以外には設置されていない。

弥生時代の出土遺物をみると、前期末から中期前葉にかけての一群、後期中頃から後半にかけての一群に大別することができる。

前期末から中期前葉にかけての遺物としては甕・壺・鉢などの土器、石鎌・石斧・石包丁などの石器の他に磁石・叩石・磨石・紡錘車・支脚・土彈・勾玉などが出土している。前期末の土器としては甕A・甕Bのうちの大半、甕C・甕D・甕Eの一部、壺A、壺Ba、壺Bb、鉢Aなどがあげられ、中期初頭の土器としては甕A・甕Bの一部、甕C・甕D・甕Eの大半、壺C、壺D、壺E、鉢B、鉢Cなどがあげられるが、前期様式の土器と中期の土器が共存している例も多い。中期の土器の中で最も新しい土器群はS K 086土壙出土の一括遺物があり、中期前半でも中頃に近づいた時期の所産と考えられる。

また後期の遺物としては甕・壺・鉢・高杯・器台などの土器の他に支脚、磁石、鐵器片などが出土している。特に土器については出土量が多く、S B 039住居跡出土土器はほとんどが床面より出土しており、良好な一括資料として注目される。これらは基山町千塔山遺跡⁽¹⁾のI期の土器の中に共通点の多い土器がいくつか存在する。後期の他の3軒の住居跡から出土した土器はS B 039住居跡のものに較べ古い要素をもっている。

上記の土器分類から集落の時期的な変遷をみると、まず前期末段階でS B 001・S B 041・S B 077・S B 091住居跡などが大きな間隔をもって出現し、次いでS B 004・S B 067・S B

099・S B113住居跡が営まれる。これら前期末から中期初頭にかけての竪穴住居跡の分布をみると、北部に集中する傾向があり、南部になるに従って数が減少する。北部では径約25mの円形の空間地を取り囲むように竪穴住居が設置されているが、この空間は集落共通の広場であったものと考えられる。この時期で中部南寄りに位置するS B041住居跡（新）は規模・構造において群を抜いており、また焼失している点や磨製石鎌を出土している点など特異な存在である。また、中部に位置するS B077住居跡は、西部を破壊されてはいたが、平面長方形の竪穴住居跡であり、東壁に沿っていわゆるベッド状遺構が造り出してあった。踏み締めた床面から前期にさかのぼる甕片や石鎌、フレイク多数を出土した。ベッド状遺構出現の問題に関して大きな意味をもつものと考えられる。

中期前葉の竪穴住居跡は、上記以外の平面円形の竪穴住居跡であるが、旧段階の集落の範囲を拡大して集落を営んでいる。すなわち北部・中部では東へ、南部では南へと集落の範囲は大きくなる。旧段階での北部の空間地は新段階になっても引き続き空間地のままであるが、範囲は幾分大きくなり、径約30mになっている。この時期にもS B069住居跡のように規模・構造の点で前のS B041住居跡に類似した竪穴住居跡が存在しており、これまた焼失家屋であり、磨製石鎌・勾玉を出土するなど特異な存在である。

個々の竪穴住居跡については、先の大規模なものを除けば、一般的に旧段階のものは規模の小さな4本柱構造のものが主体であり、時期が下るに従って規模が大きくなり、5~8本柱構造のものが増加していく。

このように個々の住居跡の規模も、集落の規模も中期になると拡大する傾向をうかがうことができる。

前期末から中期前葉にかけての貯蔵穴は確かなもので約55基が住居跡の周囲に存在するが、この期間の竪穴住居跡27軒で単純に割れば1軒の住居に2基程度の貯蔵穴がつくことになる。

中期中頃から後期にかけての遺構は全く存在せず、再び集落が営まれるのは後期中頃以後のことである。調査区内においては4軒の竪穴住居跡が南部において検出された。すべて平面長方形で、S B049住居跡は不明な点が多いが、他の3軒については2本柱構造の切妻形の家屋と考えられ、内部に2~4ヶ所のいわゆるベッド状遺構を設けている。これら4軒の竪穴住居跡は主軸方向が一定していることや、ある程度の間隔を保って営まれていることなどから、これらは近接した時期の所産と考えられる。調査区南外の畠地も平坦な地形であり、後期の竪穴住居跡群が存在している可能性が強い。

弥生時代の一本谷遺跡は前期末から中期前葉まで集落が存続し、再び後期後半の一時期に集落が形成されるといういわば断続形の集落であったことがわかる。佐賀平野の弥生時代集落は北部九州の集落と同じくこの断続形の集落であり、比較的長期に渡るものとしては弥生時代中期前半から後期さらには古墳時代まで存続する中原町姫方原遺跡などが存在するに過ぎないが、

ここでも集落存続の過程で住居跡の数が減少する時期があることも指摘される。

さて一本谷遺跡の集落が営んだ墓地の問題であるが、この集落付近で現在までに知られている甕棺墓地としては北東方向約300mの国道34号線の北側に存在していた切通遺跡がある。この墓地は約100基の甕棺墓を出土し、うち4号甕棺からはゴホウラ製貝輪10個を装着した男性人骨に伴って細形銅劍1本を出土している。甕棺の時期は報告によると中期中葉をやや遡るものが大部分であるとされるが、図版を見る限りにおいても、中期前半のものがほとんどであり、さらに古式の甕棺も出土したものと考えられる。そう考えれば、一本谷の集落との関係が深く、あるいは同一集團により営まれた集落と墓地であると考えることもできるが、今後切通遺跡の甕棺の調査や周辺遺跡の調査を行なわない限り確証は得られない。

また後期の集落が営んだ墓地についても不明であるが、付近から以前に長宣子孫連弧文鏡が箱式石棺から出土している。この鏡は一本谷遺跡出土となっているが、正確な出土位置は不明である。付近の住民の話によると、遺跡の北西約600mの現在の三田川金属工業の工場や松尾建設の機材倉庫敷地周辺から石棺などが多数出土したらしく、後期の墓地であった可能性が強く、一本谷の後期の集落との関係が窺える。

2. 古墳時代の一本谷遺跡

一本谷遺跡では古墳時代の遺構としては前期の円形周溝墓が1基営まれたのみである。しかし遺跡の西方段丘上のくずれ塚古墳についても調査を実施し、多くの新事実を知ることができた。

一本谷遺跡の西方および西南方一帯には三田川町、一部東脅振村にかけて目達原古墳群と呼ばれる前方後円墳7基、円墳6基以上からなる古墳群が形成されていたが、戦時中の目達原飛行場建設などで簡単な調査の後ほとんどが破壊された。現在では遺跡の西南方約600mに位置する上のびゅう古墳（都紀女加王墓）1基のみが陵墓参考地として保存されているに過ぎない。今回調査を行なったくずれ塚古墳もこの古墳群調査の際注意されていた古墳であった。

円形周溝墓は径約9.5mの周溝が巡り、中央部に木棺を納めたものであった。上部の削平がひどく、墳丘をもっていたかなどについては不明であるが、中央の棺の位置からみると、低い墳丘はもっていただろうと推測される。円墳と呼ぶこともできるが、構造上また当時の社会性から一般に方形周溝墓と呼ばれる墳墓に対比して円形周溝墓と呼ぶべきであろう。方形周溝墓と考えられるものは県内では東から鳥栖市本川原（2基）、中原町姫方（1基）、上峰村五本谷（3基）、三日月町成（1基）、同町久米（3基）、同町下久米（3基）などで検出されているが、いずれも確実な内部主体は不明であった。一本谷の円形周溝墓はもちろん県内初例の円形周溝墓であり、周溝墓としては内部主体を明らかにし得た唯一例である。出土した土器は2点と少ないが、蓋からみるとこの円形周溝墓は5世紀前半の所産と考えられる。

古墳時代後期になると遺跡の西方にくずれ塚古墳が出現するが、後期の円墳としては径20m

以上と大きなものであり、複室の横穴式石室ももっていたものと考えられる。銅鏡や銅碗、馬具などにみられる副葬品の豪華さは目達原古墳群のそれに匹敵する程である。

出土した須恵器は大きく2つの時期に大別される。蓋A・杯Aの時期と蓋B・杯Bの時期であるが、陶邑での編年などによると、前者は6世紀後半、後者は7世紀前半～中頃を中心とした時期と考えられる。

銅鏡は仿製の珠文鏡であるが、副面には柳目文・鋸齒文帯を配しており、縁は三角縁となる類例の少ない銅鏡である。県内での珠文鏡の出土例は佐賀市関行丸古墳¹¹で2面、鳥栖市旭町ブリジストン工場敷地¹²、唐津市山本金屋¹³、唐津市惣原1号墳¹⁴でそれぞれ1面の計5面が知られるにすぎないが、くずれ塚出土の珠文鏡とは様相を異にしている。珠文鏡などの小形の仿製鏡が、6世紀後半で製作が一時消滅すると考えられていることなどから、旧段階の須恵器群と共に伴った可能性が強い。

銅鏡については、下部を欠いてはいるものの接合できなかった破片が多数ある。しかし高台の一部と考えられる破片ではなく、おそらく丸底に近い平底であったと考えられる。県内での銅鏡の出土例は唐津市島田塚古墳の1例のみであるが、これは小形の高台付鏡で、共伴遺物などから6世紀前半から中頃の時期のものと考えられている。¹⁵くずれ塚例は千葉県殿塚古墳や埼玉県将軍塚古墳、同県真觀寺古墳出土の無台鏡¹⁶などと同様な形態・法量であったと考えられるが、沈線の位置や数に相違点がみられる。これらの古墳が6世紀末～7世紀前半の所産であることを考えれば、くずれ塚古墳では新段階の須恵器に伴った可能性があり、石室の奥壁付近の床面から出土したことこのことを裏付けるであろう。

目達原古墳群は古墳の形態や出土遺物などから5世紀後半から6世紀以降の時期に営まれた古墳群と考えられ、「国造本紀」によると応神天皇曾孫都紀女加王を初代とする筑紫米多国造家累代の墳墓と考えられている。「続日本紀」文武天皇慶雲4年(704)の条には、米多君北助が天武天皇の葬儀にあたり御装司の役を勤めたことが記されており、8世紀になんでも中央の役人として朝廷に出仕するほど繁栄していたものと考えられる。

先の銅鏡についても、畿内政権による地方豪族把握の手段として配布しただろうことや、このことを前提として各地域に白鳳時代寺院が成立すると推定されている。¹⁷目達原古墳群の城内と近接した地域には、上峰村塔の塚庵寺跡¹⁸と東育振村辛上庵寺跡¹⁹の2つの寺院跡が存在し、このあたりの情勢を物語るのかもしれない。

註

- (1)天本洋一・七田忠昭「町南遺跡」佐賀県文化財調査報告書第68集 1983
- (2)中牟田賢治「千塔山遺跡」基山村遺跡発掘調査団 1978
- (3)多々良友博「姫方原遺跡・F地区」中野建設・中野ハウジング 1981
- (4)金間丈夫・金間惣、原口正三「佐賀県切通遺跡」「日本農耕文化の生成」 1961
- (5)木下巧「本川原遺跡」佐賀県文化財調査報告書第26集 1974
- (6)木下之治「姫方遺跡」佐賀県文化財調査報告書第30集 1974
- (7)七田忠昭「二塚山」佐賀県文化財調査報告書第46集 1979
- (8)木下巧「戊遺跡」佐賀県文化財調査報告書第36集 1976
- (9)木下巧「久米遺跡」佐賀県文化財調査報告書第42集 1978
- ⑩註9に同じ
- ⑪渡辺正氣「佐賀市鷺行丸古墳」佐賀県文化財調査報告書第7集 1958
- ⑫七田忠志・松尾耕作「B.S旭自転車工場遺跡」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第8編 1949
- ⑬松岡史「古代」「唐津市史」 1962
- ⑭註13に同じ
- ⑮種口隆康「古鏡」 新潮社 1979
- ⑯小田富士雄「日本の古墳出土銅鏡について」「百済研究」6 1975
- ⑰毛利光俊彦「古墳出土銅鏡の系譜」考古学雑誌第64巻第1号 1978
- ⑱註17に同じ
- ⑲松尾耕作「塔の塚廃寺址」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第7集 1940
- ⑳七田忠志「肥前風土記神堀郡の様に於ける寺院に関する一考察」上代文化13 1935
松尾耕作「東脇村辛上廃寺跡の調査」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第5編 1936

遺物番号・遺物登録番号対照表

| 図面・遺物登録番号 | 遺物登録番号 | 図面・遺物登録番号 | 遺物登録番号 | 図面・遺物登録番号 | 遺物登録番号 |
|-------------|----------|-------------|----------|--------------|-----------------|
| Fig. 57- 1 | 82002058 | Fig. 62- 90 | 82002749 | Fig. 67- 179 | 82003032 |
| 2 | 82002062 | 91 | 82002736 | 180 | 82003025 |
| 3 | 82002055 | 92 | 82002742 | 181 | 82003027 |
| 4 | 82002062 | 93 | 82002728 | 182 | 82003045 |
| 5 | 82002051 | Fig. 63- 94 | 82002714 | 183 | 82003044 |
| 6 | 82002060 | 95 | 82002039 | 184 | 82003059 |
| 7 | 82002059 | 96 | 82002701 | 185 | 82003058 |
| 8 | 82002062 | 97 | 82002712 | 186 | 82003041 |
| 9 | 82002741 | 98 | 82002710 | 187 | 82003046 |
| 10 | 82002063 | 99 | 82002713 | 188 | 82003047 |
| 11 | 82002067 | 100 | 82002709 | 189 | 82003045 |
| 12 | 82002075 | 101 | 82002707 | 190 | 82003048 |
| 13 | 82002074 | 102 | 82002717 | 191 | 82003049 |
| 14 | 82002066 | 103 | 82002703 | 192 | 82003050 |
| 15 | 82002072 | 104 | 82002708 | 193 | 82003051 |
| 16 | 82002073 | 105 | 82002716 | 194 | 82003062 |
| 17 | 82002068 | 106 | 82002100 | 195 | 82003053 |
| 18 | 82002065 | 107 | 82002719 | 196 | 82003046 |
| 19 | 82002064 | 108 | 82002718 | 197 | 82002433 |
| 20 | 82002071 | 109 | 82002728 | 198 | 82003045 |
| 21 | 82002076 | 110 | 82002731 | 199 | 82002434 |
| 22 | 82002078 | 111 | 82002777 | 200 | 82002428 |
| 23 | 82002077 | 112 | 82002726 | 201 | 82002429 |
| 24 | 82002093 | 113 | 82002726 | 202 | 82002430 |
| 25 | 82002094 | 114 | 82002773 | 203 | 82002441 |
| 26 | 82002090 | 115 | 82002722 | 204 | 82002440 |
| 27 | 82002096 | 116 | 82002721 | 205 | 82002439 |
| 28 | 82002082 | 117 | 82002720 | 206 | 82002444 |
| 29 | 82002097 | 118 | 82002025 | 207 | 82002449 |
| 30 | 82002760 | 119 | 82001924 | 208 | 82002448 |
| 31 | 82002750 | 120 | 82001923 | 209 | 82002445 |
| Fig. 58- 32 | 82001911 | 121 | 82001953 | 210 | 82002447 |
| 33 | 82001913 | 122 | 82001953 | 211 | 82002431 |
| 34 | 82001910 | 123 | 82001954 | 212 | 82002455 |
| 35 | 82001920 | 124 | 82002023 | 213 | 82002453 |
| 36 | 82001918 | 125 | 82001942 | 214 | 82002457 |
| 37 | 82001916 | 126 | 82001942 | 215 | 82002454 |
| 38 | 82001909 | 127 | 82001921 | 216 | 82002456 |
| 39 | 82001917 | 128 | 82001957 | 217 | 82002452 |
| 40 | 82001905 | 129 | 82001955 | 218 | 82002458 |
| 41 | 82001916 | 130 | 82001945 | 219 | 82002452 |
| 42 | 82001918 | 131 | 82001958 | 220 | 82002450 |
| 43 | 82001912 | 132 | 82001959 | 221 | 82002451 |
| 44 | 82001931 | 133 | 82001934 | 222 | 82002459 |
| 45 | 82001915 | 134 | 82001935 | 223 | 82002460 |
| 46 | 82001912 | 135 | 82001940 | 224 | 82002462 |
| 47 | 82001907 | 136 | 82001944 | 225 | 82002464 |
| Fig. 59- 48 | 82001919 | 137 | 82001915 | 226 | 82002466 |
| 49 | 82001911 | 138 | 82001947 | 227 | 82002479 |
| 50 | 82002427 | 139 | 82001951 | 228 | 82002474 |
| 51 | 82001492 | 140 | 82001948 | 229 | 82002476 |
| 52 | 82001499 | 141 | 82001949 | 230 | 82002478 |
| 53 | 82001486 | 142 | 82001950 | 231 | 82002469 |
| 54 | 82001487 | 143 | 82001960 | 232 | 82002485 |
| 55 | 82001488 | 144 | 82001961 | 233 | 82002484 |
| 56 | 82002417 | 145 | 82001958 | 234 | 82002472 |
| 57 | 82002414 | 146 | 82001958 | 235 | 82002483 |
| 58 | 82002413 | 147 | 82001956 | 236 | 82002487 |
| 59 | 82002416 | 148 | 82001942 | 237 | 82002480 |
| 60 | 82002411 | 149 | 82001960 | 238 | 82002481 |
| 61 | 82002409 | 150 | 82001979 | 239 | 82002482 |
| 62 | 82002418 | 151 | 82001981 | 240 | 82003201 |
| 63 | 82002420 | 152 | 82001983 | 241 | 82002493 |
| Fig. 61- 64 | 82002499 | 153 | 82001992 | 242 | 82002488 |
| 65 | 82002500 | 154 | 82001990 | 243 | 82002499 |
| 66 | 82002401 | 155 | 82001981 | 244 | 82002494 |
| 67 | 82002495 | 156 | 82001997 | 245 | 82002497 |
| 68 | 82002496 | 157 | 82001995 | 246 | 82002498 |
| 69 | 82002409 | 158 | 82001986 | 247 | 82002499 |
| 70 | 82002422 | 159 | 82001994 | 248 | 82002763 |
| 71 | 82002404 | 160 | 82001976 | 253 | 82002769 |
| 72 | 82002426 | 161 | 82001975 | 254 | 82002770 |
| 73 | 82002423 | 162 | 82001974 | 255 | 82002771 |
| 74 | 82002426 | 163 | 82001973 | 256 | 82002773 |
| 75 | 82002413 | 164 | 82002012 | 257 | 82002770 |
| 76 | 82002412 | 165 | 82002015 | 258 | 82002765 |
| 77 | 82002410 | 166 | 82002013 | 259 | 82002766 |
| 78 | 82002734 | 167 | 82002009 | 260 | 82002767 |
| 79 | 82002753 | 168 | 82002014 | 261 | 82002768 |
| 80 | 82002752 | 169 | 82002021 | 262 | 82002769 |
| 81 | 82002756 | 170 | 82002023 | 263 | 82002770 |
| 82 | 82002756 | 171 | 82002023 | 264 | 82002771 |
| 83 | 82002756 | 172 | 82002034 | 265 | 82002778 |
| 84 | 82002735 | 173 | 82002030 | 266 | 82002782 |
| 85 | 82002745 | 174 | 82002029 | 267 | 82002788 |
| 86 | 82002744 | 175 | 82002036 | 268 | 82002790 |
| 87 | 82002737 | 176 | 82002031 | 269 | 82002777 |
| 88 | 82002748 | 177 | 82002038 | 270 | 82002778 |
| 89 | 82002733 | 178 | 82002035 | 271 | 114476 82002787 |

Fig. 68- Fig. 71- 258

Fig. 72- 300

Fig. 69- 222

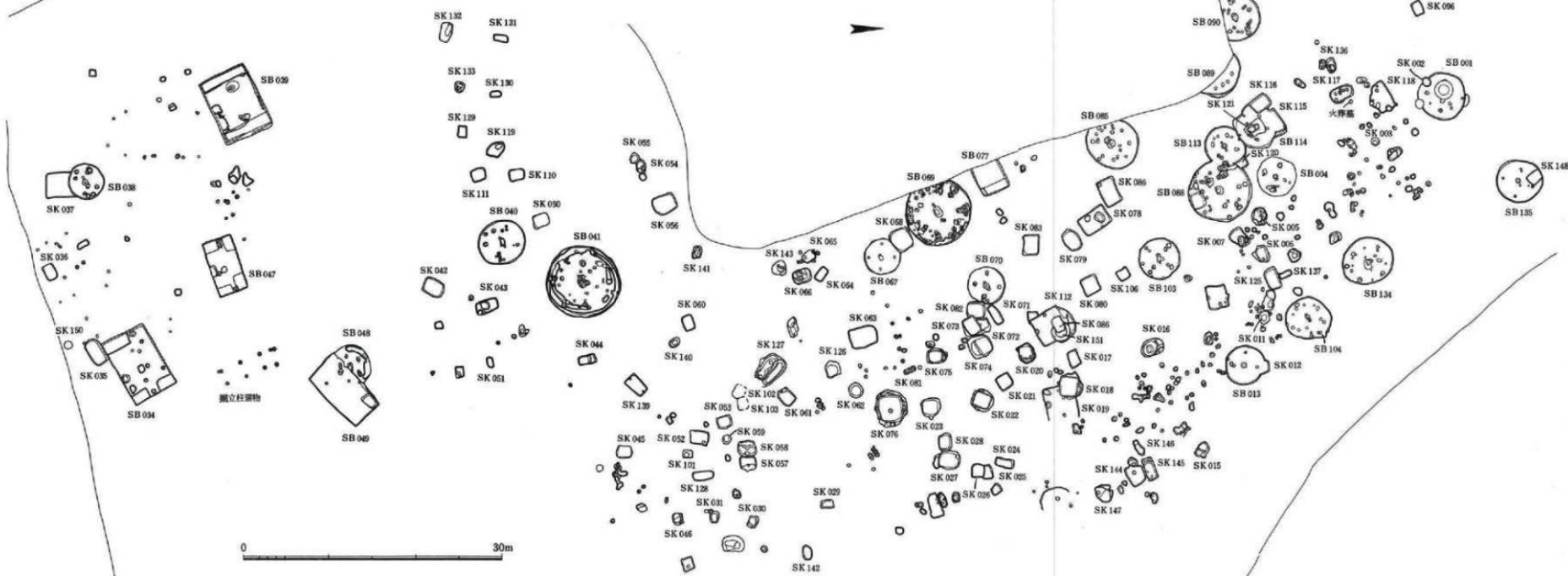
Fig. 73- 334

Fig. 70- 277

Fig. 74- 347

| 图号 | 零件名称及序号 | 图号 | 零件名称及序号 | 图号 | 零件名称及序号 | 图号 | 零件名称及序号 |
|------------|----------|------------|----------|------------|----------|------------|----------|
| Fig 74-355 | 82003226 | Fig 79-444 | 82003723 | Fig 85-530 | 82003354 | Fig 89-419 | 82006609 |
| 356 | 82003333 | 445 | 82003723 | 531 | 82003341 | 630 | 82006610 |
| 357 | 82003228 | 446 | 82003725 | 532 | 82003342 | 621 | 82006609 |
| 358 | 82003223 | 447 | 82003727 | 533 | 82003344 | 622 | 82006608 |
| 359 | 82003228 | 448 | 82003728 | 534 | 82003345 | 623 | 82006607 |
| 360 | 82003226 | 449 | 82003258 | 535 | 82003346 | 624 | 82006609 |
| 361 | 82003336 | 450 | 82003272 | 536 | 82003360 | 625 | 82006605 |
| 362 | 82003300 | 451 | 82003271 | 537 | 82003363 | 626 | 82006603 |
| 363 | 82003331 | 452 | 82003267 | 538 | 82003331 | 627 | 82006264 |
| 364 | 82003341 | 453 | 82003274 | 539 | 82003374 | 628 | 82006765 |
| 365 | 82003239 | 454 | 82003275 | 540 | 82003372 | 629 | 82006763 |
| 366 | 82003242 | 455 | 82003277 | 541 | 82003329 | 630 | 82006766 |
| 367 | 82003243 | 456 | 82003276 | 542 | 82003379 | 631 | 82006767 |
| Fig 75-348 | 82003349 | 457 | 82003386 | 543 | 82003328 | Fig 95-632 | 82006862 |
| 368 | 82003248 | 458 | 82003381 | 544 | 82003392 | 632 | 82006864 |
| 369 | 82003244 | 459 | 82003397 | 545 | 82003388 | 633 | 82006865 |
| 370 | 82003245 | 460 | 82003398 | 546 | 82003385 | 634 | 82006865 |
| 371 | 82003250 | 461 | 82003279 | 547 | 82003334 | 635 | 82006867 |
| 372 | 82003253 | 462 | 82003385 | 548 | 82003367 | 637 | 82006871 |
| 373 | 82003252 | 463 | 82003284 | 549 | 82003387 | 638 | 82006870 |
| 375 | 82003254 | 464 | 82003386 | 550 | 82003375 | 639 | 82006869 |
| 376 | 82003252 | 465 | 82003286 | 551 | 82003391 | 640 | 82006868 |
| 377 | 82003242 | 466 | 82003289 | 552 | 82003801 | 641 | 82006850 |
| 378 | 82003219 | 467 | 82003297 | 553 | 82003399 | 642 | 82006851 |
| 379 | 82003223 | 468 | 82003256 | 554 | 82003332 | 643 | 82006854 |
| 380 | 82003225 | 469 | 82003259 | 555 | 82003348 | 644 | 82006858 |
| 381 | 82003228 | 470 | 82003260 | 556 | 82003344 | 645 | 82006852 |
| 382 | 82003257 | 471 | 82003273 | 557 | 82003385 | 646 | 82006859 |
| 383 | 82003226 | 472 | 82003257 | 558 | 82003396 | 647 | 82006853 |
| 384 | 82003229 | 473 | 82003260 | 559 | 82003352 | 648 | 82006848 |
| 385 | 82003231 | 474 | 82003268 | 560 | 82003810 | 649 | 82006847 |
| 386 | 82003217 | 475 | 82003255 | 561 | 82002811 | 650 | 82006875 |
| 387 | 82003218 | 476 | 82003279 | 562 | 82002809 | 651 | 82006876 |
| Fig 76-388 | 82003332 | 477 | 82003754 | 563 | 82002814 | 652 | 82006877 |
| 389 | 82003229 | 478 | 82003753 | 564 | 82002812 | 653 | 82006873 |
| 390 | 82003230 | 479 | 82003747 | 565 | 82002813 | 654 | 82006799 |
| 391 | 82003231 | 480 | 82003746 | 566 | 82002805 | 655 | 82006797 |
| 392 | 82003233 | 481 | 82003263 | 567 | 82002803 | 656 | 82006798 |
| 393 | 82003731 | 482 | 82003269 | 568 | 82003301 | 657 | 82006797 |
| 394 | 82003234 | 483 | 82003759 | 569 | 82003302 | 658 | 82006794 |
| 395 | 82003235 | 484 | 82003749 | 570 | 82003304 | 659 | 82006792 |
| 396 | 82003250 | 485 | 82003751 | 571 | 82003306 | Fig 97-660 | 8200785 |
| 397 | 82003247 | 486 | 82003782 | 572 | 82003643 | 661 | 82006790 |
| 398 | 82003246 | Fig 82-484 | 82003755 | 573 | 82002942 | 662 | 82006782 |
| 399 | 82003248 | 485 | 82003755 | 574 | 82002846 | 663 | 82006770 |
| 400 | 82003252 | 486 | 82003754 | 575 | 82002847 | 664 | 82006781 |
| 401 | 82003251 | 487 | 82003756 | 576 | 82002848 | 665 | 82006777 |
| 402 | 82003254 | 488 | 82003759 | 577 | 82002945 | 666 | 82006769 |
| 403 | 82003255 | 489 | 82003760 | 578 | 82002991 | 667 | 82006766 |
| 404 | 82003257 | 490 | 82003742 | 579 | 82002995 | 668 | 82006773 |
| 405 | 82003262 | 491 | 82003741 | 580 | 82002982 | 669 | 82006774 |
| 406 | 82003259 | 492 | 82003743 | 581 | 82002982 | 670 | 82006787 |
| 407 | 82003264 | 493 | 82003744 | 582 | 82002849 | 671 | 82006771 |
| 408 | 82003267 | 494 | 82003800 | 583 | 82002850 | 672 | 82006776 |
| 409 | 82003239 | 495 | 82003802 | 584 | 82002833 | 673 | 82006775 |
| 410 | 82003230 | 496 | 82003803 | 585 | 82002831 | Fig 98-674 | 83006606 |
| 411 | 82003238 | 497 | 82003809 | 586 | 82002828 | Fig 99-675 | 83006610 |
| 412 | 82003274 | 498 | 82003296 | 587 | 82002829 | 676 | 83006611 |
| 413 | 82003276 | 499 | 82003297 | 588 | 82002834 | 677 | 83006612 |
| 414 | 82003279 | 500 | 82003294 | 589 | 82002832 | Fig 10-678 | 83006714 |
| 415 | 82003273 | 501 | 82003802 | 590 | 82002827 | 679 | 83006620 |
| 416 | 82003290 | 502 | 82003801 | 591 | 82002840 | 680 | 83006619 |
| 417 | 82003288 | 503 | 82003803 | 592 | 82002829 | 681 | 83006621 |
| 418 | 82003286 | 504 | 82003804 | 593 | 82002827 | 682 | 83006616 |
| 419 | 82003279 | 505 | 82003298 | 594 | 82002836 | 683 | 83006622 |
| 329 | 82003284 | 506 | 82003299 | 595 | 82002819 | 684 | 83006623 |
| 421 | 82003283 | 507 | 82003801 | 596 | 82002816 | 685 | 83006617 |
| 422 | 82003287 | 508 | 82003800 | 597 | 82002818 | 686 | 83006624 |
| Fig 78-384 | 82003391 | 509 | 82003812 | 598 | 82002825 | 687 | 83006613 |
| 424 | 82003294 | 510 | 82003821 | 599 | 82002815 | 688 | 83006615 |
| 425 | 82003295 | 511 | 82003823 | 600 | 82002823 | 689 | 83006618 |
| 426 | 82003283 | 512 | 82003826 | 601 | 82002822 | 690 | 83006625 |
| 427 | 82003286 | 513 | 82003824 | 602 | 82002821 | 691 | 83006622 |
| 428 | 82003288 | 514 | 82003817 | 603 | 82003116 | 692 | 83006616 |
| 429 | 82003279 | 515 | 82003818 | 604 | 82003118 | 693 | 83006618 |
| 430 | 82003270 | 516 | 82003816 | 605 | 82003110 | 694 | 83006627 |
| 431 | 82003272 | 517 | 82003820 | 606 | 82003109 | 695 | 83006629 |
| 432 | 82003271 | 518 | 82003829 | 607 | 82003111 | 696 | 83006630 |
| 433 | 82003276 | 519 | 82003830 | 608 | 82003113 | 697 | 83006631 |
| 434 | 82003276 | 520 | 82003831 | 609 | 82003117 | 698 | 83006632 |
| 435 | 82003271 | 521 | 82003841 | 610 | 82003109 | 699 | 83006634 |
| 436 | 82003270 | 522 | 82003844 | 611 | 82003114 | 700 | 83006633 |
| 437 | 82003270 | 523 | 82003823 | 612 | 82003112 | 701 | 83006635 |
| 438 | 82003271 | 524 | 82003834 | 613 | 82003107 | | |
| 439 | 82003271 | 525 | 82003805 | 614 | 82003115 | 702 | 82006707 |
| 440 | 82003272 | 526 | 82003820 | 615 | 82003121 | 703 | 82006581 |
| 441 | 82003271 | 527 | 82003830 | 616 | 82003120 | 704 | 82006584 |
| 442 | 82003275 | 528 | 82003841 | 617 | 82003241 | 705 | 82006873 |
| Fig 79-443 | 82003724 | 529 | 82003843 | 618 | 82003607 | | |

一本谷遺跡遺構配置図 (1 / 400)

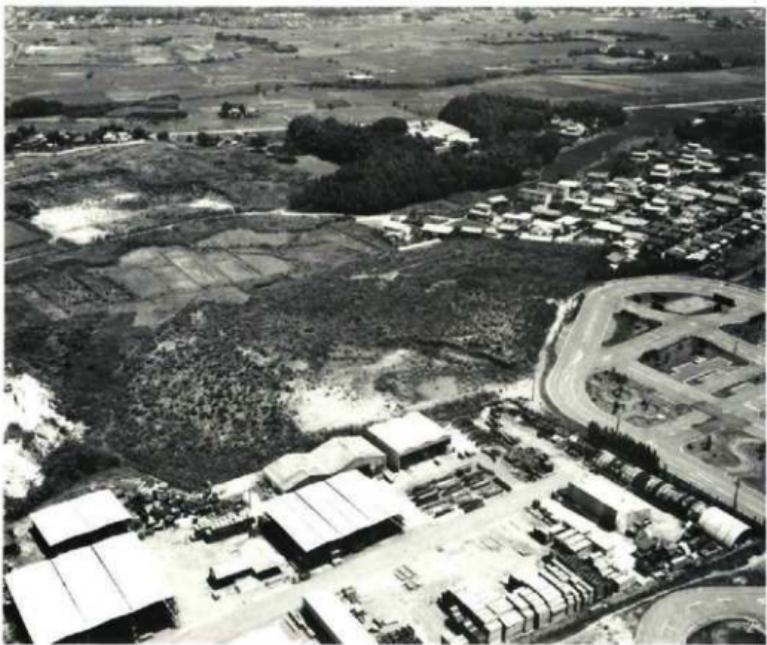


図版

(遺構)



一本谷遺跡全景〈西から〉



1. 一本谷遺跡遠景
(西、くずれ塚古墳から)
2. 一本谷遺跡調査の
航空写真
(上方左、
中央はくずれ塚古墳)



1. 一本谷遺跡・くずれ塚
古墳周辺航空写真
2. 一本谷遺跡周辺航空
写真
3. 一本谷遺跡全景
航空写真



1. 一本谷遺跡南部・中言
《南上空から》

2. 一本谷遺跡中部・北言
《南上空から》



1. 一本谷遺跡全景（北から）
2. 一本谷遺跡中部・南部
（北から）
3. 一本谷遺跡北西部
（北から）



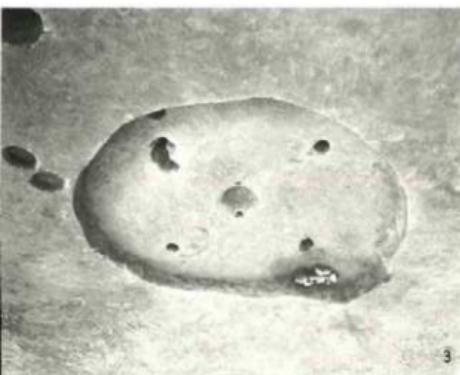
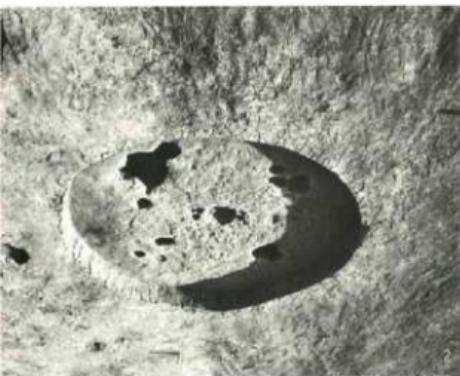
1. SB 041
2. SB 069
3. SB 039



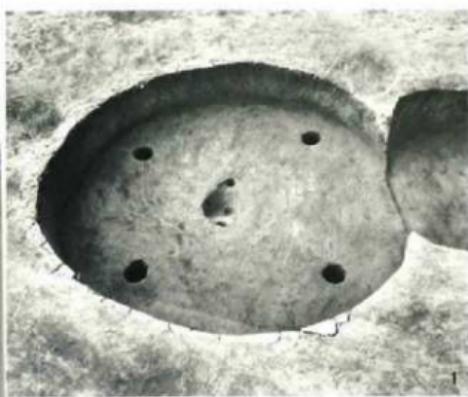
1. SB 087

2. SB 070

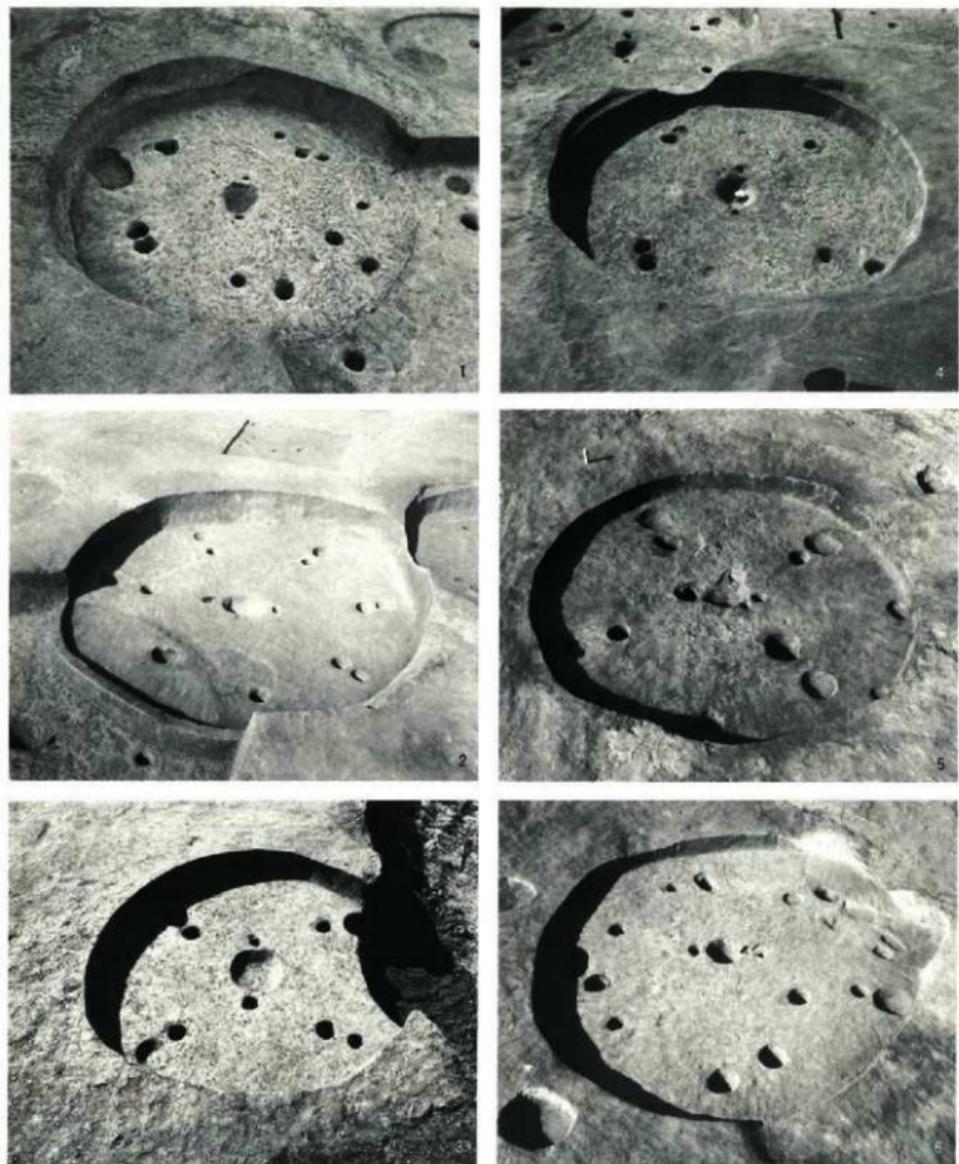
3. SB 134



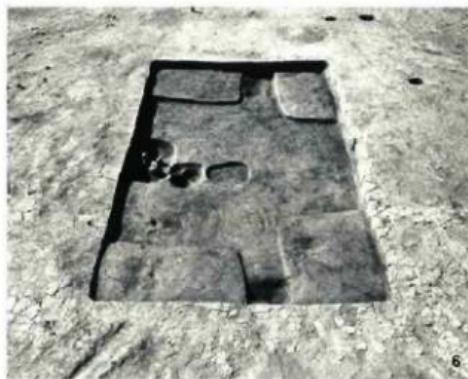
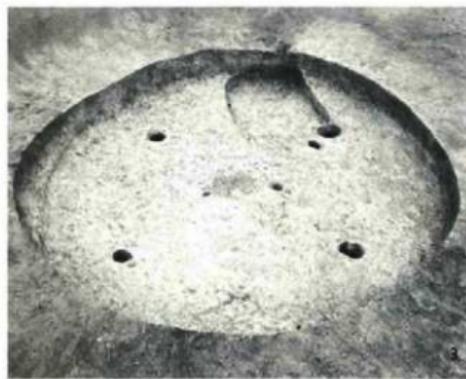
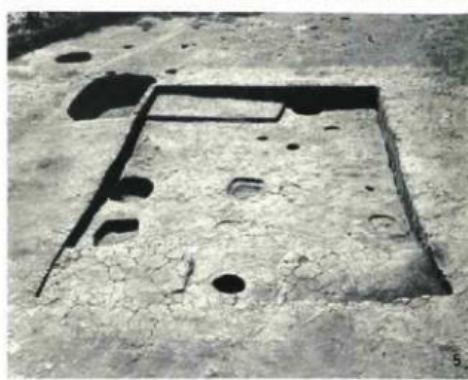
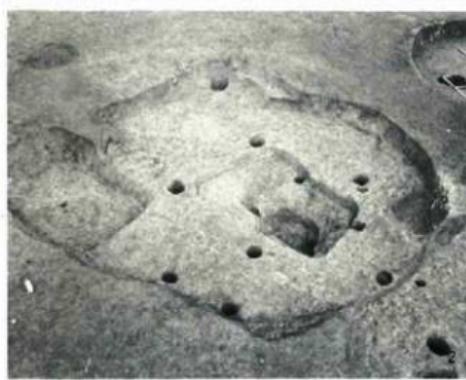
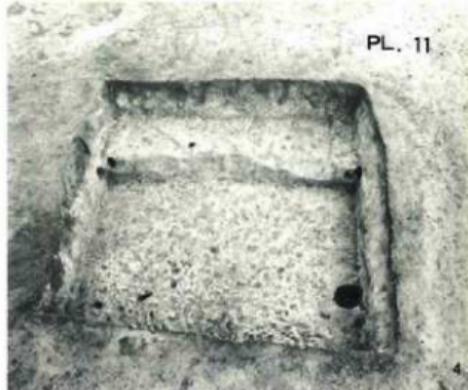
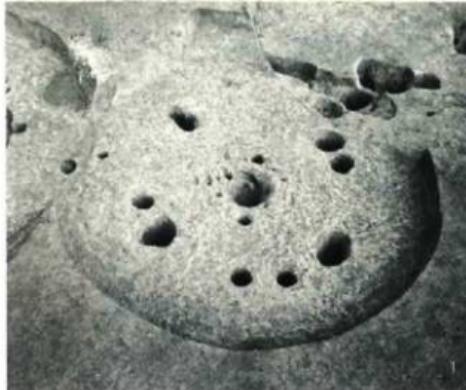
1. SB 001
2. SB 004
3. SB 013
4. SB 038
5. SB 040
6. SB 048 (左) • SB 049 (右)



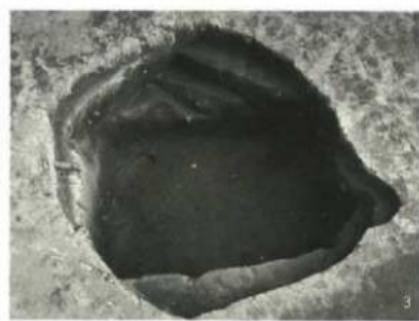
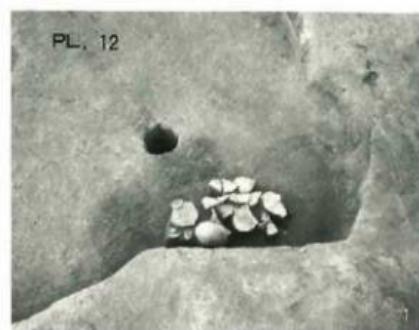
- 1 . SB 067
- 2 . SB 085
- 3 . SB 088
- 4 . SB 089
- 5 . SB 090
- 6 . SB 091



1 . SB 093
2 . SB 094
3 . SB 099
4 . SB 100
5 . SB 103
6 . SB 104



- 1 . SB 113
- 2 . SB 114
- 3 . SB 135
- 4 . SB 077
- 5 . SB 034
- 6 . SB 047

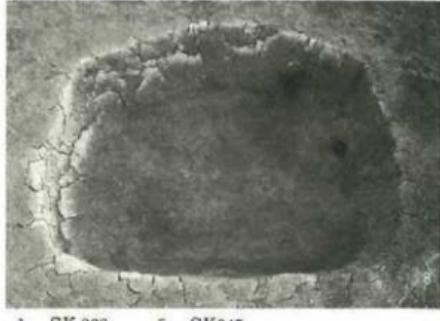


1. SK 012 5. SK 023

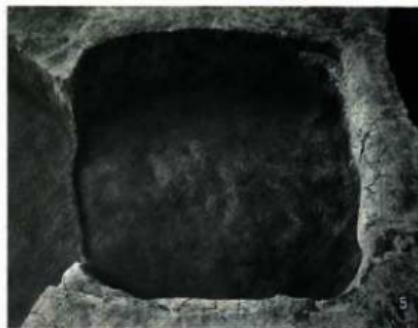
2. SK 018 6. SK 024

3. SK 020 7. SK 025 (左) · SK 026

4. SK 022 8. SK 027



1 . SK 028 5 . SK045
2 . SK 035 6 . SK050
3 . SK 036 7 . SK052
4 . SK 042 8 . SK053



1. SK 056
2. SK 057
3. SK 060
4. SK 061

5. SK068
6. SK072 (上) • SK 073
7. SK074
8. SK075



1. SK 076

2. SK 082

3. SK 084 (中) · SK 151

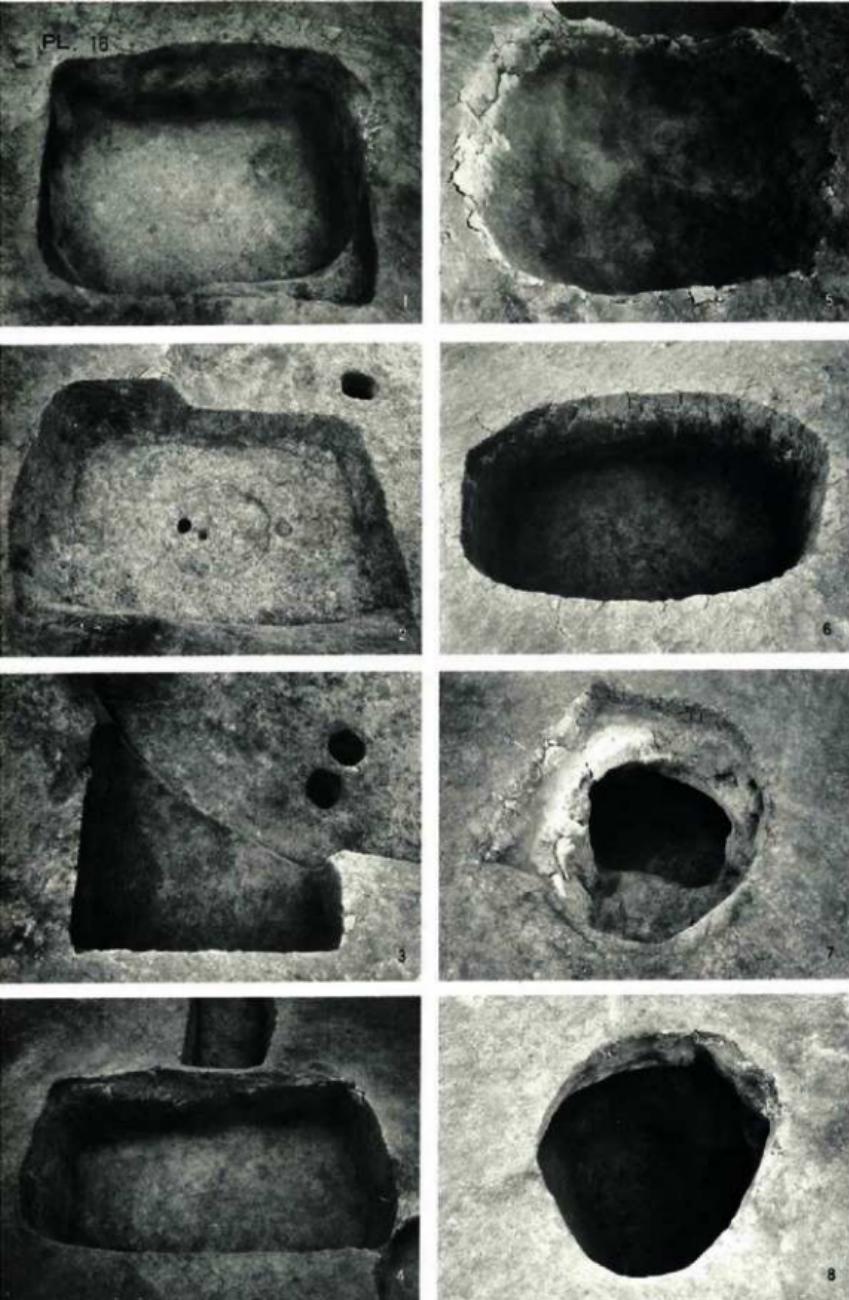
4. SK 096

5. SK 098

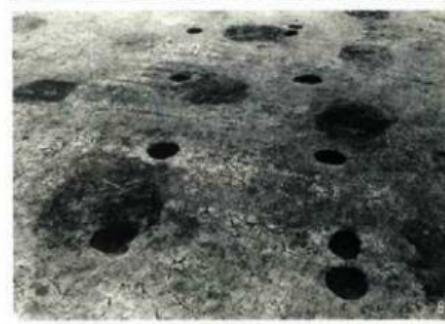
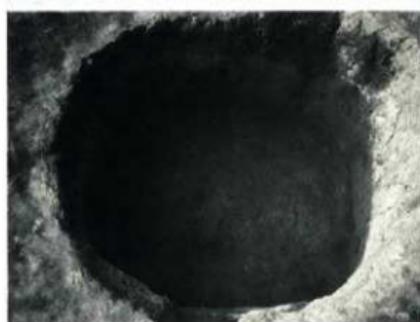
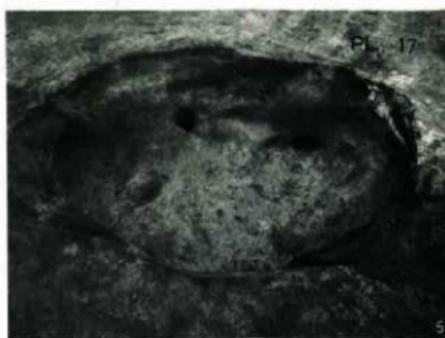
6. SK 102 (左) · SK 103

7. SK 106

8. SK 110



1. SK111 5. SK 058
2. SK116 6. SK 079
3. SK122 7. SK 046
4. SK125 8. SK 059



1. SK 017

2. SK 030

3. SK 032

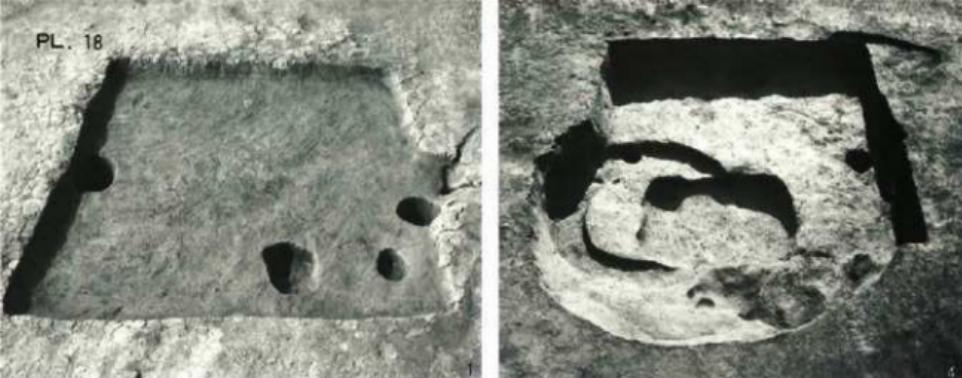
4. SK 044

5. SK 119

6. SB 088 内贮藏穴

7. SB 148 内贮藏穴

8. 挖立柱建物跡(南部)



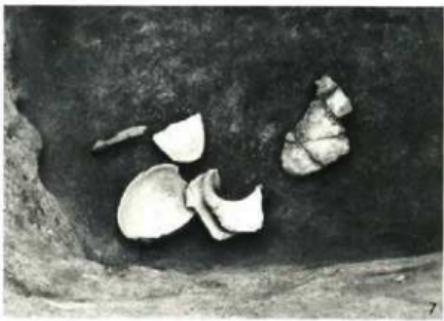
1 . SK014 4 . SK112
2 . SK019 5 . SK078
3 . SK037 6 . SK086



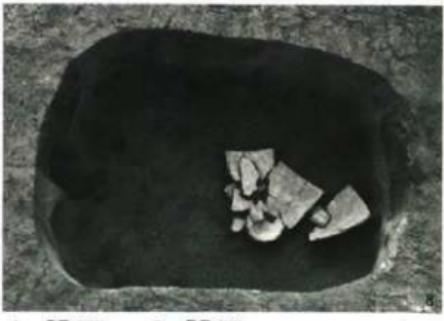
5



6



7



8

1 . SB 069

2 . SB 069

3 . SB 069

4 . SB 039

5 . RB 039

6 . SK 012

7 . SK 045

8 . SK 110



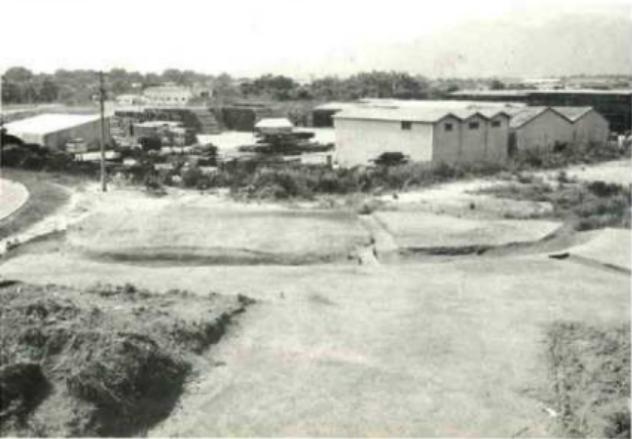
1. 円形周溝墓全景（西から）
2. 主体部（木棺墓）
3. 周溝内土器出土状況



1. 火葬墓（燒骨等殘存狀況）

2. 同 上（壺內部除去後）

3. 同 上（壺除去後）



1. くずれ塚古墳航空写真(調査終了後)
2. くずれ塚古墳墳丘(表土除去後)
(南から)
3. くずれ塚古墳全景(調査終了後)
(南から)



1. 墳丘(調査前)〈北から〉 5. 墳丘構築状況(南から)
 2. 同 上 〈西から〉 6. 同 上 〈東から〉
 3. 同 上 〈東から〉 7. 周溝(南側) 〈東から〉
 4. 墳丘・石室跡 〈北から〉 8. 同 上 〈南西から〉



図 版

(遺 物)



308



375



129



386



174



388



173



393



337



409



414

- 308 S K021出土
 129 S B069出土
 174 . 173 S B091出土
 337 S K030出土
 375 S K045出土
 386 S K050出土
 388 S K051出土
 393 S K052出土
 409 S K058出土
 414 S K059出土



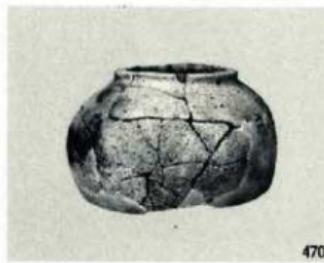
419



468



416



470



429



479



474



480



473



482

419.416. SK060出土
 429 SK062出土
 474~470 SK072・073出土
 479~482 SK086出土



514



67



515



68



517



65



38



69



32



702



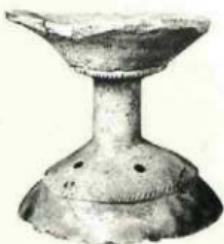
37



72



41



74

514.515. S K110出土
517 S K112出土
38~41 S B034出土
67~74 S B039出土



48



52



53



54



55



50



51



61



57



59



60



63

S B039出土



75



79



76



31



71



89



97



87



94



92

- 75~71 S B039出土
 97~99 S B049出土
 31 S B041出土
 89~92 S B047出土



78



448



79



108



80



391



83



138



93



141

78-93 S B047出土
 448 S K068出土
 108 S B049出土
 391 S K051出土
 138.141. S B069出土



625



627



628



629



626



630



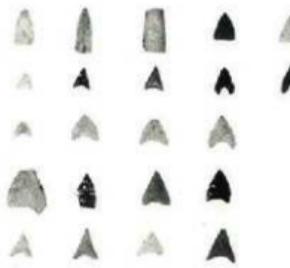
631

625.626. 円形周溝墓出土

627.628. 火葬墓出土

629.630. 火葬墓出土

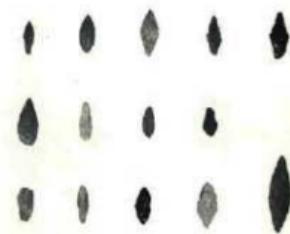
631 火葬墓出土



1



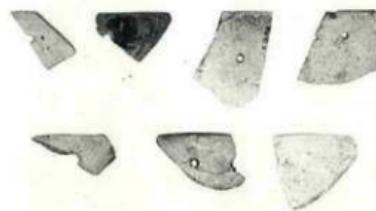
5



2



6



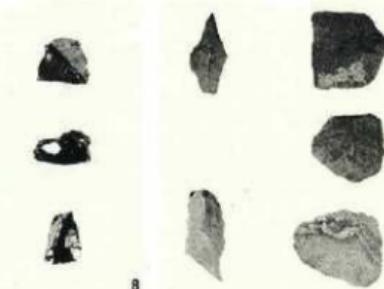
3



7

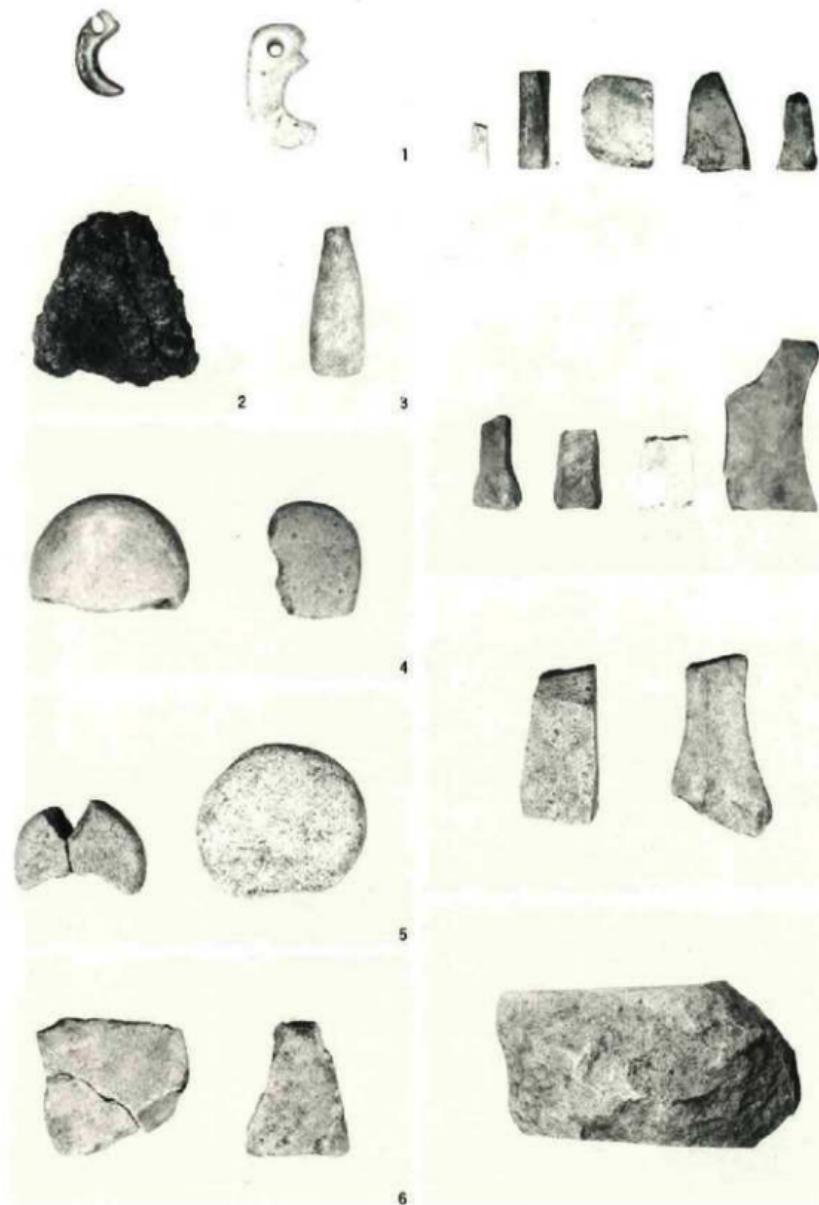


4



8

1・2. 石鏃 5. 石のみ 9. スクレイパー
 3. 石包丁 6・7. 石斧
 4. 紡錘車 8. 石刃



1. 勾玉 4・5. 磨石
2. 鉄鎌 6. 石皿
3. たたき石 7~10. 砕石



632



633



634



635



636



637



639

635



640



641

634



くずれ塚古墳出土

636



641



645



642



646



643



647



644



648



652



1. くずれ塚古墳発掘風景
2. 一本谷遺跡竪穴住居跡発掘風景
3. 同上
4. 竪穴住居跡実測作業

資料の保管

出土遺物・遺構実測図・遺物実測図・遺構写真・遺物写真・トレイス図等については佐賀県文化財資料室（現在、佐賀市水ヶ江一丁目12番9号、佐賀県庁東別館内にある。電話0952(23)4537）で保管・管理しており、その活用が望まれる。このための資料として遺物実測図（遺物登録番号とは別）、遺構写真・遺物写真的登録番号を記して検索の便としたい。なお写真についてはベタ焼きにしたものをカード化している。

(1) 遺物実測図登録番号（土器・石器・鉄器・その他を含め1008点を図化）

（土器） 003899—004033・004077・004201

（石器） 004034—004048・004078—004082

（鉄器・その他） 004284—004287

(2) 遺構写真登録番号（ 4×5 inch・35mm）

(4×5) 811790—811796・811977—812004・812222—812239・813014—813073・

813234—813352・813406—813453・813665—813807

航空写真 814031—814048

(35) 810199—810202・810288—810297・810306—810312・810334—810352

(3) 遺物写真登録番号 (4×5 inch・ 6×7 cm)

(4×5) 830895—830914・830949—831074・831085—831098・831225—831262

(6×7) 830825—830872・830879—830910・830928—830933

